明治三十三年六月五日發兌

女鑑

東京

第貳百六號

女鑑第貳百六號

目錄

よし女



夏の家庭

夏はいまや、にはかにその歩みを早めぬ。布子は疾くに藏められて、羽織も漸く遠ざけられ、袷も亦その主の肌を辭せんとす。昨日まで、紅の花にて、飾られし庭もせも、瞬く間に、綠の樹陰と變はりぬ。冬の家庭、春の家庭をば、既に營み終りて、諸媛は、如何に、その夏の家庭を作らんとはせらるゝ。

夏は暑き時なり。冬の家庭にては、寒さを凌ぐ、爐の畔に、一家團欒の樂しみを觀ること、敢て難き業にはあらざりき。夏の家庭は、團欒にはあまり適せざるが如し。夏は暑き時なり。春の家庭にては、胎蕩たる陽春を樂しむ可く、相携へて、櫻を賞て、桃を喜ばんも、可なるべく、美はしき鳥の聲と和し、芳くはしき花の香に薫じ、暖き家庭の散策を行ふと、甚だ容易きものありき。されど夏の烈日に照されて、觀るものもなき、野山を行けばとて、家庭の娯しみを爲すべきにあらず。夏は暑き時なり。如何にこの暑を凌ぎつゝ、家庭を樂しくおくり終ふべき乎。

夏は悪病多き時なり。夏は人々の躰力大に衰へたる時なり。啻に躰力のみにはあらず、人々の脳の力も、亦甚だ消耗せる時なり。夏は働きの時にあらず。夏は休息の時なり。子弟は何れも、その學校の休業に際して、概ね家庭のうちに留まるべき時なり。家庭に主宰たる人が、その能力を示すべき時は、この際にあり。家庭に主宰たる人が、尤もその心を勞する時も、亦この際に外ならず。

暑き夏の家庭を、涼しからしむる策はいかに。或は海邊に、或は山間に、遠く暑熱を避けて、一家を擧りて、涼風を趁ふが如きは、蓋しその上乘なるものならむ。されどこれ等は、諸媛に勸めむと思へる處にあらず。避暑によりて、家庭を涼からしむるは、何等の手腕をも要せざるなり。かくの如くして、家庭を涼からしめたればとて、諸媛の譽は、寸毫の加はる所なきなり。家庭の内をして、和氣常に絶えざらしむるを得ば、炎熱の暴横を以てするも、遂に如何とも爲るに由なきなり。冬の家庭然り。春の家庭亦然り。夏の家庭は、更に、大に然らざる可からず。一家互に相反目し、弟は兄を怒り、姉は妹のために悲むの類は、唯り、その人に暑さを加ふるのみならず、外よりして之を観るもの、亦將に大に暑熱を感ぜ

んとす。
躰力、脳力と共に疲衰し、加ふるに悪虫盛に發育す。普通の注意を以てしては、病魔の為めに、乘せられ易し。この時、家庭の主宰たらんもの、その責任は、當に平生に十倍すべし。家庭に一人の病者あらむか、これ家庭の不幸たる、固より言ふを須たず。若し、延いて、その毒を、他に及ぼすとあらむか、罪の大なる、實に意の外に出づるものある可し。
僅かに、これ、その一二を語るのみ。而かもその難きこと、斯の如し。若し、その細きを数へ、詳かに擧げなば、更に〳〵、夏の家庭の營み易からざるを知らむ。夏の家庭を營まむもの、須らく、大に心を用ゐる可きなり。





論說

日本女子今後の覺悟（二十二）

三輪田眞佐子

わが國の如き、家族制度の國風には、嗣子の必要あるを以て、適室に子なきときは、妾を養ふも可なりとするは、勢ならんも、後世に至りては、嗣子の有無に拘はらずして、妾を養ふ惡風となれり。蓋し、妾となりて生活する女子は、概ね、人格の尊きを知らざるより、身を汚すを厭はざるに由ると雖ども、いまだ國民道德の進步せざる結果なれば、反省して、その非を悟らざるべからず。即ち、蓄妾は、一家の平和を破り、人倫の大綱を亂すものぞかし。況んや、わが國には、養子制度あれば、若し嗣子なきときに臨みては、近親より養子を以て、家名を繼ぐも可なり。兎に角一夫一婦にし、和氣靄然たる家庭こそ、眞の幸福なれば、將來の國民は、幸福なる家庭を作るを目的とせざるべからず。

博く愛するを仁といふと、韓退之はものしけり。元來人道は、わが身を修むるより、始め、次に忠孝をつとめ、その次は、一般の人を愛し、更に仁の禽獸にも及ぶ境界に達せざるべからず。わが現今の女德は、身を修め、忠孝をつとむるなどは、稍高度に達せんも、なほ一般の人を愛する點に至りては、更に勉勵せざるべからず。

西洋の風俗に於ては、男女席を同くせんか、男子は、女子に、その席を讓るとかや。蓋し、弱者を助くる意にて然らんには、大に良し。されど女子

なればとて、格別に敬して、然るとせんか。少しも理由なきことぞかし。如何となれば、敬は、男女老若、相互に守るべきものにして、女子のみ、敬を受くべきにあらず。故に今後は、滊車中などにても、西洋に倣ひて、女子にのみ席を讓るとせんよりも、小兒、老人、若しくは、婦女を問はず、一般我よりも弱きものを助くるを以て、國民の公德とせざるべからず。おのれ、屢〻、旅行、若しくは、集會などに於て、いまだ、弱者を助くる美德なきを遺憾となせし。昔舜の、なほ、布衣なる時、歷山に耕すや、民皆畔を讓り、雷澤に漁するや、人皆居を讓りけりとかや。實に一人禮を行へば、萬人これを習ふべし。故に、我に禮を加へざる者ある、我が禮の足らざると知るべし。おのれは、人力車に乘る每に、道ならぬことゝ感ずるは、人を牛馬の如く勞役せしむるにあり。そもそも、車夫は、等しく人と生れながら、敎育なきがため、或は、財產なきがため、牛馬の採るべき勞役をつとめ、人を挽きて走るは、憐はれならずや。希くは、社會の人事新まりて、馬車もて、人に代へまほし。實に彼等が背に玉のやうなる汗を流しつゝ、馳せ行くを見ながら、車上にあるは、心苦しき思ひこそすれ。されば、女子たるものは、卒先して、彼等を牛馬視せず、惻隱の心もて扱ふべし。若しこれを憫然と感ぜざる女子なれば、いまだ高尙なる心の女子といふべからず。その他、下婢、下男、若しくは、小使なども、涙ある目を以て、これを監督し、これを使役ずべし。決して、彼等に給料をさへ與ふれば、苦勞するこそ、當然なれと言ひわきて、無益の勞苦を省かざる如き、慈悲なきものとなる勿れ。唯、御するに道を以てすれば可なり。

人は如何なるものに對しても、正義を守り、その人の生命身體を危くせざるは、更なり、名譽財產などを害せずして、反りて、その生活上に便益を與ふるを期すべし。わきて、女子は、慈善の源淵なれば、博愛を以て、我より以下のものを慰さめざるべからず。これを女子の主なる天職となすべし。

女子と衛生（二）

永井潜

第一食物の事(つゞき)

女子は、男子に比すれば、其の躰重少なき故に、其の割合も、亦、少なく、凡そ。

蛋白質	二十五匁
脂肪	十二匁
澱粉	百匁

を取らざるべからずと云へり。此等の量は、多くの學者によりて、動かすべからざる者として信憑せられたり。日本人は、西洋人に比して、躰量少なく、平均五分の一を減ず、且つ其の食物は、植物性の者多くして、脂肪寡なく、澱粉に富むが故に、脂肪に代ふるに、澱粉を以てし、仝じ割合にて、取るべき量を示せば

蛋白質	二十六匁
脂肪	六匁
澱粉	百二十五匁

となる。去れど、日本人の食物、殊に、下等社會の取る食物中には、迚も、斯く多量の蛋白質あらん樣なし。夫れにもかゝはらず、農夫の如きは、始終勞働をなして、毫も差支なきは、大に奇とすべき所なり。之等の事實よりして、大に疑ひを起されけん。吾が東京帝國醫科大學教授隈川博士は、

自躰につきて、精微なる實驗を繰り返され、歐州にても、三四の學者の之の事を研究するありて、遂に蛋白質の量は、斯く迄で多からずとも、之を補ふに足るべき澱粉の量にして、十分なれば、榮養を害せらるゝなきこと、明白となれり。去れど、斯く多量の澱粉を取る爲めには、必ず、多量の植物性の食品を食ふが故に、農夫、或は、勞働者の如き常に躰を使用する者こそ、よく之を消化すれ。静かなる生活をなし、心を勞することと多き上中流の人にては、迚も、永く之を持續することと能はずして、早晩消化器の病を起すに至るべし。去れば、よく注意して、食物の配合をなし、必要なる分量に欠くる所なき樣注意すべし。今次に、數種の植物成分の分析表を示さむ。

第壹表

諸食用品分析表

（甲）野菜及海藻類分析表（田原純氏の分析に依る）

名稱	百匁中ノ蛋白質	仝 脂肪	仝 澱粉	纎維素	灰分	水
	匁	匁	匁	匁	匁	匁
さつまいも	一、三五	〇、一九	六、六三	二、四八	〇、九三	六六、二八
さといも	一、四〇	〇、〇八	一一、七〇	〇、六三	〇、九九	八五、二
やつがしら	二、七八	〇、二九	二五、六九	一、一五	一、二八	六八、八一
ながいも	二、七五	〇、一二	一七、九七	一、七九	一、一七	七六、二〇
つくいも	二、八五	〇、一一	一四、七一	〇、七五	一、二六	八〇、三二
蓮根	一、七〇	〇、〇八	一〇、八六	〇、八四	一、一三	八五、三九
かぶら	一、六二	〇、〇七	二、八三	〇、七一	〇、七八	九四、〇〇
くわゐ	四、二七	〇、二〇	二四、三六	〇、四五	〇、四四	六九、二八
だいこん	〇、七三	〇、〇一	三、七〇	〇、五一	一、四九	九四、五五
にんじん	一、二五	〇、三五	七、四一	一、一〇	〇、七七	八九、一二
牛蒡	一、三六	〇、〇七	二五、二三	二、一八	〇、六三	七〇、五三
ねぎ	一、四七	〇、〇七	四、三三	一、〇六	〇、四四	九二、六三
ゆり	三、三四	〇、一一	二四、一五	一、四二	〇、三五	六九、六三
馬鈴薯（ジャガタラ）	一、四九	〇、一〇	一九、二二	一、三六	一、〇三	七六、八〇
筍	一、八二	〇、一二	五、六四	一、四二	〇、七四	九〇、六二

せり	二、〇一	〇、一三	三、二二	—	一、〇四	九三、六〇
ぜんまい	二〇、二六	〇、四九	四一、九六	二〇、二五	一〇、七四	六、三〇
わらび	二、八三	〇、一三	一、四一	三、二七	一、一八	九一、一八
ほうれん艸	二、三〇	〇、二七	一、六五	〇、五七	一、三〇	九三、九一
いもがら	四、〇八	二、〇九	四一、〇三	二一、六三	八、八三	二二、三四
蕗（フキ）冬	〇、四〇	〇、〇四	二、七三	〇、七一	〇、五二	九五、六〇
小松菜	二、五一	〇、五二	一、一八	一、七九	一、三八	九二、六二
唐菜	一、七四	〇、二二	〇、九三	一、一七	一、八九	九五、〇五
三ツ葉	〇、八六	〇、一二	二、四六	一、二八	一、三二	九三、九六
京菜	二、一二	〇、一六	〇、二一	一、一六	一、〇七	九五、二八
銀杏	三、八七	二、一八	四一、七二	〇、三九	一、八五	五〇、〇〇
白胡麻	二〇、五四	五一、五七	一二、六〇	—	八、三六	六、九三
黒ごま	一九、五六	四四、一五	一九、四三	—	一〇、一二	六、六五
きうり	〇、八五	〇、〇八	一、九六	—	〇、四七	九六、六四
まくはうり	一、一五	〇、四八	四、一〇	一、二四	〇、五九	九二、四四
なんきん	〇、五六	〇、一三	六、〇八	二、一五	〇、七五	九〇、二四
さうがん	〇、二六	〇、〇二	一、七二	〇、三五	〇、二三	九七、四二
栗	二、九〇	〇、三八	三六、四九	一、一二	一、一二	五七、八九
わかめ	一一、六一	〇、三一	三七、八一	—	三一、二五	一八、九二
ひじき	一一、三七	〇、四九	五四、八四	—	一七、五六	一五、七四
こんふ	七、一一	〇、七八	四七、七〇	—	二一、二四	二三、〇八
青海苔	一九、三五	一、七三	四六、八一	—	一九、二一	一三、五三

茄子	一、〇〇	〇、〇六	三、一一	一、四一	〇、四二	九四、〇〇
乾海苔	三三、七五	一、三〇	四一、二二	—	九、七五	一三、九八
あらめ	九、六五	〇、四六	五一、六三	九、七九	九、七九	一八、七五
しゐたけ	一一、六二	一、六八	六七、七二	四、三七	四、三七	一四、五九
まつたけ	三、七三	〇、七六	一二、七八	一、〇〇	一、〇〇	八一、七三
乾瓢	八、一九	一、五四	五四、三一	四、九二	四、九二	二〇、三五
蒟蒻	〇、〇一	—	三、一〇	〇、四八	〇、四八	九六、一五
たくわん漬	一、三八	〇、〇六	六、〇一	一、五三	八、三〇	八二、七二
三河島漬菜	二、二八	〇、三一	三、五二	二、二三	〇、四八	九一、二五

（乙）飯及ヒ麺類

名稱	百分中蛋白質量	仝脂肪ノ量	仝澱粉ノ量	仝纖維素量	仝灰分	仝水分
飯 越ヶ谷産上白	三、〇〇	〇、〇四	三三、七一	〇、二三	〇、一六	六二、八五
飯 仝中白	三、四九	〇、〇五	三四、〇二	〇、二三	〇、一四	六二、〇六
飯 庄内産中ノ下	三、〇六	〇、〇六	三一、五三	〇、三〇	〇、一八	六四、八五
飯 秋田産下ノ中	三、〇九	〇、〇五	二九、七七	〇、三三	〇、一八	六六、五六
粥飯	三、七七	〇、二三	一八、七四	〇、七七	〇、四三	七六、〇六
そば	一三、一三	二、七二	六八、六六	一、一六	一、四三	一二、九〇
煮うどん	四、八六	〇、一〇	二五、九三	〇、四四	〇、三五	六八、三二
煮素麺	二、四五	〇、〇七	一七、一一	〇、二九	〇、二九	七九、九六

（丙）菽穀

名稱	百分中ノ蛋白質	仝脂肪	仝澱粉	仝纖維素	仝灰分	水
黒豆	四〇、二五	八一、二六	二一、七九	三、八八	四、五五	一一、〇九
大豆	三六、七一	一七、四三	二四、九三	二、四七	五、〇〇	一三、四六
小豆	二二、九七	〇、三八	五一、六七	四、四四	三、五四	一七、〇〇
豆	二三、六九	〇、五六	五一、〇三	七、三〇	二、四九	一四、九三
そらまめ	三八、八八	一、二九	四九、七[illegible]	一、二二	三、一一	一五、七六
ゐんげん	二〇、三〇	一、〇七	五三、一九	四、四六	三、四七	一七、五一
菜豆さや共	三、六八	〇、二〇	三、八〇	二、八八	〇、九一	八八、五二
やへなり	二五、五九	〇、七〇	五二、六〇	五、〇一	三、二五	一一、八九
なたまめ	二、三六	〇、一四	五、三二	二、二八	〇、九一	八八、九六
ふじ豆	二、二六	〇、一五	二、三五	二、四六	〇、六二	九二、一六
豆腐	六、六五	二、九五	一、〇五	〇、〇二	〇、六四	八八、七九
油揚	二一、九六	一八、七二	〇、四九	〇、〇八	一、三五	五七、四〇
雪花菜	三、六六	〇、八四	六、五五	二、九〇	〇、五九	八五、六六
ゆば	五一、六〇	一五、六三	六、六九	〇、四六	二、八二	二二、八五
納豆	一九、二六	八、一七	六、〇九	二、八〇	一、八六	六一、八三
白味噌	一一、一二	四、九二	一四、〇二	三、八三	一〇、一四	五五、九七

（丁）鳥肉獸肉魚肉貝類分拆表

名稱	百分中ニ於ケル蛋白質量	仝脂肪量	仝澱粉	仝灰分	仝水
鷄肉（肥）	一八、四九	九、三四	一、二〇	〇、九一	七〇、〇六
仝上（瘠）	一九、七二	一、四二	一、二七	一、三七	七六、二二
鴨	二二、六五	三、一一	二、三三	一、〇九	七〇、八三
牡牛肉	二一、三九	五、一九	〇	一、七一	七二、二五
牝牛肉	一九、八六	七、七〇	〇、四一	一、〇七	七〇、九六
豚肉（肥）	一四、五四	三七、三〇	〇	〇、七二	四七、四〇
仝上（瘠）	一九、九一	六、八一	〇	一、一〇	七二、一八
馬肉	二四、四九	〇、七二	〇	一、一七	七三、六三
鯛（肥）	一七、六〇	三、〇七		一、三八	七七、九〇
仝（瘠）	二〇、二八	〇、七五		一、三六	七七、六一
ひらめ	一九、一六	〇、四五		一、一二	七九、二五
かれい	二一、九三	〇、七四		一、四五	七五、八八
鯵魚	一八、一二	三、三〇		一、二〇	七七、三八
あゆ	一七、六六	一、八九		一、五五	七八、九〇
さわら	一九、二一	一、六六		一、三五	七七、七八
鮪（肥）	一五、七九	一〇、六四		一、八二	七一、七五
仝（瘠）	一七、〇七	四、五一		一、四二	七七、〇〇

松魚	二五、〇六	一、三一	一、〇〇	七二、七三
魚鰊	六八、四四	一三、八三	六、八五	一〇、八五
さば	二一、一〇	四、八八	一、五二	七二、五〇
このしろ	二〇、四三	四、七八	一、四五	七三、三四
はぜ	一八、三五	〇、五〇	二、〇二	七九、一六
鯔	一七、八六	一、四五	一、二三	七九、四六
きす	一八、〇九	〇、六〇	一、三二	七九、九九
さわら	一九、九八	〇、九一	一、二一	七七、九〇
鯛	二一、九六	一、四五	一、一六	七五、四三
石首魚	一三、二四	二、八三	〇、九六	八三、〇七
鯉	一八、九四	〇、八三	一、三七	七八、八六
すゞき	一八、六二	二、五九	一、〇九	七七、七〇
あんこう	一三、〇七	〇、一二	〇、九五	八五、八六
いわし	二一、三九	六、七三	一、六四	七〇、二五
あじ	二一、〇〇	〇、七五	一、五三	七六、七二
あいなめ	二一、〇三	〇、四五	一、五七	七六、九五
むつ	一七、九五	六、二〇	一、一四	七四、七一
針魚	三九、一八	一、六〇	二、三七	五六、八五
いさき	一九、六二	〇、八〇	一、三四	七八、二四
しら魚	一八、七三	〇、三〇	一、五八	七九、三九
くろたい	二三、一四	一、七二	一、四〇	七四、七四
かます	一七、九九	二、一一	一、二五	七八、六五

なまず	一八、三五	一、四一	一、二〇	七九、〇四
うなぎ	一八、〇九	一一、五三	一、一四	六九、二四
さぜう	一八、四三	二、六九	一、五六	七七、三二
さめ	二四、八二	〇、五〇	一、〇九	七三、五九
たなご	一八、五五	一、一八	一、二七	七九、〇〇
かさじ	二〇、〇七	〇、四一	一、一四	七八、三八
をこぜ	一八、四二	〇、二〇	一、二四	八〇、一四
かんぱち	二一、一二	〇、八八	一、五七	七六、四三
したびらめ	二二、三七	〇、八七	一、四七	七五、二九
いせゑび	二一、五二	〇、四二	一、七七	七六、二九
しばゑび	一八、九八	一、〇二	一、五一	七八、四九
こた(干物)	七三、一四	一、二八	六、七五	八一、八三
いか	一九、一二	〇、五六	一、四一	七八、九一
鹽鮭	二六、一〇	三、一四	九、二〇	六一、五二
鹽たら	一八、六〇	〇、一五	三、五五	七七、七〇
おばけ	七、六七	八一、九四	二、二五	八、一〇
じろすぼし	四九、六二	二、〇七	三、八〇	四四、五一
かずのこ	二〇、六四	一、二五	〇、四五	七七、六六
するめ	六九、五三	三、二三	六、一七	二一、〇八
しこ目刺	二九、一八	六、二〇	九、九一	五四、七二
鰹節	七五、六〇	五、一一	五、〇二	一四、二七
かまぼこ	二〇、八九	〇、〇七	二、四三	七〇、三七

蛤(はまぐり)	一三、一九	〇、八二		一、八八	八四、一二
蜊(あさり)	一三、二〇	〇、七七		一、九六	八四、〇四
あわび	二四、五八	〇、四四		一九、八	七三、〇〇
蜆(しゞみ)	一八、四〇	〇、八四		一、一九	七九、五七
牡蠣(かき)	八、四五	〇、八九		〇、七七	八九、八九
あかがい	一五、七九	〇、四五		一、七二	八二、〇四
ばかがい	一一、〇八	〇、五六		二、二〇	八六、一六

(備考) 表中するめ乾魚等は蛋白質に富むこと夥多しきも之等のものは干物としての分析なる故に水分少なくして少なき容積の中に割合多量の成分あるべく尚ほ之等のものは纎維性のひこむ性の物を含み消化し難し故に只た表中にて蛋白質多きものを以て直ちに滋養ある食物とは云ひ難きことあるべし一般に纎維素を含むこと多きものは消化吸收の結果宜しからずとす

第二表（ケーニヒ氏分析による）

名稱	百匁中ニ於ケル蛋白質量	全脂肪	全澱粉
林檎	〇、四匁	—匁	一三、〇匁
じやが芋	二、〇	〇、一	二〇、〇
婦人の乳	二、四	四、〇	六、〇
牛乳	三、四	四、〇	五、〇
米	八、〇	〇、九	七七、〇
鷄卵の白味	一三、〇	〇、三	—
油多き魚（うなぎ）	一三、〇	二八、〇	—
卵の黄味	一六、〇	三二、〇	—

以上の表によりても知らるゝが如く、動物性の食物は、一般に蛋白質及び脂肪に富み、之に反して、植物性のものは、之の二つの者を有すること寡なくして、澱粉及び全く消化せられざる纎維素に富めるを見て、近來更らに、進みて、是等の食物を取り、消化器中に於いて、何れか尤も、よく吸收せられて、體成分となるかを檢せしに、次の如き成績を得たり。されば、最も容易く、吸收を受くる食物こそ、最も滋養あるものと云ふべきなり。

第三表

	百匁中吸收セラレザル蛋白質	百匁中吸收セラレザル脂肪	百匁中吸收セラレザル澱粉	百匁中吸收セラレザル無灰固形分
生鮭(サケ)	二、〇匁			二、七匁
生鯛	二、三			三、二
豆腐	三、九		一一、四	四、八
棒鱈(タラ)	四、七			四、四
干鰊(ニシン)	七、一		〇、五	七、二
米飯	一八、八			二、二
仝	二一、〇		〇、五	二、四
煮豆	三八、三		一一、一	二四、四
仝	三〇、九		一八、五	三三、二
麥飯	五九、七		五、〇	一二、一
仝	四八、一		五、五	一二、六
仝	五一、八		七、一	一七、三
餅(モチ)	三五、七		〇、一	四、六
豆腐、味噌、飯	一七、九		二、五	六、八
油揚飯	五、七		〇、五	三、二

第四表

麵類消化吸收表(醫學博士森林太郎氏實驗)

	百匁中吸收セラレザル固形分	百匁中吸收セラレザル蛋白質	百匁中吸收セラレザル澱粉
うどん	一、七匁	五、七二匁	〇、七六匁
さうめん	三、一	一〇、三七	一、三七
そば切	五、七	二一、一〇	二、七九
そばがき	八、〇	二五、七〇	三、二〇

第五表

諸種食品中蛋白質消化ノ吸收表

名稱	百匁中吸收セラレザル蛋白質
牛肉(仝シ人ニテ二回ノ成績)	二、五匁 二、八
卵	二、九
牛乳及乾酪(仝シ人ニテ三回ナセル成績)	二、九 四、九 三、七

牛乳（四人ノ異ナリタル人ニナセル四回ノ成績）	六、九 七、〇 七、七 一二、〇
豆の粉	八、二 一〇、五
唐もろこし粉	一五、五
米	二〇、四
ぱんと豆	一二、乃至二〇、〇
豌豆（皮ヲ去リテ軟カク煮タルモノ）	一七、五乃至二七、八
馬鈴薯（ジャガタライモ）	三二、二
黒ぱん	三二、〇

第六表

諸種食品中脂肪ノ消化吸收表

名稱	百分中吸收セラレザル脂肪
豕脂	七、八乃至一七、四
ばた	二、七
卵	四、四
馬鈴薯とばた	三、七
牛乳	七、一 四、六
牛乳及び乾酪	二、七乃至一一、五

（脂肪の吸收せらるゝとは斯く完全なるものなれども一般に之のものを消化し難しと稱ふる所以のものは脂肪は胃中に於ては少しも變化することなく腸中に行きて初めて吸收せらるゝものなり故に胃中にある時他の食物を包みて胃液浸透を妨げ其の物の消化を遲からしむるによりてなり）

三の結果によりて見るも、動物性の食物は、植物性の物に比し、吸收を受くる事も、大に容易きを知るに足るべし。之植物中には、纖維素紙は、まつたく、之の者より成るを含むと多く、爲めに、消化を妨ぐるによる。去れど如何せん。肉類等は價貴くして、一般に、之を常食と爲す事は、經濟上許さゝる事もあるべし。故に、之に代ふべき、最も良き物は、値廉にして、蛋白質を含む事多き豆類なりとす。されど豆類は、又纖維素を含む事多く、消化惡しくして、吸收せらるゝ事少き者なり。故に、之が調理に注意する事を要す。乃ち、前の表にて見るが如く豆腐及び、ユバとなして、食ふを以て、最も良しとす。但、豆腐は、水分、多き物なる故に、充分なる蛋白質を之より得んとせば多量に食せざるべからず。

尙は又魚類の吸收は、一般に宜しきものなるが故に、吾が邦の如き海國にして、魚類の供給遍ねき地にありては、强て、牛豚の肉を求むるよりも、却つて、新鮮なる魚肉を適宜に取るを優れりとす。

女子の國家に對する務（上）

岸田松二郎

國家の富强文明は、單に國民の智識高きがためのみならず、主として、道義の發達、及び、國民的思想の充滿せるに在り。

戰勝國の榮譽を荷へる、我が國民は、永く、此の光榮を保ち、東洋唯一の富强國たらしめんとするの覺悟なかるべからず。蓋之を完からしめんとするは、主として、國民一般が有する所の國家的觀念如何にあり。

今や、我が國の人口四千三百萬に上り、而して女子は、實に此の全數の半面を充せり。されば、男子が如何に能く、國民的思想を充すと雖ども、世の女子たるものにして、國家に對する觀念の薄弱なるときは、爭でか富强の基を開くことを得んや。」元來、我が國の女子は、一家に對するの思想を養成せらるゝと雖ども、國家に對して、有する所果して、能く缺くる所なきか。女子が國家に對して、負ふ所の責任は、直接に女子の頭上に落ち來らざるが如しと雖ども、國家の存亡成敗を以て、敢て、關知する所にあらずとなさば、是國家の半面を痲痺せしめたるが如けんのみ。

女子は兵役の義務なく、又租稅の負擔を直接にするもの鮮し。國家行政の正面に立て、諸般の政務を料理することなく、農工商の實權を握て、國家經濟の表面に關知することなし。然るも、國家の貧富に關し、又、其の强弱盛衰に干與する所以のものは、蓋陰裏に在て、强大の力を致し、常に社界の潜勢力たればなり。現今、女子敎育の必要を認め、高等敎育の具、日に月に具り至りて、又、遺憾なきが如しと雖ども、國家に對する責務の如何を知了し、國家的思想の充實を計るも、亦須要の業といはざるを得ず。乞ふ吾人をして、女子の國家に於ける責務の如何を研究せしめよ。

（イ）女子と國民の德義及品位

將來に於ける我が國の女子は、只一家の良妻たり、一人の賢母たるに止まらず、猶進で、大日本帝國婦人の品位を保ち、其の德操を發揚し、其の識見を備へざるべからず。苟くも、國家的觀念の缺如せば、其の獘や、隣保相倚り、相結で、以て國家の福利を計るを忘れん。是國家の大患なり。

我が國戰勝の結果として、宇内强國の列に班し、

東洋文明の中心と認められたるより、久しく、枉屈せられたる境界を脱して、全く對等の條約を結び、世界に於ける、大日本帝國の光輝を揚げたるは、吾人同胞の等しく、快事とする所なり。然るに、改正條約の實施せられたる當初に於て、無頼の外人、我が同胞の二人を慘殺したる椿事の起りしこと、亦、均しく驚天動地の感ありたり。何事ぞ、斯かる無頼漢の對手たる二人のものは、即ち、我が同胞の婦人にして、其の起源は、實に、嘔吐に堪へざる醜事より、釀出せること、豈恨事と云はざるべけんや。又豈、我が帝國婦人の品位に關すること、尠しとせんや。近來、我が國婦人の渡航を企つるもの、爪哇に、桑港に、臺灣に、續々相繼くものあり。其の目的を問へば、巧に法網を免れて、醜業を營むもの、甚だ多しと。蓋、彼等は、固より國家の何物たるを解せず。又婦德の何たるをも知らざるに坐するが故なりと雖ども、苟くも、籍を、我が國に有するからは、我が國婦人の品位に關すること大ならずとせんや。

昔時元冦襲來の當時、敵人婦女の掌を貫きて、之を艦身に提げたるも、猶且、泰然として、醜虜の辱を受けざりしは、凛乎として、今猶、千歳を照せり。今や、渡航の婦人、醜を彼に賣るもの斯の如しと。嗚呼世を經る數百年と云ふと雖ども、古今、貞不貞、此の如きを思はゞ、轉た慨然たらざるを得んや。由來彼等の頭腦に存する所、固より、識見あるにあらず、國家觀念あるにあらず、畢竟、狡奴の陷穽に陷り、身を免るゝの地なきによるもの多しと雖ども、其の業の陋醜を厭はざるものは、一攫千金を懷にし、郷關に歸來して、綺羅に驕り、揚々として、王公の婦女に僭擬せんとするの淺慮に外ならず。外觀の盛裝に眩惑して、敢て行

爲の如何を顧みざるは、今の俗弊なり。新奇を競ひ、華奢を衒ふは、今の習弊なり。有識達観のもの、夙に之を慨すと雖ども、滔々として、此の俗弊渦中に入りて、顧みざること、此の如くならば、凛乎たる貞節を消耗し、高潔なる品位を失墜して、社會の腐敗を増大し、男子の鐵腸を朽壊して、鞏固なる國家民人の徳義を墮落し、曝骨流血の餘に攫取したりし榮譽を、損銷し、國家の元氣を銷沈すること、火を睹るより瞭かなり。嗚呼風俗の醇否と國民の徳義と、全く婦人の手にあること、斯の如きを思はゞ、豈に寒心愼思せざるべけんや。





克己

後光明天皇は、天資英明におはしましき。御性、甚、雷を畏れ給ひしに、或時の古人の語に、「人は、須らく、性偏の、最も克ち難き所より、克去るべし」とあるを思ひ出でさせ給ひ、朕が、雷を忌むは、是、性の偏なり。「朕、いかでか、之に克たざるべき」と宣ひて、常に、之を矯めんと思ばし給へり。かくて、雷鳴の日、玉座を、紫宸殿の廊下に移さしめ給ひ、雷の終るまで、端坐して動き給はず。かくし給ふこと、度々に及びければ、遂に、雷を畏れざるに至らせ給ひきとぞ。

又、天皇、いたく、酒を好ませ給ひしかば、左右の公卿、玉體に恙あらんことを憂へ奉れり。かくて、ある時、宮中に、御宴を設けさせ給へるに、徳大寺公信、闕下に伏し、恐多きことながら、陛下の飲酒を過ぐさせ給ふは、臣等の、朝夕に憂へ奉る所なり」と奏しければ、天皇、其の言を容れさせ給ひて、深く、忠諫を賞し給へり。

人の性情は、始より、完全ならずして、多くは、偏する所あるなり。常に、己の長所と短所とを知り、長ずる所は助けて益々長せしめ、短なる所は補ひて、漸長せしめん事を務めざるべからず。又、自、其の惡たることを知らず、心の欲するに從ひて、之を行ふとも、人の忠告を受け、或は、自、反省して、其の非なるを知らば、速に、行を改むべし。性偏を矯め、非行を改むるは、克己の大勇あるにあらざれば能はざるなり。

後光明天皇の、よく、御性の偏する所を悟らせ給ひて、遂に、之を矯めさせ給ひ、又よく諫を納れ給ひて、其の行を改めさせ給ひしが如きは、實に、大勇の御心と謂ひつべし。後世、英主と稱へ奉るも、まことに、故あるなり。

凡、人、常に、言行を謹み、己に克ちて、放縱ならしむべからず。殊に、人に對しては、喜怒を愼みて、之を肆にすべからざるなり。喜怒を肆にするは、是、亦、克己の勇なきなり。喜ぶべきに喜び、怒るべきに怒るは、其の本心を矯飾せざる所以なれど、之を肆にして、節制することなくば、必、禮を亂り、人に卑めらるべし。故に、よく、之を、愼みて、顏色に形さざらんことを心がけざるべからず。是、即、克己の勇を養ふ所以なり。

よし女

田山とり子

安藝國豊田郡沼田下村に、三右衛門といふものありけり。其の家、豊といふほどならねど、些少ばかりの田も畠をも所持したりければ、朝夕の炊煙にことかくこともなく、たゞ、夫婦とも〳〵、仕事をいそしみ勵みて、樂しく世を過しけり。

斯くばかり羨しき夫婦なかにも、子寶は、思ふまゝにもならねば、是のみ、朝夕の喞種なりき。九十にあまりて、始めて、他人の子を養ひて子となし、これに婦をむかへて、やう〳〵初孫を見むことを樂む身となりぬ。されど。古人の、思ふこと隨ならねばこそ憂世とは言ひけめ、といへりし如く、老夫婦が、初孫を見し時に、孫の父なる養子は、不孝者よ、不屆者よと村人にも指彈せられ、實家に逃げかへり、猶、實親たちにさへ疎まれ居たる時にて、老夫婦は、既に、愛しむべき男の子といふものを失ひたる後なりき。

婦の名をば、よしといひき。名は實の賓なりとは、はやくより言ひ舊るしたることなれど、世の中には、善右衛門といふに惡左衛門多く、お直といふに直からぬのみ多きを。これは、また、其の名に背かず、例まれなるよき婦なりけり。苦諫をも遂に聞きいれず、他人にさへ親にさへ見捨てられたる夫のことは、泣く〳〵も、思ひ斷り、一向、幼兒を養育み老いたる親をいたはり、餘念もなし。村人も最あはれがり、まだ二十歳をも超えぬ身の、ことさら、弱女の手一つして、幼兒と老親とを養はむこと、遂には堪へがたかるべき事なれどとて、贅婿とれと勸むる者うちしきり、某家の次男ならばよけむ、誰人の弟ならば相應しからむなど、

心を碎くものも尠からざりしが、よし女は、つや〳〵この事を承諾はず、其は、再び不孝なる人を迎ひとりて、老いたる親々に、また更に、憂き目を見せ申さむ恐なき能はざるのみならず。嘗つて夫たりし人の、軀體こそ猶この世に殘りつれ。わがための夫といふなつかしき名は、彼の時に死に去せて、今は、世にわが貞節を盡すべき方なくなりぬ。他人を迎へて夫とせむことは、亡くなりし、わが夫といふ名に對ひて恥しさ限なし。老幼の上は、身を碎きても養ひ遂ぐべしとて、これより、朝夕つとめはたらくこと、丈夫にも超えたりき。

世間には、眞實の親『一度婿となり、養女となりし上は、またこれ、眞實の親子にして、其の間に、眞實と假設との差別はあらざりけるよ。よし、然もあらばあれ』わが生の親の命令らるゝをさへ、聞えぬさまして、怠り負せむと謀むものなきにあらずとかや。萬一、然る方の僻事を思ひいづることもあらば、この、よし女が上を考へよかし。

たゞ、子供一人を育て上げむにも、其の心づかひ種々は兎に角に、食物のこと衣服のこと、さては定まりなき寢起のこと、親心には、とも思ふまじれけども、さて、世話厄介容易のことにあらず。女の身にては、わが身一つだに、糊口さむこと、また、いと難きわざならずや。然るを、幼兒の養育をかねながら、猶況んや、病みたるにはあらずといへ、九十にあまれる二人の老親に、不便の思なからしめむとつとむる、其の勞苦艱難は、ことさらに記さずとも、容易く想像し得られつべし。

姑は、百歳となりなんとする時遂に死去りぬ。舅は百歳を超えて、猶、病むといふことは、絶えて無かりしかども、尋常の人のいたるまじき高齢に達したる軀體は、千歳を經たる大木の朽幹が、根

より岐れ生へたる嫋々しき若木によりて、僅に雨露をうけ、辛うじて仆れざるが如く、稀々は、言ふこともあれど、常にうちふし居て、眼ひからすのみなり。然れば、普通の食物にては咽喉に通らず。香煎、かゆもち等、一日に五六度づゝも進め、折々は、酒もて唇をうるほしやりけり。

彼の幼兒は、年頃の丹精にて、最なむ素直に成長せしめたりし。即ち、親子かたみがはりに老人の介抱し、夏の日の暑堪へがたき時には、彼田畠の事をいそしめば、是は、老人の側に侍り、團扇をとりて扇ぎ涼ませ、冬の夜の指も墜ちなむばかりの折、子は、草鞋つくり繩をぬひて、生活の業をつとむれば、母は、老人を圍爐裏の傍に抱き寄せ、終夜、火を焚きわかして寒からざらしめき。

斯等の比類稀なる行狀を、村長より、具に官に上申したりしかば、天明四年三月廿五日、褒米をたまはり、厚く其の特行を賞せられたり。時に、よし女年四十七、舅三右衛門は百十一といふ珍しき高齢に達したりきといふ。



家政

女禮稽古の仕方

有住常子

飯たべ様前のつゞき

扨、香の物をたべ、すぐに箸先をゆすぎ、左手をそへ、箸をそろへ、下に置き、兩手に椀を取り、湯に呑むべし。付合せの山椒などは、時宜によりて、箸をつけぬもくるしからず。又、臺引、燒物の類置ならべたる品々をたべぬを、法式とするに

はあらざれども、後世は、臺引物も、大海老、大かまぼこの類にて、とてもたべ盡しがたきものなれば、箸をつけ取りあらさんよりは、時宜により、其儘ひかするもよろし。先食の初めになますをたべるは、酢は胸をすかす能あれば、むせばぬ爲の法なり。又、汁を吸事も、咽のとほりを試るなり。去かれば、兩三度程汁に立歸りて、飯をたべることも見えたれど、わづらはし。一度にてもよろしかるべし。又本膳に平をくみ付る流儀もあれど、平は元らい杉箱の名ごりにて、二の膳に付るが法なり。二の膳無時は、引おとしにもすべし。又、風流のせきにては、たべ殘りの品々を取あつめて、帖紙に包み、持歸るなどのこともあれども、いやしげなり。押並べてかやうのふるまひは、致すべからず。主人の心にまかせて有べきなり。飯椀、およびさらまでもぬぐひて置くなどは、法師のふるまひにて、俗人の法にはかなはず、たゞいやしげならぬ樣に有べし。扨、湯を呑みたらば、左手に、右手をそへて、飯椀の蓋をするなり。通ひの者は、後くわしを兩手に持ち、進み出で、先上座の方に置き、本膳を少し、下座に取のけ、其の後へくわしを進め置き、本膳に向ひ、少し前に引、左手にて、膳の中を受け、右手をふちに掛け、持ちて立ち、いつもの如く足を引き、次に入るなり。

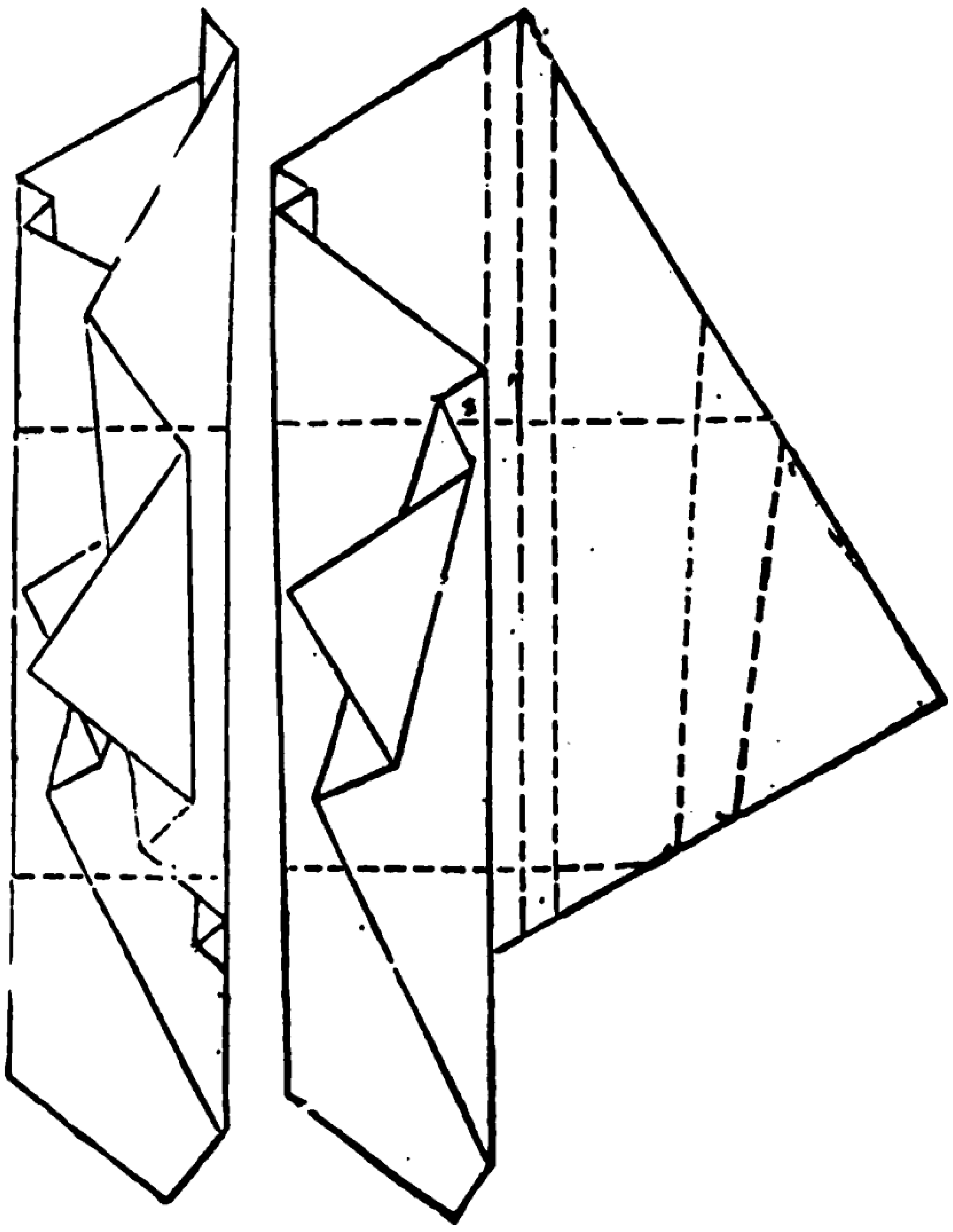


折方

有住くわう子

眉包作

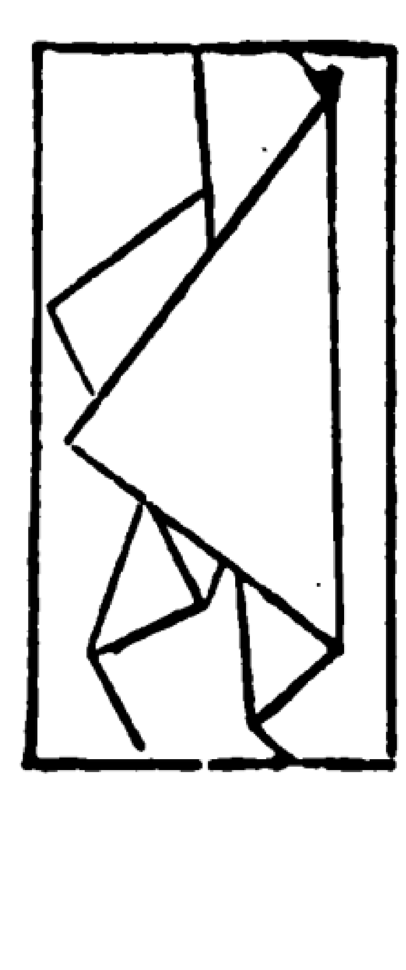
是も、眉を拂ふ時の筆様の物なり。
包みをはらは、水引をかくるなり。



[illegible]

茶の湯

（折りあかり）



茶禮初學

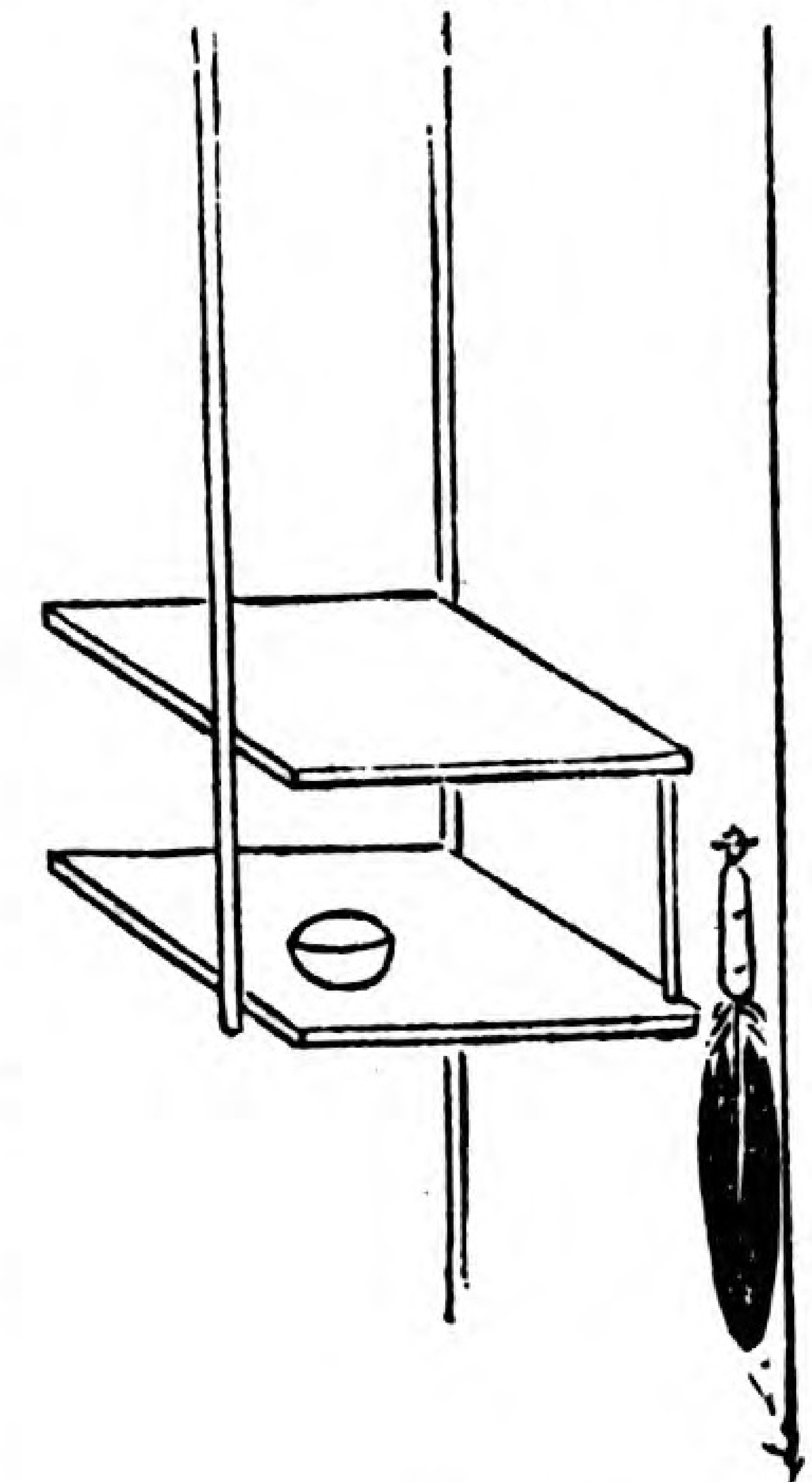
孤峰庵碌仙齋不羨

關 葦 雄

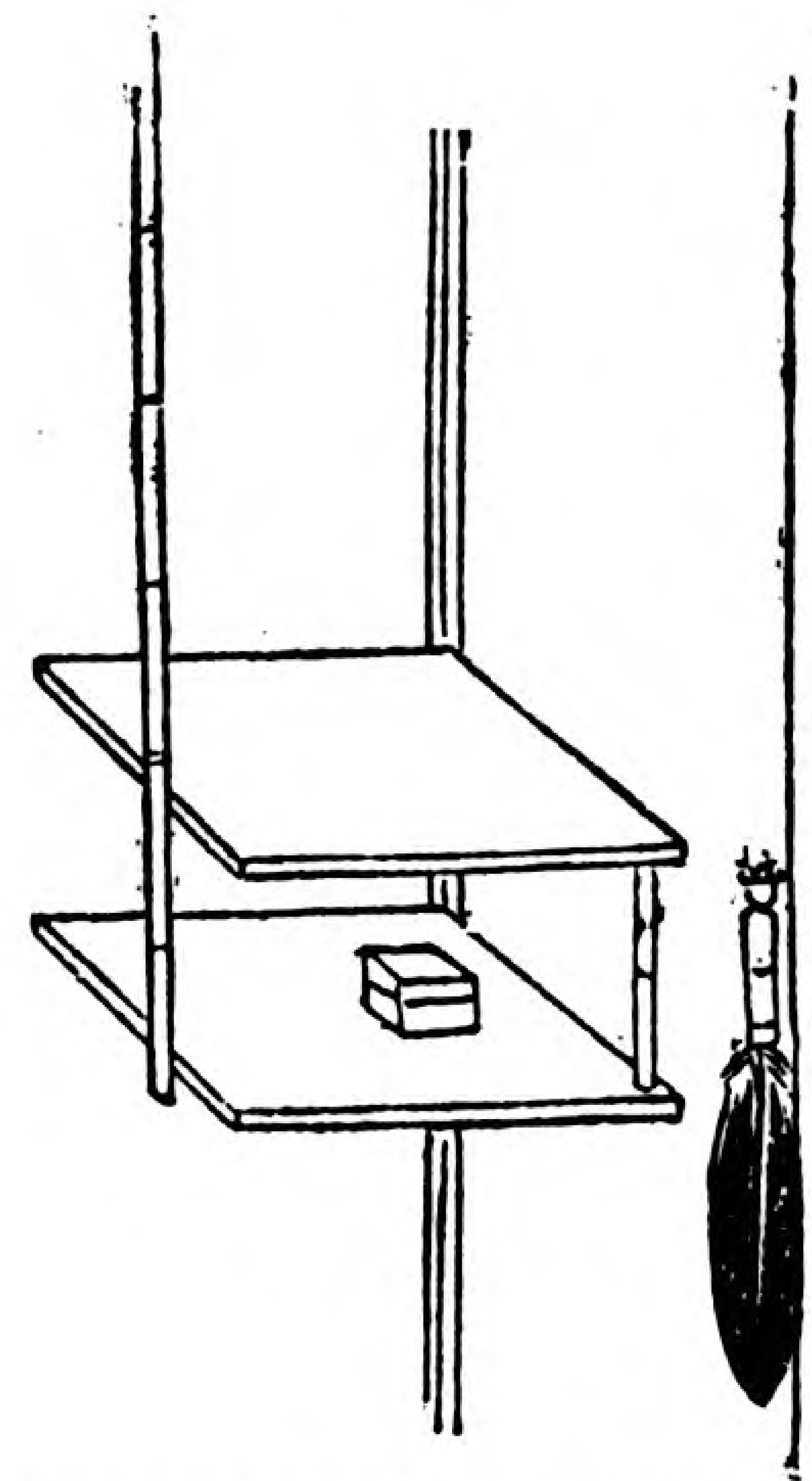
飾り上棚に柄杓、蓋置、茶入、香炉など飾りてもよし。茶入置ても、飾には、不成水屋に置しも同様なり。點茶後、柄杓、蓋置殘しても、飾りには、不成。故に湯返しをせず、塲合に寄、殘すことあるべし。

不羨曰、如圖式、棚に香合、柱に羽箒飾置

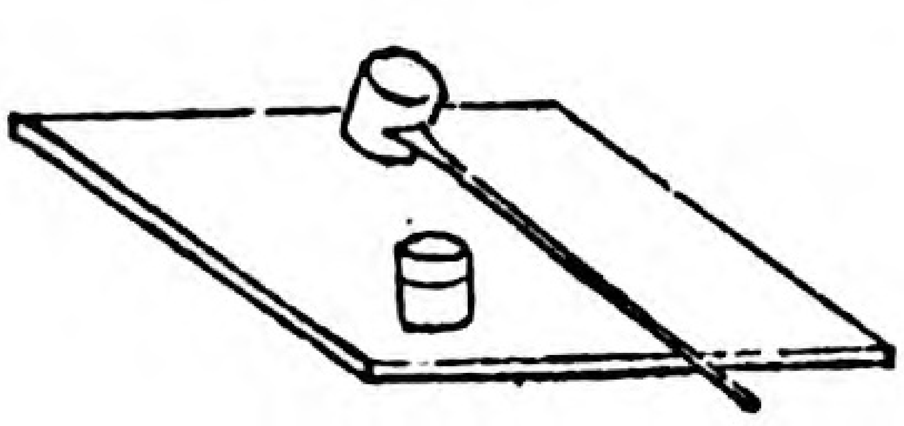
中柱有之大目二重釣棚爐の時は柱に羽箒下の棚に香合



同 風爐

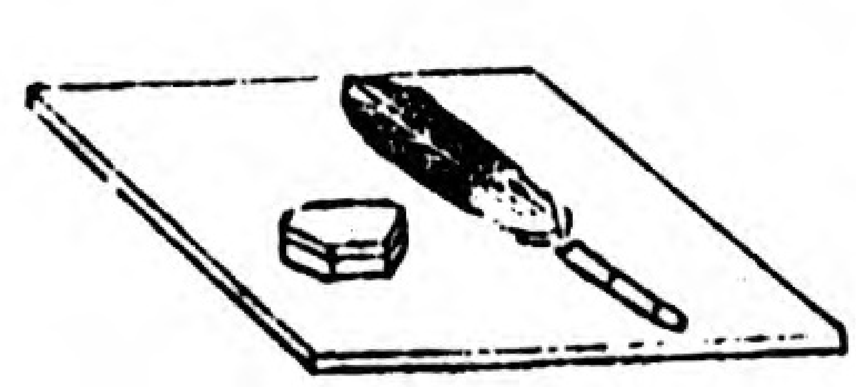


向切一重釣棚に柄杓殘したる圖 爐風爐前に同し

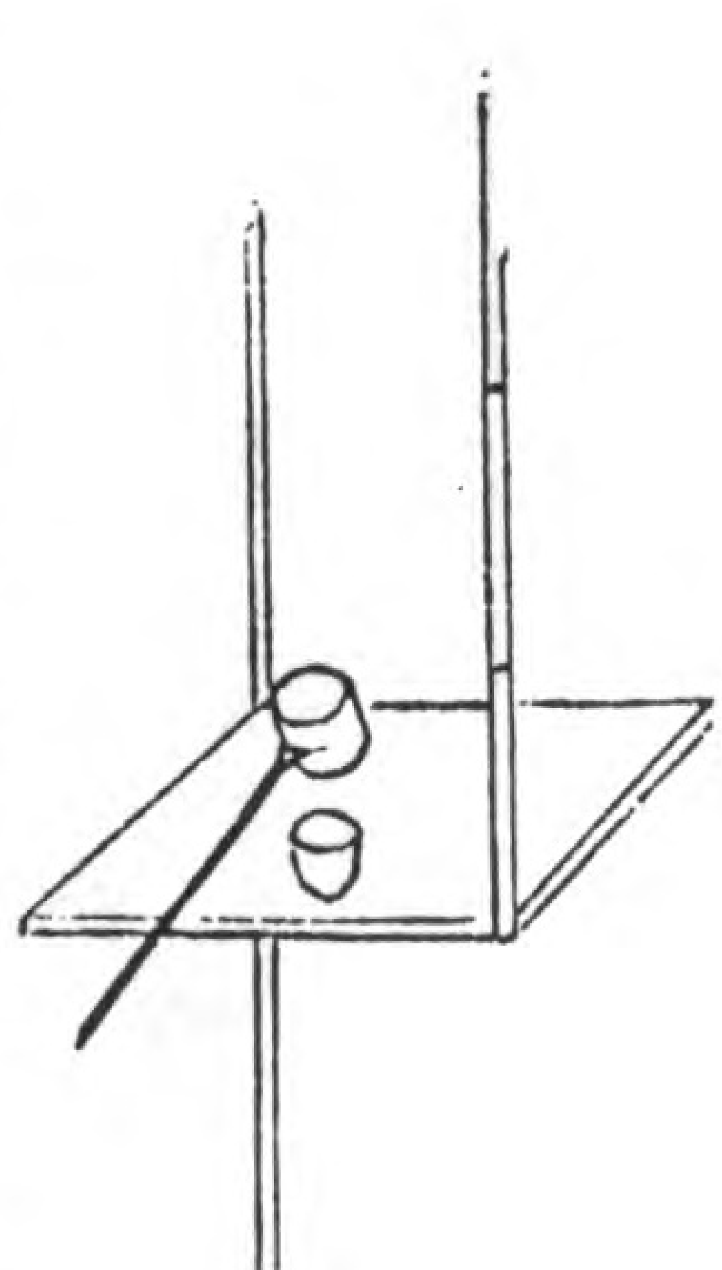


時は、炭斗を持出で、定座に置付、次に、灰炮烙を持出、定座に置付け篤と居前を直したらば、棚の方に向き、先○羽箒を、釘よりは

同羽箒香合組合たる處 足はいつれも勝手の釣棚にても爐風爐前に同し



本勝手向切隅棚



づし、前に一文字に置、次に香合右手にて取り、左手の掌中に移し、右手にて、羽箒を持ち、居前へ戻り、例の通り、置付け、炭手前

に取掛るべし。最前、右に二器、飾置く時は、炭終らば、引入べし。又飾るは不レ宜なり。向切一重棚の時と雖も、又然り、此の棚には、茶入は不置方よし。

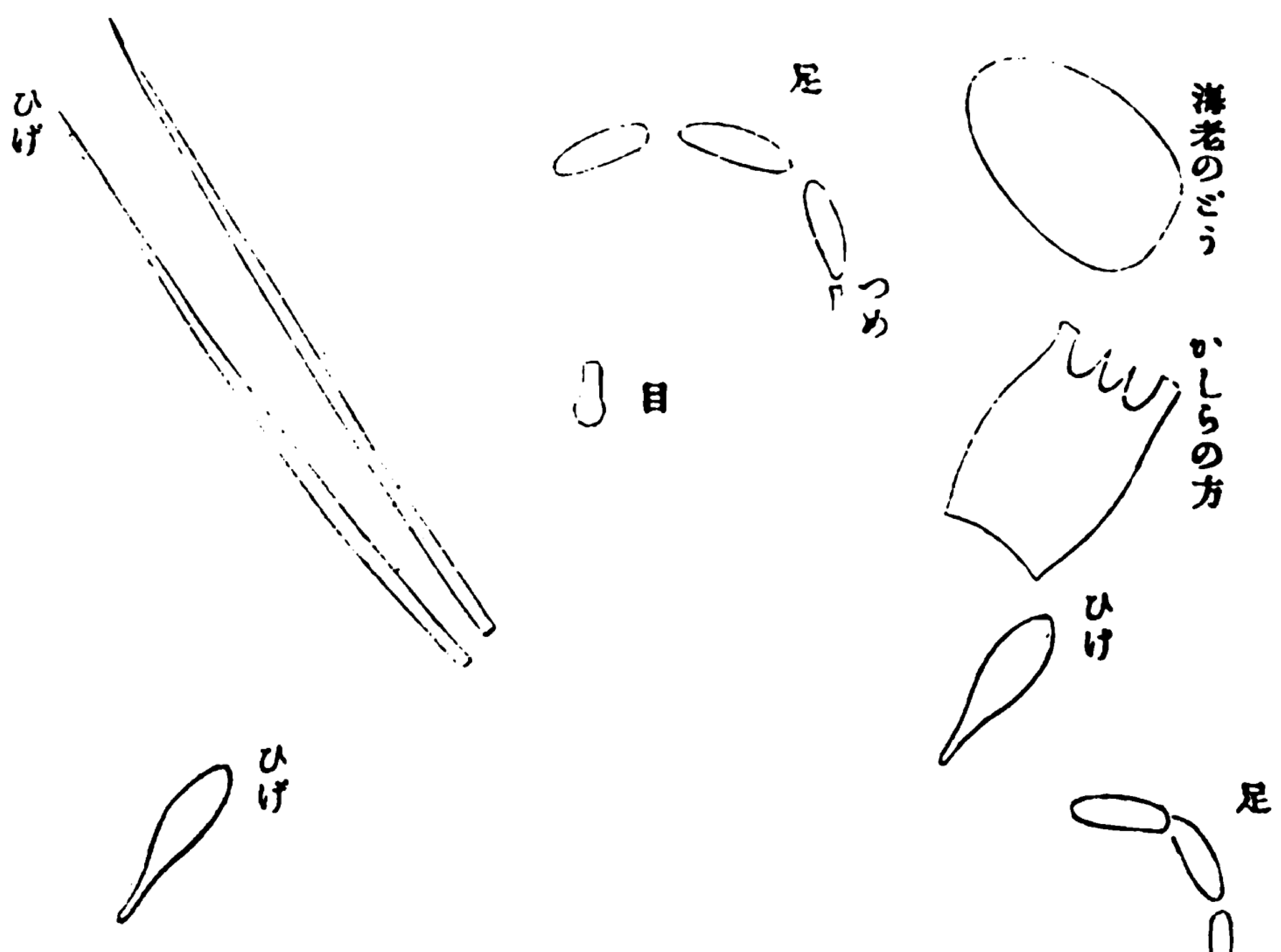
たちぬひ

西山たい子

背負守（水前）

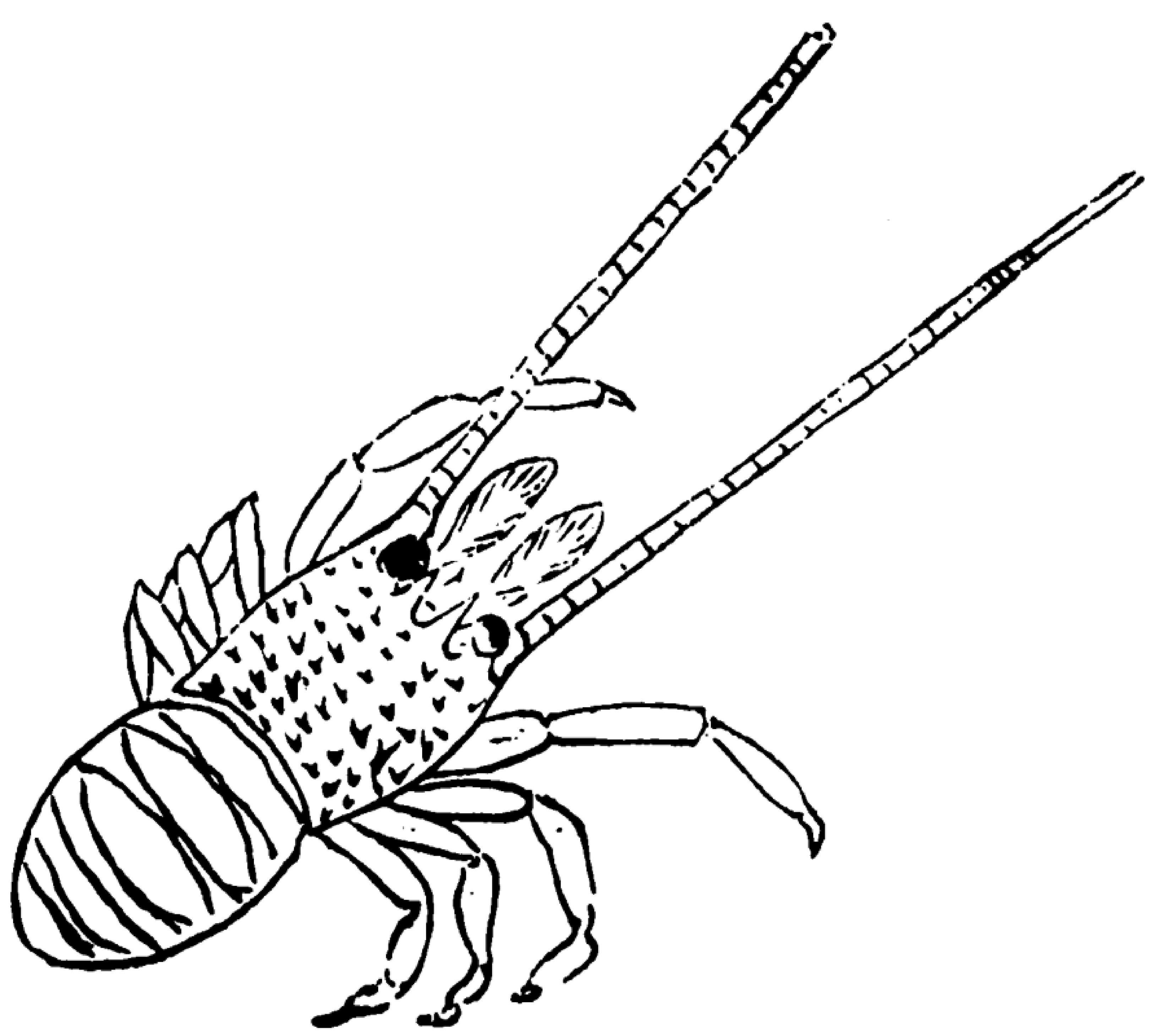
五鮮魚

御慶事のあと故、何をがな目出度ものをとの注文なれど、鶴亀等と思へど、それは、新年、松上の鶴の御題によそへてつくり上げたり。又菊にても思へど、それは、我々にはかしこし。まづ鯛、海老などの五鮮魚をつくりて、目出度ことほがんとぞ思ひ立ちぬ。

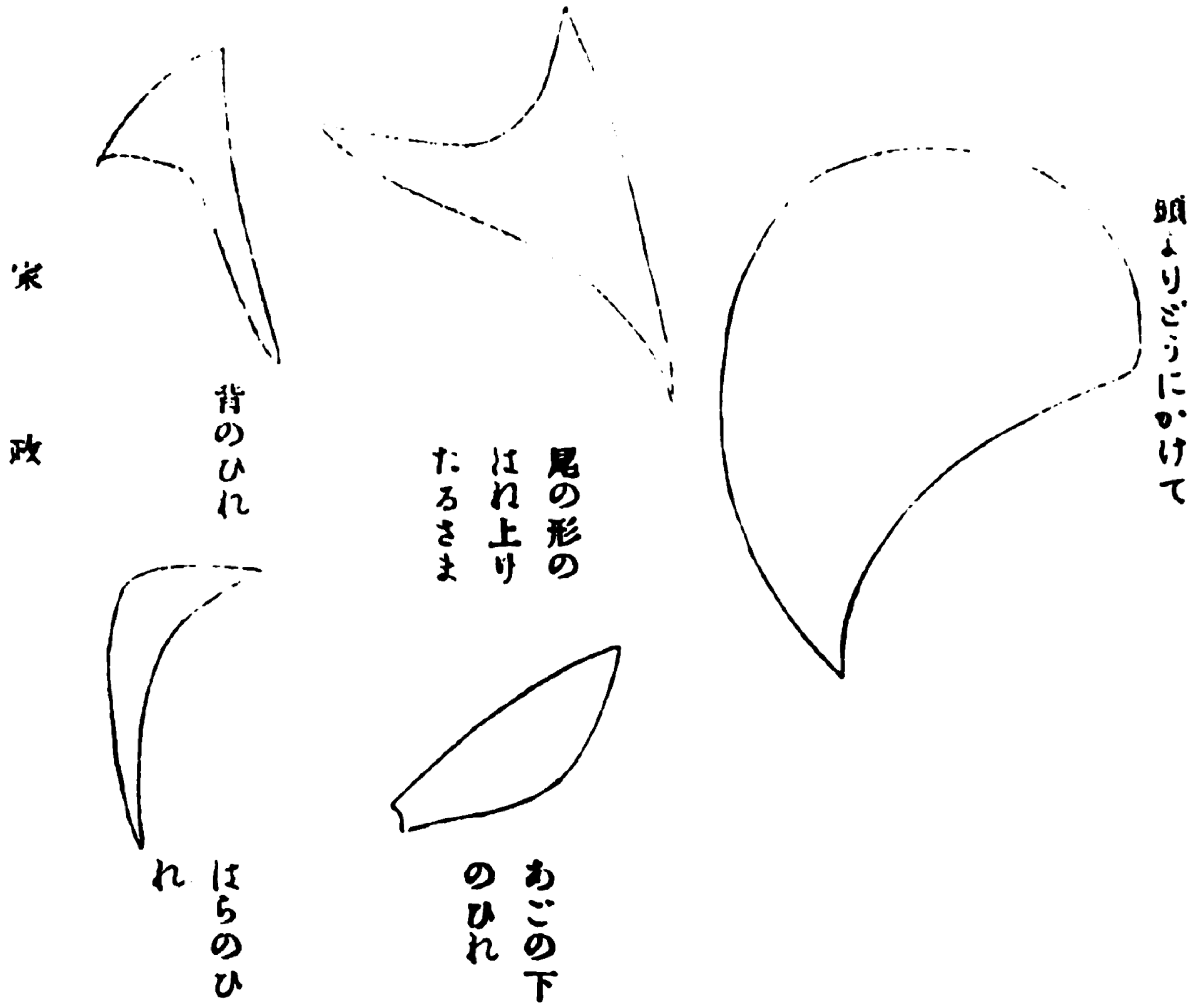


まづ海老の形を、右の圖の如く、厚紙にてたち、足はつがふ八本なれど、上のみじかきを六くみ、下の長きを二くみ、つくりおくべし。また、胴にかくして、も少し少くなしおくもよし。ひげも太きを二本、長きを二本、また細く中長きを二本どかりつくりおくもよし。これはなくとも差支なし。さて、例の如く、よき程に綿を入れ、左の圖の如く、くみ合すべし。切は、えび色と云へど、緋縮緬等の赤きにてよろしく、又、かしらの方を赤くして、胴の方をえび色にするもよろし。足は、えび色のくろづみたるか、黒びらうどなどを用ふべし。ひげも黒びろうど、また手輕には、厚紙のまゝにて黒く、とげ〳〵如く、ぬりてもよろし。目は白き切にて、眞中を黒くすべし。何分細工物なれば、よろしく考へて、手ぎはよく配當べし。

(海老の形)

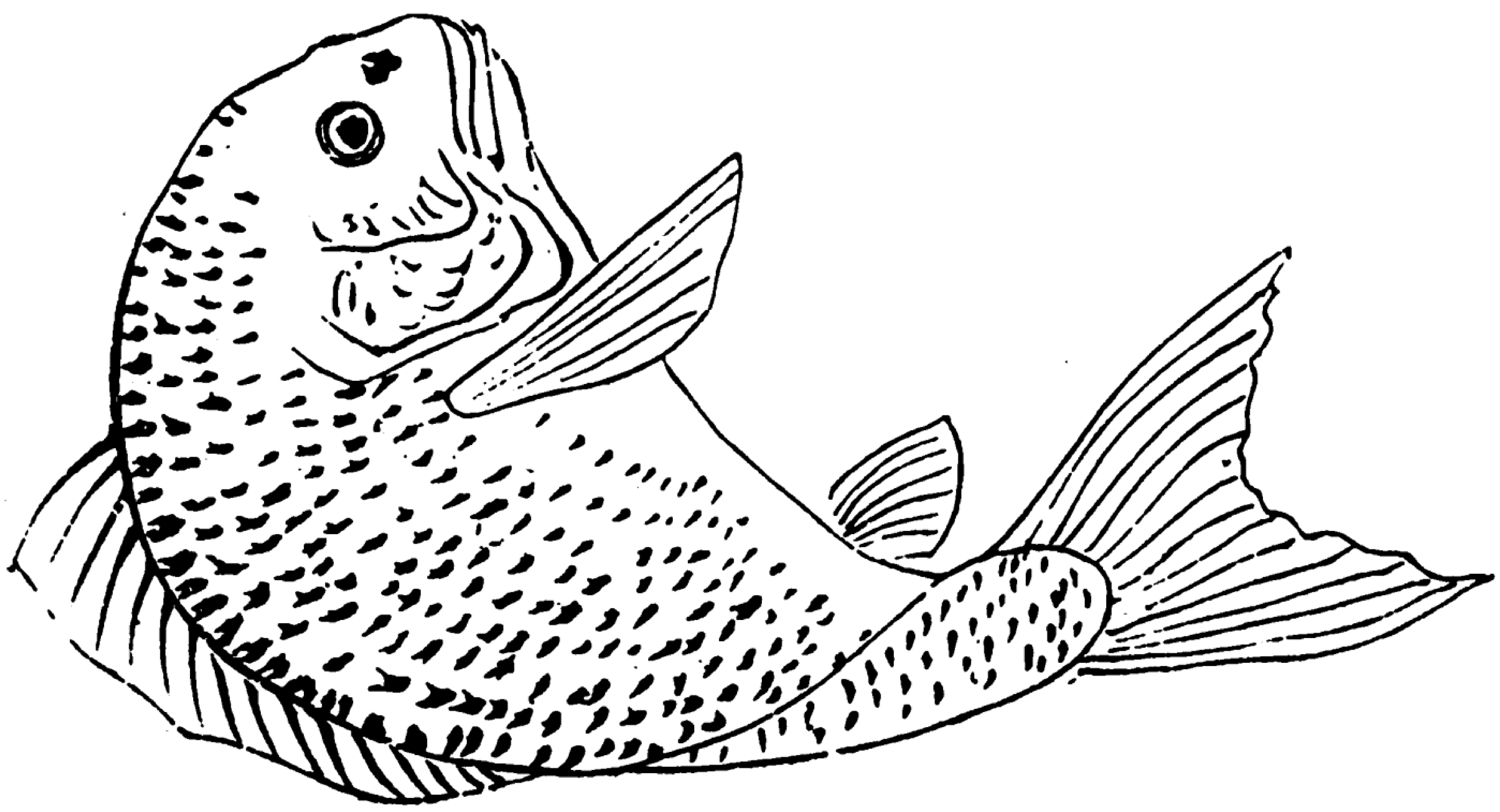


それより、鯛の形を同じく厚紙にて、左の圖の如く裁つべし。



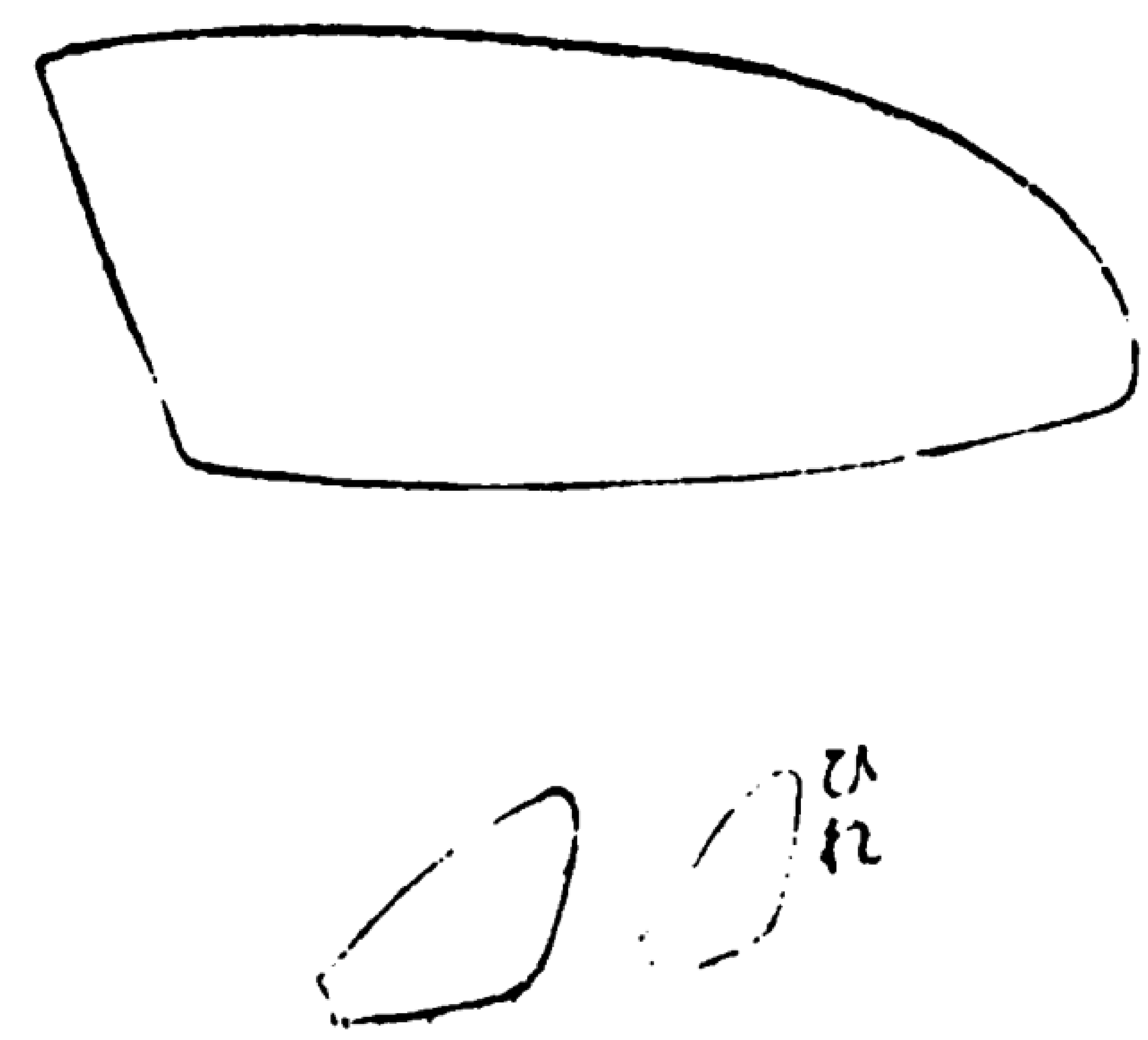
圖の如き形に厚紙をたち、之に例の綿をよき程に入れ、左の圖の如く組み合すべし、切は、白絹、白羽二重、白縮緬等、白きがよろしく、之に目、鱗、尾、ひれ等を墨にて書き、背の方に紅を、うすくぼかしぬるべ

（その圖）

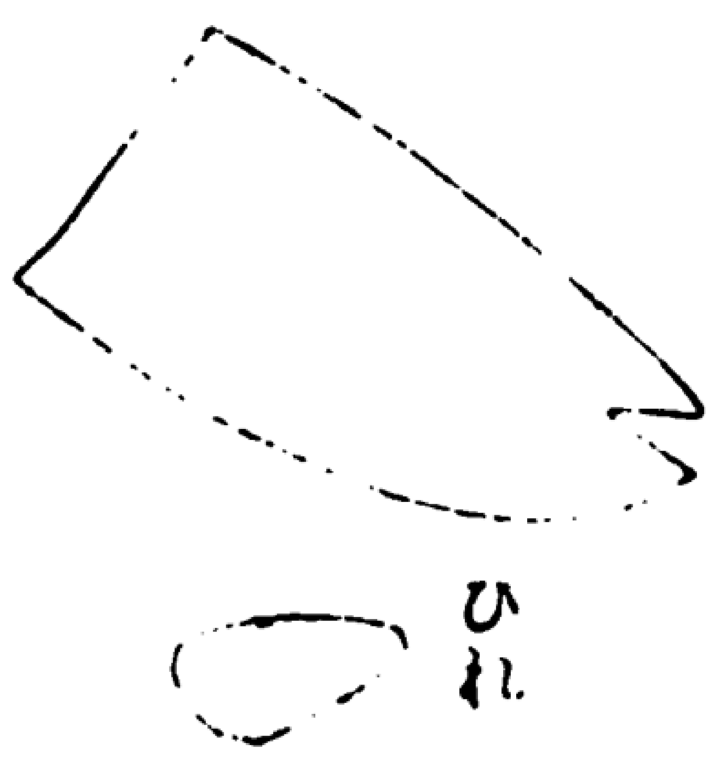


宋　政

し。ひれは、少しくろくすべし。



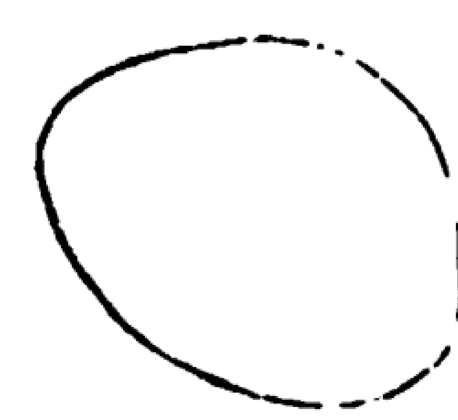
右の圖の如くに堅魚の形をつくり。
左の圖の如くに鯵の形をつくり。



各綿を入れ、切を被せ、目、ひれを畫がきて、組み合せ、わさぎ等に色をつくるか、又はさやうの色切を用ふべし。

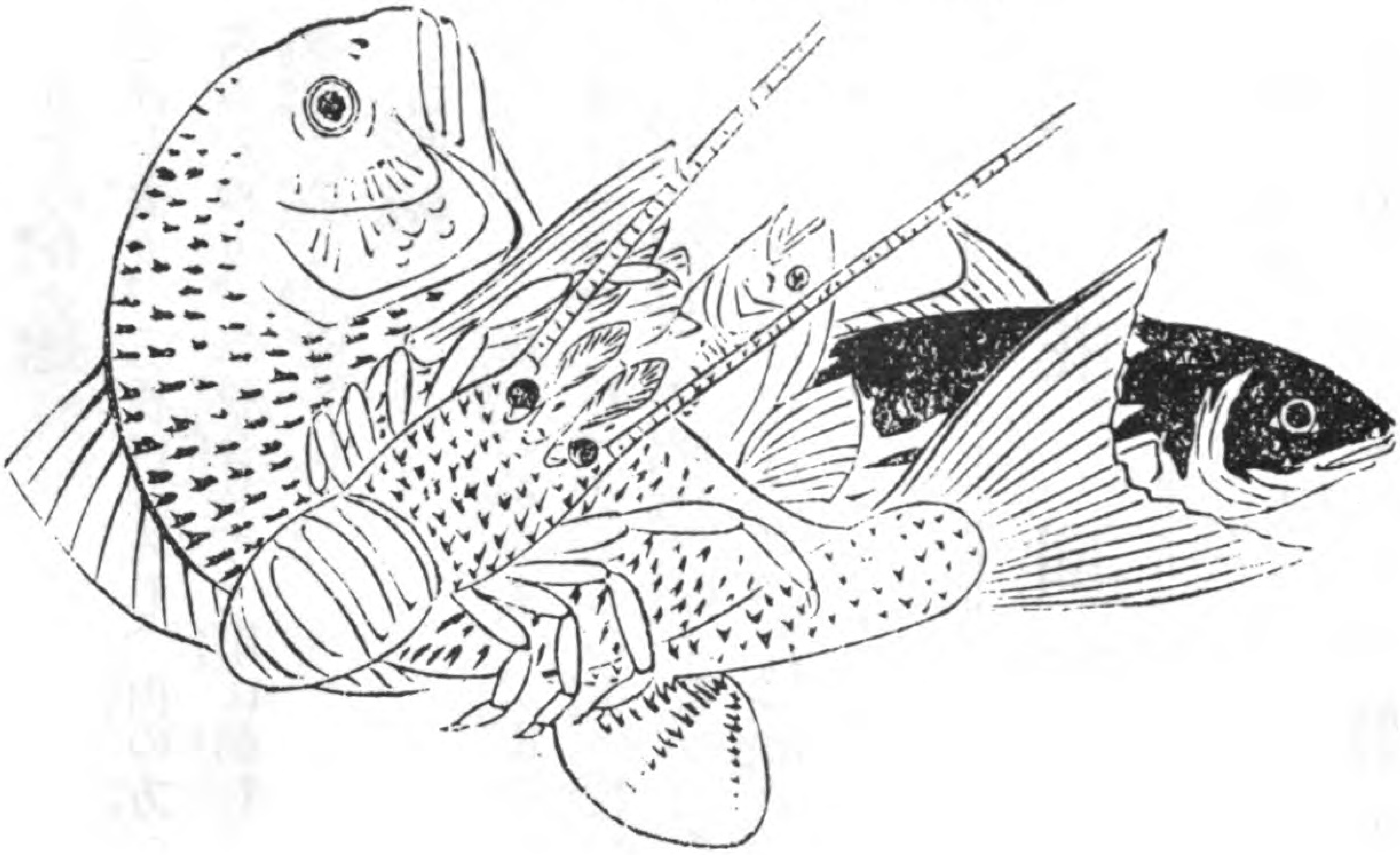
また蛤の形をかやうにつくり。之にも綿を入れ、

切を被せ、符を畫くべし。切は何にてもよろしく、色もまたをかしきをとりはからふべし。



而して、左の圖の如く、海老を上に、鯛を下に鯵と堅魚をその下にはさみ、蛤をもよき處にはさみて、のりしてよくつけ、裏切をはりて、背負守にするもよし。又、巾着のがはにするもよろしく、之に匂を入れ、裏にもふつくり、綿を入れて、匂ひ袋として、腰に下ぐるも、いとふさはし。

（五鮮魚の形）



だいどころ

鷺の椀盛

鷺の毛を去り、毛焼をなし、骨をとり、能き肉のみをたゝき、食鹽にて味をつけ、つくね身となし、さつと湯煮し、穂わらびのあくを去り、湯煮したるものと、人參をほそくせんにきり、湯でたるものを、椀に盛り、鰹節の煮汁をとり、食鹽醤油にて鹽梅し、椀に注ぎ出すべし。口に、花抽子を用ゐるも、よろし。

鰺の甘酢

小鰺の鱗を去り、三枚におろし、腹部の骨を、すきとり、十分間程、甘酢につけ置き、小骨を、毛拔にて拔き去り、斜に細う引て、器に盛り、山葵をおろし、上にのせ、甘酢をかけて出すべし。

きすの合せ燒

きすのこけを去り、三枚におろし、肉の方へ、鷄卵のしろみをぬり、二枚合せて、串に刺し、鹽をふり、能程に燒て用ゆべし。

山葵梅

鰹節の煮汁をとり、梅干の種を去り、(梅の花の形ちになる樣注意すべし)煮出しの中に投れ、少し煮て、梅干の鹽出て、能程の味になりたる時、椀に盛り、山葵をおろし、つまみいれ、出すべし。淡白にて能きものなり。

栄花園

稻(田植)

忙しき事を「五月が來たれり」と言ふ方言ありて、商家の歳暮の混雜するなどを商人の五月と云ひ、また村役場の納期をさして、役場の五月と稱する地方あり。如此繁忙の期を五月の語を以て云ひ現す所以のものは、其の依て來る所、豈徒ならむや。今次にしるさん事をよみたまへかし。

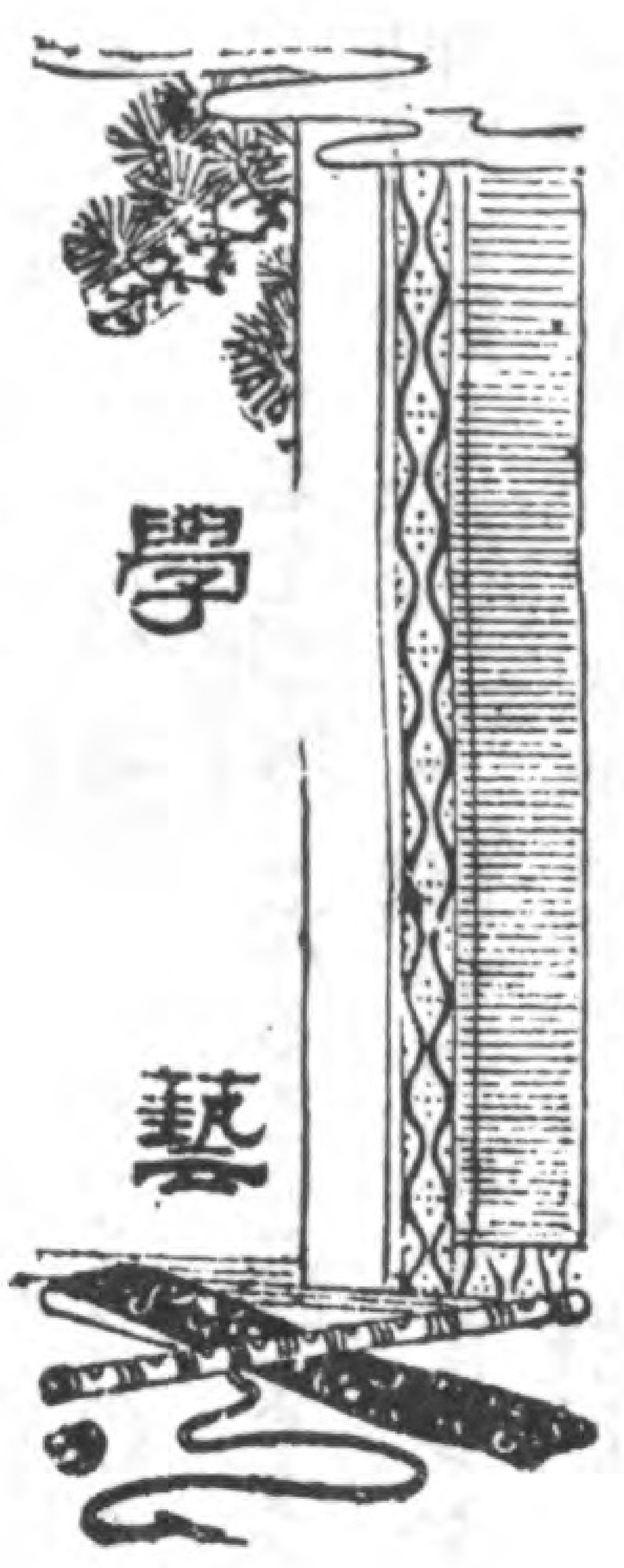
天漸く熱く、さばへはらへどもさらず、日西山にかたむけば、蚊軍襲ひきたり、蛙聲謌々として、睡眠をやぶる。

あはれ田子よ。あはれ五月女よ。首夏のいとみじかき夜の惜き夢を、はかなくも、媼の呼ぶ聲に破られて、其の云ふ事を聞けば、五月きたれり。五月に百姓、朝寢せば、目見えすならむ。足たゝずならむ。とく〳〵おきねと。例はふかく閉じこめたる戸を、くまなくひらきて、御田之神様を迎ひまつらんなどつぶやくさへさやかなり。さても、ねむたさは、小金にも珠にも換がたけれども、五月

とき丶し、五月女は、いかでためらふべき。枕かいやり、いざといさみて、田面には出で向へり。たち出る姿を見れど、菅の小笠に面をおほひ、紅き縄にて袂をひきしめたり。そはみやびやかなるやうなれど、衣裾は、ことごとくくちはて丶、脊負ひし、苫けらなるもの、どろにまみれたるは、いとわはれなり。

さて、主人が指示のま丶、かきならせる田に植ゑ始む。これぞこれ、古言にのこれる「手な肱にみなはかきたり、向股に肱かきよせて、取り作らむ奥津みとし」といはれしさまならむ。終日、腰をかゞめて、空を眺むる事もなし。うべも百姓は、天井に見すとかや。鳴呼、其の、勞苦の程、おもひやらるれ。朝飯晝飯も家にかへらず、細き畔にまとゐして、わり子をひらくなり。

夕されは、とびかふ螢の光をたどりて、かいまさぐり手まさぐり、どろふかき苗代にいり、苗をぬきとり、明日の業にさまたげなきやう、要意を調ふるなり。



國文學講義

田島隨二

(七) 樵夫が歌の事

今は昔、樵夫の、山守に斧をとられて、わびし心うしと思ひて、頬杖うちつきて居りける。山守見て、さるべきことを申せ。取らせむといひければ、

あしきだになきはわりなき世の中に

よきを取られてわれいかにせむ

と詠みけれど、山守、返せむと思ひて、こゝ〳〵とうめきけれど、えせざりけり。さて、斧かへしとらせければ、嬉しと思ひけりとぞ。人はたゞ歌をかまへて詠むべしと見えたり。

○是は、宇治拾遺物語に出でたるものなり。この物語は、大納言 源 隆國の作りしにて、大凡八九百年以前のものなり。當時の人情風俗を、ありのまゝに、寫し出せるものにて、啻に、文學の上のみならず、歴史其の他、古の事に心を傾くる人のためには、得やすからざる好資料なり。

●樵夫は、キコリ、山守は、ヤマモリ、斧はヨキ、頰杖は、ツラツヱ、返は、カヘシ、

○今は昔、今は既昔となりぬといふ義なり。彼の昔話の冒頭に、ムカシムカシと打ち出すと

同じことなり。この物語は昔語をかい集めたるものなれば、毎段みな今は昔にて、筆を起せり。○斧、即ちヲノのことなれど、やゝ小さきものにいふ。○山守、山の守をする人、今の山番などいふものなり。○わびし、心配などいふに同じ。○心憂し、辛く思ふことなり。○頰杖、掌の上に顔を乗するなり。心配ごとなどある時、今もよくすることとなり。○わりなし、今のヒドイといふに同じ。○返、返歌のことなり。○こゝこゝと、うめくこゑを形容したることばなり。○うめく、呻吟と同じ意とて、何かつぶやぎつぶやき物考へ居るさまなり。○かまへて、注意して、用心してなどいふ意なり。

一篇の意は、昔、樵夫が、山番人のために斧をとり上げられて、心配し辛きことに思ひて、頰

杖をついて心配し弱つてをりました。其のあはれなる様子を見て、山番人は、何か、相應な事を言ひ試みよ。面白からば、この斧を返さむと申しました。樵人、即ち、

惡シキものでさへも、無いのは、甚だ、ひどいのに、斧（善きをかねていへるなり）を取られては、私は、如何いたしませうヤラ、マア。

と詠みましたから、山番人、返歌をせむと、何やかや、うなり考へたれども、遂に出來ずにをはりました。さて、約束のごとく、斧をば返し取らせましたから、樵人も大きに喜びましたといふことであります。人は、どうか、日ごろ、心がけ用心して、歌を詠むべきことである」となり。

昔は、まことに、賤山樵にいたるまで、優にやさしき心もちたりけり。ことさら、今の人ならましかば、賄賂など、いやしく、あるまじきを言ひ出づべきところを、たゞ然るべきことを申せとは、如何に其の心の潔かりしぞ。

漢文學講義

佐々木天游

茗蘐廿勝小記　鹽谷宕陰

繁華之地。得二郊坰之趣一。膠庠之中。得二花卉之勝一。輪蹄之街。得二山水之觀一。天下唯茗蘐有レ之。作二廿勝小記一。

繁華の地にして、郊坰の趣を得、膠庠の中にして、花卉の勝を得。輪蹄の街にして、山水の觀を得る、天下唯茗蘐のみ之あり。廿勝小記を作る。

茗黌（黌は校に同じ敎授の處なり）は乃昌平校（又は聖堂とも謂ふ）のことにして、茶溪の邊にありますから、茗黌と申しましたので、茗は茶のことであります。元祿三年に、德川綱吉が建てられましたもので。爾後の學者は、大抵皆此の學校より出られしものが、多う御坐りますが、鹽谷宕陰と申します先生が、此の茗黌に付て、廿の勝景を撰び記されましたのが、此廿勝小記であります。小は、大に對するの詞で、極めて短かく記されたので、大作と申すわけでないから、小記と謂ふたものであります。

偖、繁華とは、雜閙繁盛いたして居ります所の土地にして、邑外や林外（爾雅に、邑外謂二之郊一林外謂二之坰一とありまして、郊坰の二字で、城下離れの、林野のことであります）などの樣な風趣がありて、自然に閑靜淸幽の致を得、又膠庠の學校の

中で、（膠庠とは、學校のことでありますが。支那で、陶虞氏の世では、學問の稽古する所を、上庠下庠に分ち、周の世では、東膠虞庠などゝ謂ふ樣な風に分ちてありました。さうして東膠と、上庠とが、太學のことで、下庠虞庠が、小學のことであります。膠は糾也で、德行を糾し修むると謂ふ義であります。庠は養也で、國老を上庠に養ひ、庶老を下庠に養ふよりして、名けたものであります。そこで膠庠と謂ふ二字で、學校のことゝ心得ふべし）花木（卉は百草の總名なり）などの勝景があり、車輪馬蹄の雜閙往來する所の街市にして、山や水などの、風雅自然のながめ（觀はみものと謂ふ義なり）ありて、繁華の地にして、幽邃の趣を兼ね、紅塵の俗なく、校舍の中にして、花木嘉樹の賞觀すべく、山水の游玩すべきものあるは、天下廣しと雖も、唯獨り、茗黌

にのみ、個様の勝事がある計りで、外には、何處にも、こんな所はありません。そこで、其の勝事に就て、二十を擇び、其々、短篇の小文字を以て、此の記を誌し作りましたのである。茲所迄は、二十勝小記の端書で、謂はゞ、此の記文の、小序と申す樣なものであります。

廟庭丹桂

仰高門之內。入德門之外。多二桂樹一。奇芬仙馥。令三人翛然有二高情清意一。古人呼爲二十里香一若九里香。余僻好之極。欲下進レ之呼二萬里香一上。不レ知花神能領乎否。

仰高門の內、入德門の外、桂樹多し。奇芬仙馥人をして、翛然高情清意あらしむ。古人呼で、十里香、若くは九里香となす。余、僻好の極、之を進めて、萬里香と呼ばんと欲す。知らず花神能領するや否。

廟廷は、聖堂孔子廟の庭前のことでありして、其所に丹桂樹が植りてをります。(桂は乃木樨のことで、其の種類が、樣々あります。花の色の白きを銀桂と謂ひ、黃なるを金桂と謂ひ、能く子を著けて、紅色なるを丹桂と申します。此の外にも、四季桂、月桂などの別があります。一說には、石榴の臺木に、木樨を接げば、其の花が丹桂となると も申します。兎毛角も、桂とは木樨のことでありま す)。是が第一勝景であります。以下順々に、第二第三と、續いてまゐります。是が先つ本文の初であります。

そこで。仰高門入德門は、皆孔子廟前の門の名でありますが、論語に「仰之彌、高。鑽レ之彌堅」とあるより採りて、仰高と門に名け、又程子の語に「初學入レ德之門也」とあるより採りて、入德と門に名けたのでありますが、仰高門の內、入德門の外に

桂樹が澤山に植りて、をりまして、其の花の咲く時分には、中々に香氣が高う御坐りまして、めづらしき薫、世外の清き匂ひが、（芬も、馥も、香はしきこと、奇は清奇なり。仙とは世外の清氣と謂ふ程の義、仙人は、世外高潔の人なれば、桂とか、梅とかの清き香氣あるものに、假りにそへて、仙馥、或は、仙馨など、申しました、のであります。）芬々と致しまして、之を嗅げば、自然に人をして、翛然と（翛然は莊子の註に、「疾貌」とありますが、茲所では、悠然と同じく、清遠の意と心得ふべし。）何となく、心持が清々と遠くなりまして。清遠の情、清淨の意を引起して、世外の思ひあらしめます。さて古來の詩家文人などが、此桂のことを稱へて、或は十里香とか、又は、九里香と（桂花の香氣が、高ふして遠きより、十里香、九里香と呼び、名けたものであります。）呼び名けました。乍レ併余自分は、中々に、人並よりは、僻（僻は偏なり。かたよると謂ふこと、）しかたよりて、此の桂を至極すき好むものでありますから、桂が負贔で、古人が呼び名けました、十里香とか、又は九里香とか謂ふ位のことにては、滿足することが出來ませんで、一層桂の位地を進めて、萬里に匂ひ度ると謂ふ、萬里香と呼び名けんと、欲し思ひますが、併し、只桂花の神が、承知して、頭を搖して、諾とうなづくか否かは知らぬが、多分は、異存はあるまいと思ふ。（頷は、左傳の註に、「頷搖二其頭一也」とあり。承知とうなづくことなり。乎茲所の乎は、疑ふて未だ定らざるの中に、商量の意を帶ぶの乎なり）と結びまして、文の情致をなしたのであります。

區中梅叢

梅在二廟背一者。參差希疎。在二講堂之庭一者。

整列幾行。柯條樛戾。根幹佶倔。皆非凡種。月下美人。雪中高士。任才人所品。疎影横斜之態。暗香浮動之況。誰能吐句超乘古人。

梅廟背に在るものは、參差希疎たり。講堂の庭に在るものは、整列幾行、柯條樛戾、根幹佶倔、みな凡種に非ず。月下の美人、雪中の高士、才人の品する所に任す。疎影横斜の態、暗香浮動の況、誰か能く句を吐て、古人に超乘する。

區は區域と謂ふ義にして、茗黌の區域内に在る、梅樹の聚り生ずる處の叢(くさむら)を、區中の梅叢と申したのであります。そこで梅樹が、廟背と講堂の庭との、二ヶ所に御坐りまするが、聖廟のうしろ(背は後なり)の方に、植りてをりますのは、參差と、一樣に並むでゐなくて、入れ亂れてをりまして、(參差は不齊の貌なり。)枝や葉が、なか〳〵繁茂してをります。(希疎は枝葉盛なる貌なり。)が講堂の庭前に植りてをります方は、廟背に在るものとは、反對で、行儀よく整ひ列なりて、幾くだりにも、並び列なりてをります。さうして柯も條も、枝と謂ふことにて、枝が屈みねぢけて、(樛戾は木の枝が、下に曲みて、ねぢけたる貌を謂ふ。)根や幹もかゞみねぢれて、佶倔と、むつかしき、有樣になりてをります(佶屈は、梗戾之貌にて、むつかしく、ねぢけたる有樣を謂ふ。)が廟背のも、講堂前のも、皆凡俗の種に非ずして、どちらも出塵清奇の種であります。そこで、梅花の氣品を稱して、月下に立つの美人と謂ひ、雪中に臥すの高士と謂ふ。(明人高啓が、梅花の詩に、「雪滿山中高士臥。月明林下美人來」と謂ふ、有名な句があります。茲所の月下美人。雪中高士。云云は、此の詩句を指したものであります。)そは、才

智ある人の、品評する所に任せて問はず。さもあらむあれ、黄昏月中に、まばらなる枝の影が、横はり斜なるの姿態、どこともなき花の香氣が、浮み動いて、紛馥なるの狀況（宋林逋が梅花を咏ずるの詩に「疎影橫斜、水淸淺。暗香浮動月黄昏」と謂ふ名句が御坐りますが、此の二語は、玆詩句に本づいたものであります。）そも誰何人が、能上手に詩句を吐出して、古への林逋とか、高啓とか、或は、其の他の人々に乘り超えて、其の上に出る樣な、名句を吟じ出すのであろうか、（超乘は、左傳の僖公三十三年に「超乘者三百乘」とあり。前に超え出るなどとなり。）





童女教（其の四）

一　何事によらず、人の難儀をば、すくふべし。されど、女は、男にしたがふものなれば、左思ひても心のまゝならじ、男にすゝめても、さやうの事をば、なさしむべし。しかれども、その人により事によりて、了簡のあらんことなり。我には、此の人不便とおもひしほどに、男にも、勸むれど、是により、とがなき身の、男にうたがはるゝ事もあらん。すべて、男も、女も、人にうたがはれぬやうに嗜むものなり。むかし、後漢の馬援どいふ人、光武帝と申すみかどの、勅

とうけて、交趾といふ所のえひすを治にまかりけるに、歸る時に、薏苡といふ草を得て樹とて、車にのせて歸りければ、時の人、その國にて寶を得たりとて、讒せしことあり。また、古語に●いわく瓜田にくつを入れす、李下に冠を直さすといふことあり。是は、諸用あればとても、瓜田に入る時は、瓜盗人にまがふ。李の下に冠を直せば、すもゝをとらんとせしが、人の見しままに、冠を直せしとうたかはれんとなり。あやまちを見て、こゝに●善をしるとはいわれども、はじめよりあやまちなからんにはしかじ。一度う●たがわれては、そのあかすゝぎがたし。

一 しなかたちよくとも、心●すなをならずは、よき性質とはいわれじ。形はいかなりとも、こゝろざしやさしく、すなはならば、めでたき●むまれつきたらむ。その上に、自然とかたちもよく生たるは、尙ありがたきことなれば、かたちよき人は●なを心をよく持つべし。うつくしき花も、香あしけれは愛しくなし。またかたちあしとて、恥にあらず。見にくきはなも、藥種なれば、人捨ず。唯こゝろのあしきぞはづかしき事なり。●或人のいわく、人は瓢簞をうらがへしたるやうに、心をもつべしと云へり。此のひさこは、外なめらかにして、内きたなし。しかも中心にがし。是を打かへせばたとひ、外むききたなくとも、内きよくならん。これぞ人のはいならめ、●儒佛神道ともに、此の内心、●すなをに淸きを貴び、邪に曲れるをしめす敎へなり。



諸國孝義錄（攝津國）

孝行者長太郎　と　く
　　　初五郎　い　ち
　　　　　　　ま　き

大坂橘通四町目の町人勝浦屋太郎兵衛といふものに、五人の子あり。兄は長太郎とて、十七歳、次は、いちとて、十六歳、次はまきとて、十五歳、次はとくとて、九歳、末は、初五郎とて、七歳になれり。それか中に、長太郎は、養子にて、家名を淡路屋といふ。妹のとくを具して、おなし所、六町目にすみけり。然るに、父の太郎兵衛、回船に積たりし荷物をうり代となし、破船して、うせたりと欺きける科によりて、元文三年十一月に、三日さらして獄門にかけらるべきむね聞えしかば、さらせる日數のうち、五人のもの、町奉行所に打つれゆきて、我々五人の命をめして、父が罪ゆるさせ給へといひ出でけるさま、孝心の誠、世にたぐひなく見えしかば、御城代、太田備中守かくと聞えわけしに、次のごとし、三月大嘗會の大赦によりて、父の死罪をなためられ、重追放に行はる。五人の者も事ゆゑなく、ゆるし賜はりけり。

孝行者政八

政八は、能勢郡、地黄村の百姓吉右衛門が子なり。母をゆくといひ、弟を林藏といひしが、父と弟は、大工の業をなして、耕作の事は、政八にのみせさせければ、わきて、力を盡して、農業をつとめ、三人の者を養ひけり。家貧しくて、いとまなき中にも、朝は、母を助けて、食物を調へ、食後のとりをさめまで、みつからなし、夕も、とく歸りて、母の勞にかはり、重き仕業をば、かりにも、母になさしめず、いさゝかにても、父母のやましきけしきみゆれば、農業、又は、外の用事をもなげう

ちて、介抱に心を盡し、よろづ殘る所なく、扱ひけれども、父母は、老ぬるにしたがひて、弟を愛し、政八には、憐みうすきも、恨もせず、母はわけて、言葉多き者にて、林藏があやまちをも、政八におほせて、罵るを、いさゝかも、言葉をかへさず。みな己があしきとて、聲を和らげてぞいひ和めける。一とせ多田院に滿仲權現の開帳ありけるとき、あまたの人を雇ひけるに、政八も農業の暇ある比にて、五十日が間、雇はれ行ぬ。多田院までは、道のほど三里あまりなるに、國崎村より、一庫村まで、一里ばかりは、嶮岨の高山左右にそはたち、道細くして、谷川その間をながれ、晝さへ猪猿むれあそべば、夜は、狐狼のたくひ道をさまだけ、往來の人も希なるを風雨の厭ひもなく、初夜のころより、多田院を出て、一夜おきに父母をかへりみ、朝はまた、明ざるにかしてにゆく事二十五夜、一度もかくことなかりしかば、見聞ぬるもの感じあひて、かくと地頭に告ぐれば、褒美の錢あたへしけ、天明七年三月の事なりき。

主從心得草（承前）

諏訪忠元寄贈

老後には、金持となる人なり。又若い時に、辛抱せずして、少しでも、借金をこしらへる人は、年寄ほど、段々貧乏となる人なり。考へ見るべし。是も、多くは、色欲より身上をわるくする事あれば、若い内は、急度色情を愼むべし。先、色情の大いなる災ひとなるといふ、證據は、周の幽王は、褒似が爲に、天下を失ひ、惡名をのこす。吳王夫差は、西施の色に迷ひて國を亡ぼし、玄宗皇帝は、智仁勇のほまれありし人なれ共、揚貴妃の色に迷

ひてより闇君となり。天下を亂し、末世の笑草となり玉へり。又日本の清盛のひげむしやも、常盤の色に迷ひて、三人の子を助けし故に、手前のけんぞくを西海の波にしづめ、天下を亡ぼしたり。さしも勇猛の義貞も、内侍の色に耽りて、日夜酒色におぼれ、出陣の心なし。是によつて、一族皆亡びたり。是皆色に迷ひしあやまりなり。其外、大名高家に、色に迷ひて、大國を失ひし人は、わけてかぞへがたし。况や、夫より以下の者はこなみぢんにほろぶとしるべし。愼むべきの第一なり。

○恐るべし色と酒との淵に身を
　　しづむとしりてはまるものなり

○夏の虫身をいたづらになす事も
　　深く迷ふによりてなりけり

石田先生のいろは短歌にこわいばけ物何じやと思ふ色と短氣とうそとさけとあり。是等の歌をよくかんがへて、色に迷ふのあやまちをよくさとるべし。一たびかへり見れば、城をかたぶけ、二たびかへり見れば、國を傾け、三度顧り見れば、身を失ふとは、古人の堅誡なり。夏の虫、火に入るがことし。物に着して一身を失ふ。夫、人間は萬物の長として、智も又、勝れたり。爾るに、色に迷ひて、身を失ふ夏の虫におとれり。萬物の長とは云がたし。萬物の下といふべし。夏の虫の手下なるべし。一念の迷ひより、本心の明徳を失ふ。智惠の鏡くもりて。我が身を火にこがし、水におぼらすは、かなしき事にあらずや。若色欲の心起らで、我が身をほろぼす心起りたりとしつて、深く恐れて、屹度停止すべし。

○命をた取も捨るも色の道
　　元はうはきのたわれことから

○君故にふみ迷ひたる色の道

手鍋さけるも己が惡性

學びのみちく（三）

故網代弘訓撰

歌學

○歌學之事は、近世契沖阿闍梨、始めて、古學を唱へてより、縣爲翁にて、又一段ひらけ、鈴屋翁にて、又一段くはしくなり。昔にもまさりて、明らかになりたり。世の中の事、十に八九は、昔に劣れども、歌學の三は、昔にまさる事、何段といふ事を知らず。誠に三大人三大功なり。

○中世之歌學は、影昭法橋、ひとり勝れたり。次に淸輔なり。其外、基俊、俊賴、俊成卿、定家卿之學問は、今之世にくらべては、あやまり多きものなり。しかれども、さすがに、時代のふるき德にて、また捨がたき事もあるなり。後世東野抄、宗祇、幽齋の歌學は拙劣にて、とるにたらざるものなり。

○皇國は、詞の國なる故に、詞の學問をせざれば、歌書はもとより、何の書も解し得がたし。漢土は、文學之國なる故、文字をしらずしては、漢籍よみがたく、解しがたきとおなじ理なり。

○詞之學問は、八衢を學びて、詞の活動をしるが第一なり。詞のつかひやうをしるが第二なり。是は、詞の俗言をあてゝとく事なり。語釋といひて、語之本をとくは、大方强解多し、宋之王荊公之學說に似たることにて、古學者のこじつけとて、人の笑ふことは好みてすべからず。

○詞の活動をしる書は、詞のやちまた、第一なり。あゆひ抄もあはせみるべし。語意考は、あやまり多し。

○詞のつかひやうをしる書は、玉あられ、雅語釋解、消息文例よろし。あゆひ抄、かさし抄もあはせみるべし。古今集遠かゝみ、源氏玉の小櫛も、常にみるべし。

○かなつかひをしらざれば、いかほど學問ありても、歌文を功者につくりても、猶初心なり。古言梯、雅言假字格、古今かなつかひ等を、坐右におきてあやまりなきやうにたゞすべし。たゞし、此のかなつかひを、一七日二七日之間に、早く會得さる法もあり。是は口傳なり。

○てにをはは、古文古歌を解するにも、みづから、歌文を作るにも、別して大切のものなり。詞の玉緒、てにをはひもかゝみを主として、あゆひ抄をもみるべし。たゞし、右の書をよみても、詞のやちまたに熟せざれば、てにをはの肝要をしりがたし。

○歌文にあやまりなきやうにするには、詞のやちまたを主として、詞の玉緒、玉あられ、消息文例をあはせ學ぶべし。

一種物合（四）　松竹莊主人

九月廿三日於和學所執行

物判者　小中村清矩

歌判者　横山由清

五番

左　鹿　歌持

遠山すりたる、かりきぬの袖を、地敷にとりなし、ゑふくろに、燒たる鶉をいれ、秋の花ども、そへたり。歌は、をはなかさねの、うすやうに書て、それにむすびつく。すべては、小鷹狩に行きて、か

へるさに、鹿の聲きゝたる、おもふきなり。

とかりして歸るかた野のすゝき原、
鹿のこゑさへきゝ得つるかな

右　物勝

水干を地しきにして、遠山臺にてはいひもて、秋の山のけしきをつくり、杉の葉の花楊枝をさして、木たちのさまをうつし、かたへに、熊毛のさかつらの箙に、征矢を筈高にもりなし、弦卷をそへたるは、明日狩に出立むとするさまを、見せたるなり。是は、丹後守藤原保昌、あす狩せむとする夜、いたく鹿のなきければ、妻の式部の、あはれなる歌よみて、そのかりをとゞめたることを、おもひよせたるなり。歌は、落栗の重ねの紙に、女もしして、

ものゝふがこよひつまよる矢さきにも、
かゝるいのちと鹿やなくらむ

物判云此のつかひ、左右ともに、みやひわざのあるが中に、ものゝふのなりを、おもひよせられたる、さることゝればゆ。右は、箙のさかつら、いかめしき男べしも、妻のなさけある、言の葉の露にしをれて、鹿の命うしなはざりけむ。あはれなるふる事によりて、矢からみのしさま、故實をうしなはず、かさねの色の落栗、折からのさまにかなひたるは、いみしき有職の、しわざとこそおぼゆれ。

左は、尾花が野邊を、とかりして歸るさ、衣にすりたる遠山のきりのまよひに、ほのうち出づる、鹿の聲をきかば、たけき心もうせて、涙おちぬへう、と心ふかくおもはれたる、いづれも、感あさからず。勝劣わきがたきを、しひていはば、これも、一種物を以て、時のけしきにとりなして、心さゝれたる、花楊枝のおもむきな

ど、よしありてれはゆれは、繪水干の扇の風、こゝろなひきて、右をこそ。

歌判云。左、小鷹手にすゑかへる宮人、いとみやひかなるに、鹿の聲さへきゝつけたらむ、是にまされる、得物はあらじ。歌さま妖艶、餘情淺からず。凡骨のわざには、あらざるべし。右、和泉のおもとの、哀なる心はへをうつして、有職なるつくり物ども、その夜のさまも、見るばかりにしいでられて、こよひつまよるなど、一ふしふるまはれたる、巧思かぎりなく、幽玄の體、已達の人のよめるなるべし。狩きぬのそで、水干の袖、いづれともひきわづらひて、よき持と申す。

大和めぐり（承前）

井上賴文

二日午後の日記々者は、山川勢柔子なり。

連れだちて、宿を出でしは、石川、森、館、福舍の諸子と、外に、三人、四人となりけり。先なるは、一時ばかり前に出立ちぬと聞きて、心やゝいらち、道あしとも近きをこそとて、あへぎ〳〵舊道をとるなかに、車を命じて、新道をとりしは、誰なりけむ。今より、車などにすがりて、何とかせむ。前途程遠く、乘るべき道は、猶多からむを。七日の望足りて、奈良坂過ぎて、笠置を越えむ曉、なれぬそば路行き惱み、心は後に引けどひかねど、大寺のうつゝに殘る、大慈大悲の法の力もかひやなけむ。其の時こそは、天の浮橋、打乘らむも、一しはの興ならめと笑ひて過ぐれど、免れ難きは、

車の輪立。あすは、吾が身と知らぬげなるも、罪深し。今宵の宿りは、初瀬の町なり。今は程もあらじと、來か丶る翁に問へば、五拾町はあらむといふ。急ぎ給へ。一走りせむと喜びつ丶、又も田の面の媼にとへば、二里は、慥といらふ。稲舍子の跡戻り忘れもせぬに、今日も、か丶る目見る事よと、心苦しさ例へむ物なし。先なるは覺えず。後なるは、猶覺えず。西にも、東にも、道連れり。唯、松本子、安藤子、宇仁子と予とのみ。人々、物もいはねば、鳥もあざけりて、眼をかすめ、流もたえて、耳に入らず。足びきの山こえ、野ゆくほどに、車夫いで來て、ねもごろに乞ひて止まず。さてはうせたりな。予等の足のたゆげなるを見て、付入るにこそ。いひてのけたる、前の言葉は、反古にもなるまじ。か丶る程なき所を、いかでいかでとてゆき過ぐるに、先の御方々も、心よう召し給ひしを。さりとは、御待ち受け申し丶かひもなく、吾等も、いと面目なしなどいふに、いよいよ油斷ならじ。人は知らず。今日の吾等に、車は用なしと拂ひたる袖の下より、おかしげなる女子出で來て、勸むる事、いとかひ〲し。痛く疲れましたらむを。とく召し給へや。宿よりの御迎へなりといふ。何とやと思はず振りかへれば、松本ぬし、すかさず、さては、宿の殊更なるとりなしにかと問ふ。さにこそ。御方々の、待合車夫と思ひきりたる事の笑止さよ。いで、其の儘召し玉へと言ふに、南無三仕損じたりと、飛び乘りたる、予等の面もち、人見なば、如何ばかりおかしかりけむと、相見ては丶えむも嬉しき限りなりけり。（このわたり、實況見るが如し）二十町ばかり走らせて、定めの旅屋、紀の國屋に着きしは、三時頃なるべし。先の者はと問ふに、何れも、初瀬寺にまゐで

ぬ。御方々も、先詣で玉へと勸むるまゝに、立出でたるこそ、思へば、餘りに早まりたりしか。二町ばかりゆきて、見上ぐれば、木立深く生ひ茂りて、いかにもさりぬべき靈場とみえたり。石階を登り、回廊をめぐるに、其の數の多さ、其の柱の長さに、思はず聲を放ち、魂をけし、堂宇の宏壯なるには、佛の善美も、こゝに盡きしかと思ふ許なり。かくては、奈良に入らば、大佛のつら魂には、狹き心やぬかれなむなど、後のことまで、心にかゝるもわりなしかし。寺僧、頻に寺の緣起をさへづる。引水的、說法は、聞く耳持たじと撥つけたる、冥罰覿面。悟りてみれば、日記の材料、有耶無耶として、習はぬ經の記し難さも、名詮自稱なりけり。斯くて、さし出でたる臺より見さぐれば、初瀬の町は、隈なく眼眸に入りぬ。枯れたる櫻の間より、眞紅の色のはの見ゆるも、盛者必衰の道理に引きあつれば、感慨殊に限りなし。僧坊、學寮、こゝかしこにみえ、法衣長く垂れたるが行きかふを、人の見おくるもみゆ。猶、奧堂をも見むとしたれど、足の痛みたへがたければ、有緣ならば、濟度し給へ。大慈大悲の觀世音と、足ふみしめて宿に歸りぬ。（評足は重かりしならめど、筆つき、いさかろし）曩に、宿につきし折、足を洗ひ、風呂にも入り、一息つきて行かましかば、佛の功德もひとしほあふがれたらましを。宿の主人に、とにもかくにも、先詣で給へ。一時も早きは功德なるべしと、せきたてられしは、中々にて、足の疲に物もおぼえざりしこそ、口惜しかりしか。かくて、草鞋を解き、風呂に入りて、初めて、身を横たへたる時の心地、極樂は此所より程遠からじとぞ覺えたりし。氣もやゝゆるみて、心もおちゐたれば、更に、松本、安藤、澤田の三子と共に出で立つ。

觀音堂の東に當りて、丹塗の鳥居立てり。輿喜天神といふ。天暦の昔武麿といふもの、神託によりて、建立したるものなりとぞ。由緒ありげなれど知る由なし。俊成、定家などの塔も、此のわたりに在りと聞けど、眞僞うけ難し。影向石、影向松などある所を、西に下りて、觀音の階下にいづ。再、登らむとしたれど、今朝より、拾里ばかりも歩きたる足の、たゆけく、物はしさも堪へがたければ、後世は知らず。生きながらの餓鬼道は、佛は好ませ給はぬなんめりとて、復登らず。折から、梵鐘木陰に響きて、暮れそむる夕の色、四方より襲ひ來るに、今は法の力を借る風雅にもあらずと、打連れ立ちて歸りぬ。腹はとゝのひぬ。床はのべられぬ。今宵の夢は、華胥の國にやあそぶらむ。

隱國の、初瀬の國の、國の名は、古學びする、吾等の胸には、忘られ難き名なりけり。朝倉の宮は、何處なりけむ。列城の宮は、かしこの松原にや。初瀬の小野も訪ふ由なければ、知るよしもあらじ。思ふに、其のかみは、いみじき都の事とて、今見るやうにはあらざりけむを。觀音の鐘の音高く響きわたり、法の光明長くかゞやきてより、遠きも、近きも、唯、これをのみ二なきものに仰ぐこそうたてけれ。こゝにおきて、本居翁の歌、はしなく思ひいでられぬ。

佛等は玉のうてなにいつかれて神は雨もる小屋のしきやに。

二度三たびつゞくるに、無限の感慨おさへむとしても、おさへがたく、遂に、あやしうも歌ひいでぬ。

佛のみ光かゞやく國所古き都のかけもうつらず。

奈良へ入りて古今を觀せば、有爲轉變のことわり、明鏡をかざすよりも著く、うれしうも、哀

しうも、様々の妄想うかび出でむを。奈良の來む日を、こゝに、賭せむと思ふも、をこなりかし。

頼文いはく。はつせを、泊瀬とかけるより、いにしへまなびの、いまだくらかりし世には、文字にのみすがりて、とませとよめる歌人もありき。されば、訓のあやまりによりて、古人のよめる歌の意をも、そこなへるもの多し。六帖に

海士小舟とませの野へに降雪の　赤人
　けなかく思はし君が音そする

同書に

かくらくのとませの山の山きはに　黒人
　いさよふ雲は妹にもあらん

また、泊瀬の枕詞なる隱口をも、おしあてに

かくらく　かくれく

などよみあやまりき。

また、隱口の口の字、草にてかけるを、江とあやまり、遂に隱江ともよめりき。

續後撰集に

土御門内大臣

こもり江の杉のみどりはかはらねど
　泊瀬の山は色つきにけり

長谷寺は、豐山　神樂院　長谷寺とて、眞言宗の大寺なり。當時の緣起は、菅原道眞公の執筆とて、世にもてはやせど、うけがたきものなること、先輩も、はやくあげつらはれたり。さるを、こよなき逸品のごとくめではやす博士たちもあるは、いかにぞや。長谷寺緣起剝僞などは、見ざるにや、いとくちをし(未完)

ちなみに云ふ。屋代弘賢翁のものせる、道の幸に、廿七日(寛政四年十月なり)(中略)小池坊へ行く、(中略)暮時より寶物ども一見、先、菅贈大相國

眞跡の縁起、第一の寳物なるべし。文章は、豐山傳通記に見えし如く也（賴文云ふ此の縁起の寳物なることは、先輩の確説あり）繪詞縁起、詞は、後圓融院宸筆のよしいへど、繪も筆もさだかならず。其の餘さま〴〵おはかり。唐徽宗の寄附のよしいへる、鼠燈臺、虎革屛風などいふあれど、これは、靈驗記にだに載せざるものにて、いぶかし。打みたるにも、いとうけがたしと見ゆ。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の六）

白松園主人

……うけたまはりぬと應へつゝ、阿公は、五七人の託女を將て、しづかに壇を下り來たり、腰の右手に立繞りて、あらやかに物見の簾をかきあげ、老皺みたる臂を伸べて、眞鶴が黑髮を、無手と掴みて引出す、憐むべし眞鶴は蟬鬢、肩にふり亂れて、雪に拂ふ柳の如く、紅顏砂に塗れて、風に散る梅に似たり、なか〳〵に、覺悟究めし事なれば、騷ぎたる氣色もなく、引かるゝまゝに、ふしまろぶ、その形勢、孤雁の漻に捕らるゝに異ならず、これを見るもの歎息せざるはなく、あな痛まし、中城の御命に代りたてまつり、國の恥を掃ひ除かん、と希ふ心操の、世に勝れたるのみならで、容止も又めでたし、かゝる少女を殺さじ、人の願事をかなへ給ふ、神慮逆に測りがたし、とつぶやきけり。

此の老婆の惡さげなる、憐むべき忠臣の女を、強ひて海中に沈めんとせり。心ある者誰か、その誣妄を怒らざらむ。毛國鼎は、之を見て、牙を嚙み拳を握り、猛然として之を救はんとせり。

當下阿公は、眞鶴を引立てゝ、海邊に歩みより、且く口に秘文を唱へ、やがて海面に推向て、數十丈なる崖の上より、突落さんとする處を、毛國鼎走りて、忙しく押しとゞめ、阿公に向ひていへりけるは、夫神は哀愍をもてこゝろとし、人は性命をもて本とす、されば生きとし活けるもの、孰れか命の惜しから

ざる、しかるを今、人をもて犧とし、もしその驗なきときは、その罪阿公がうへにあり、神その犧を受け給はずば、何をもて其許の愆を補はん、いと心元なし、と詰問ふに、阿公は、半落ちたる齒をあらはして、嚇然とうち笑ひ、吾儕六十に及ぶけふまで、國の祀に與りて、神の慮はよくしりぬ、こゝをもて、上國王より、下士庶人に至るまで、公然として疑はず、しかるをおん身、犧を柱へて、心もとなしと宣ふはいかにぞや、其所を放ち給へ、といひも果てず、ふり落さんと、焦燥にぞ、毛國鼎は、なほとめたる手を放べず、又阿公にいふやう、此國開けそめしより、君眞物出現して、禍福吉凶を祀し、人のまのあたりこれを見るに、水神血食を求むるものならば、などて自身出現して、その犧をとり去らざる、且ツ三十七の間切、三十六の屬島、いづれか王士にあらざる、誰れか王臣にあらざる、しかるにわが君、駕を枉げて、この海邊に到り給へども、水神々躰を顯はして、そのおのれを祭る歡びを述べざるは、無禮なり、是れ正しき神にはあらずして、五月蠅なす、邪神なるべし、阿公よく神のこゝろを知らば、目今兩三人の徒弟を遣はして、神をこゝに迎へんこと、いと易かりなん、汝達とくゆかずや、と

罵もあへず、ほとりちかく侍りたる、二三人の生託女を、忽地礑と蹴たりしかば、眞逆さまに滚落ちて、淚の底にぞ沈みける、

毛國鼎が勇敢なる、忽ち惡婆を拉ぎて、更に理を說いて、君王の惑を破らんとせり。讀む者思はず快然として、氣味よき事限りなし。その結局終に如何、乞ふその次をよめ。

利勇これを見て大に怒り、こは毛國鼎、物にや狂ふ、筑登之(武士をさしていふ名也)等、などて這奴を縛めざる、といきまきて指揮すれば、毛國鼎眼を怒らし、阿公、君を惑はして、婦女子を犧とす、もし其の驗を得ざるときは、罪なき人を殺し給ふ、君王の御誤なるべし、小臣之を思ふが故に、水神をこゝに迎へて、犧を受くるか受けざるかを試みんとす、是を禁むる者は忠臣にあらず、われ何の罪あつて縛を受くべきかと、呼はる、その威勢に辟易して、利勇が指揮に應ずるものなし、國鼎又阿公をにらまへ、既に生託女兩三人を遣はしたるに、水神いまだ出現せずその返命だにまうさゞるは、いよ／＼怪し、阿公みづから波濤を披きてこれを迎へなば、彼の神かならず推辭こと

な得じ、君王を待たせ奉るは不敬なり、さく／＼ゆきね、といそがして、項髮無手とかい攫みて、突落さんとしたりしかば、阿公大に驚き怕れ、顏色忽地海原より蒼さめて、戰慄つゝ掌を合せ、吾儕まことは、海神のこゝろを得たるに非ず……人をもて擬させんよしをまうしゝは、おのが誤なり、命ばかりは助け給へ、と勤解にければ、毛國鼎さもこそ、と冷笑ひ、輙て眞能扶掖て、壇の邊りに參り、さて國王にまうすやう、阿公が奸計既に發顯たり、今より人をもて擬さし給ふことは、思ひとゞまり給へ。……

毛國鼎は、既に眞鶴を救ひ得て、之をば王女の眉儕となしゝかども、惡人朝に充ち／＼、王女は罪ならぬ罪に逢ひて、中城に閉ぢ籠められ、幾その年を過ぐし給ひしに、之にも慊らでや、奸邪の時を得たる悲しさは、遂に毛國鼎を讒するに、廉夫人と通せりとなし、而して王女はそれがかくし子にて、王の子に非ずといひ、根を絶ち葉を枯らして、その慾を恣にせんとせり。此の時にしも、

毛國鼎が武藝の弟子に、陶松壽といふ者あり。文武にで秀し忠臣なり。國鼎が媒介にて、眞鶴と婚せしが、詐りて利勇等に媚びて、ひそかに機密を國鼎に報じ、以て王女を相護れりしが、利勇等國王を惑はして、國鼎を誅せんが爲に、之を陶松壽に命じぬ。松壽、即ち、己と等しき忠臣查國吉とて、國鼎が妻の從弟なりける者と共に、速に國鼎に告げんが爲めに、汗馬に鞭を鳴して、其の住所をさして、赴きけるに、途中にて王宮に朝せんとするに逢ひぬ。即ち、其の由を告げて、共に世子殿に據りて、旗を擧げんことを勸めぬ。されども國鼎は假りにも賊名を負ふに忍びず。事既に茲に至りては、死して國を護るよりてだてなしとて、王女廉夫人をぞ、心を盡し力を極めて、いかにもして救ひ進らせよとて、そのまゝ王宮にまゐり、遂に賊手に命を隕しぬ。是に於て陶松壽は中城に赴き

て王女廉夫人を救ひ出し、査國吉は國鼎の妻子を救ひ出して、後王女のおんあとを護らんがために、各之に趣きぬ。何ぞそれ悲惨悽絶なるや。

松壽は世子殿へ参りて、後門のこなたにて馬より飛びおり、つゝ門内に潜り入りて、呼門もせず、園の木立を遶りつゝ、奥ふかく参るほどに、寧王女廉夫人は、桂華殿の孫廂に、桂の花ながめておはせしが、絳の爲体いさ粛々にて、眞鶴只一人侍りつ、。忽地に外面を見て、こはいかに松壽が参りて候さ啓する間に、松壽はやがて欄杆の下に拜伏し、言語はなくて、そゞろに落涙したりけるを、廉夫人みそなはして、やうあらんさおぼせしかば、近く呼びのぼして宣ふやう、めづらかなり陶松壽、汝眞鶴さ婚姻せし夜、只一たび見つるのみにて、夥の年を過したれば、王女もわが身も面忘しに、年來戀しさ思ふ貝つ人なればこそ、眞鶴ははや足音にても知りつらめさても惶忙しく参れる事いさ〳〵心もさなし、都はいかなる分野にや、君王はいよ〳〵やすらかにおはしますか。……

(未完)

茶話それぞれ草(前承)

故木崎得立述

孤峰庵祿仙齊不羨

闘葦雄寄贈

一萩は土のめでたからんこそ、人の目立べかめれ。目利あらざる人も、名ある器は、くらゐよく物こしにもしらるれ。ことにふれていやしき名なれど堀出しといふ事ありて、人の心をまどはしぬ。すべてほり出しといふものは、たゆべきにもあらぬわざにもたへ忍ぶは、只欲をおもふがゆゑなり。誠に愛着の道、その根深く源遠し。其六塵の樂欲多しといへども、厭離しづべし。老の中に、まどひのひとつやめかたきのみぞ、たるも、若きも、智あるも、愚なるも、替る事なしといゆる。されど、茶器をあきなうものゝ、さらさの小風呂敷より、出せる香合には、

たれも、よくつながれ、妙喜寒雲の古木にて作
れる茶器には、必よるとぞいひ傳へ侍る。みづ
からいましめて、おそるべく、つゝしむべきは、
此のまどひなり。



唐やまとの綾織　高雄の松

今は昔、支那の、世は亂れに〳〵て麻の如く、後の世までも、戰國時代とて、快からぬ名を流しゝころ、齊の國の宰相に晏平仲嬰とて、世に聞こえたる人ありき。其の御者即ち、今の馬車別當に、某と云ふ、身の丈八尺にあまる男子ありけり。或時宰相、はれの事に出づるとて、都の人々ゆるきあへり。某が妻、夫は人並に秀れて高き身ながら、人の御者となりて、あまたの人に見られむことのいかに口惜しからむと思ひて、門のすき間より、密かにかいまみすれど、豈はからむや。大蓋を擁し、駟馬に策うち何のはづる所か、意氣揚々として、甚だ得意顔なり。妻おどろき、且つ口をしさやる方なく、夫のかへるをまち、離縁をぞ乞ひける。某、其の意を得ず。いといぶかしみ、などてかゝる事をばいはるゝぞ。吾、大宰相が御馬車の御者となり。今日もはれたる御とも、道路見る人うらやまざるはあらじ。獨りいましのみあぢきなくいふは何故ぞといへば、妻、涙をかきはらひつゝ御身のつかふる君は長六尺にも滿たず。しかも身齊國の相官にてかくはしき名、世に知らぬ人もなし。しかるも常に人に自下り給へり。御身は、

長も凡の人より高き事三尺。去かるにたゞ人の一僕御、さてしも意自ら足れりとおもはるゝは、御出世おぼつかなしと、ふかく歎きかこちければ、某心をあらため、其の後いたくつゝしみ自らへりくだりしかば、人のおぼえもおぼつかなからず、おのづから主の晏子にも、其の樣の見えければ、怪みて、いまし、日頃の行、甚だ品高し。何にさとれるかと問へば、某つゝみもなく有りし事どもまをしあげたりき。此處に晏子、大にめでゝ、遂に薦めて、大夫に取たてたりと傳へらる。

皇國に、これを縱として、織りたき横の糸は、くさ〲の色あれども、おほかた世に聞えたる事は、珍しくも有らねば、こゝには名さへしられぬ、田舍女のいとやさしくて、みだらなる夫を感ぜしめたる譚あれば、取出てぬ。

明治の何年頃の春にや有りけん。花の都はさらにも云はず、いかなる山さとも、花さき競ふ頃陸奥の國に一人のうかれ男ありけり。年と云へば、四十路に近かく、妻子さへあるに、あたし色の花にまよひて、晝は己が務をおこたり、夕されば、己ば居家のあたり近きあやしの家にいたり、酒をかたむけ、賤しきはしためにたはふれ、夜のあくるをも知らで、打ち騷ぎて、一夜も遲からず歸る事なく、いとも〲無賴の男なりけり。されど、其の妻は、引かへて、なよたけのなほき心を一すぢに、盡すは妻の務めぞと、違ふ心はあらいその洗ひ去りたるごとくにて、かこち顏だにもなかりけり。夜毎に夫のたはふるゝ、はうた三味線の音を聞くにつけても、たゞ如何にせば、夫の心は思ひかふらん、取る針の目のこま〲と、思ひめぐらすのみにて、かりそめにも、睡れる事なし。夜もほの〲と明くる頃夫ゑひしれてかへり、

あらゝかに戸をたゝけば、待ちかねたれど、静かに戸を開らき、言たゞしく挨拶なし。少しも不平のいろなくかへりて、笑まひ面して、迎ふるなど、仲々よのつねならず。かくする事二とせあまり、三年にもなりぬ。やう〳〵家財も盡きんとする頃、夫、ふと酔さめたる如く、妻の行に感じ、良心にたちかへりて、こしかたの惡しき行の數々今更のごとく、身にしみて、安き心もなきまゝに、ふかく行をつゝしみければ、妻はこよなくよろこびて、遂に共に〳〵ひたふるに働きて、おこたらざりければ、次第に家運を恢復し、今は、一地方の大地主ともよばれ、思ふまゝに、人を惠む事も得るやうになりぬ。讀者諸姉よ、身によそはふ衣は美しからずとも、心には、此の綾おりをまとはれてよ。

野守がたこたり

さいぐさ



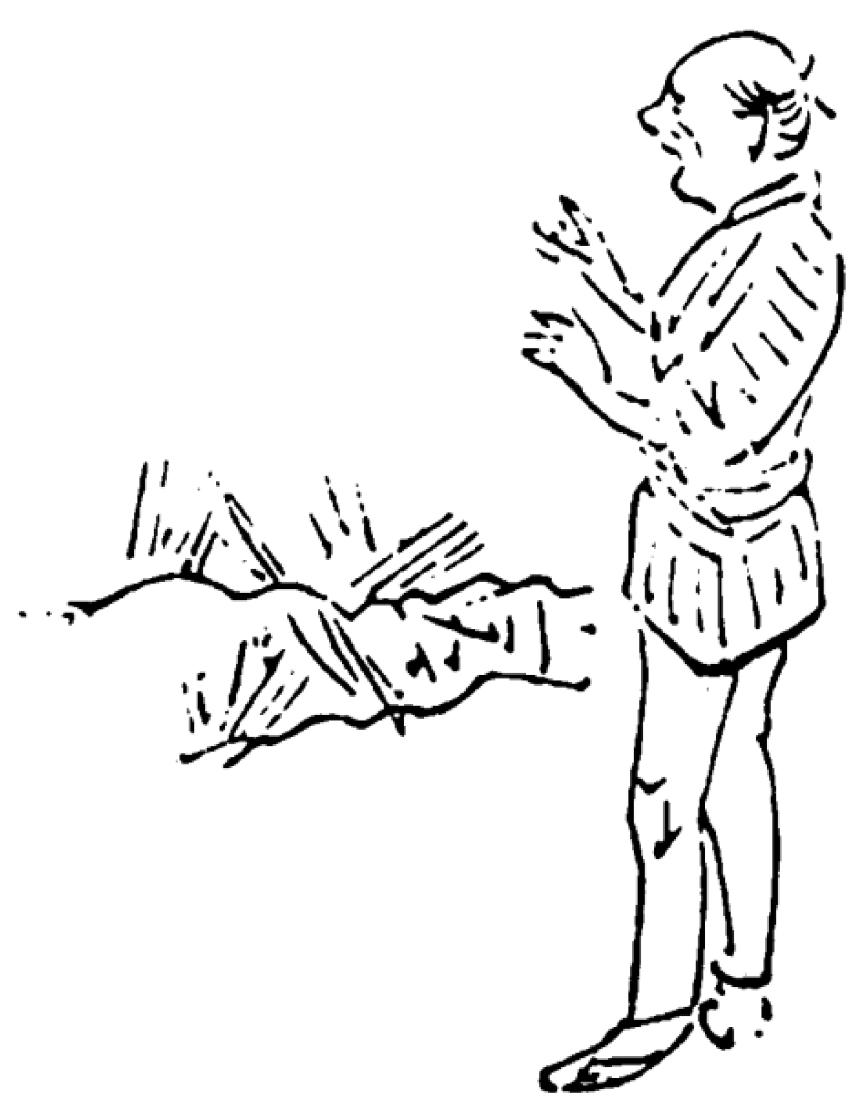
みのりゆたけき
秋の野ら
野守はこゝに
いほしめて
いもをばえゝに
とられじと
おく露しげき　さよすがら
むねのみもやす　かゞり火に
わたりはたえず　見はれども
もる夜の數を　かさねたる
つゆのたもとの　ぬるまゝに
ぬるてふことや　さそはれし
ころも丑みつ　すぎぬれば
心に似ぬは　まなこにて
いぬとはなしに　つひねたり

樂園

「この夜をば　わがよとぞおもふ
もる人の　さむべきさまも
なしと思へば　物はめむ」
あこよいざこよ　瓜なすび
いも豆さゝげ
作りとつくれる　畑つもの
口にまかせて　あさりつゝ
牙むきいきり　いさむなる
ゐゝがしわざの　おそろしや

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あかつきつぐる
きじのこゑ
さてはとゆめを
やぶられて
ながめいだせば
こはいかに



畑には跡のみ　しげくして
あれつるゐゝは　かげもなく
ふすべし芋さへ　火となりて
殘るはあけの　星ひとつ



ねむけざまし

二世 後 咲 譯

●あるまじう思はるゝもの

○醫師のやまひに腦める　○相撲の痩せたる　○新婦のふさりたる　○先生の文字を識らぬ　○犬ころしの念佛　○老人の、酒に醉ゑしれて、あちらへよつたり、こちらへよつたり、いはゆる、八人ありきをしたる。先づ、子はならぬにか、孫は持たぬにやと思ひあなづらるゝよ。然るを、其の孫子を連れたるが、まはらぬ舌をもて、醉はぬよしを言ひ罵り、時々は、孫子の方にむかひて立ちどまり、しばしがあひだ、にらみすゑなどしたる。あまり、親らしく祖父らしくなきにて、むしろ腹たゝしくもあらず。

●時には嫌はぬもの

○餓ゑたるさきの麤食　○鐵道馬車人力通はずなりたる後の圓太郎馬車　○雨にあひたる時の軒した　○炎暑の旅路に氷賣にあひたる。暑氣あたり、腹くだし、叩かては、虎列拉赤痢の仕入。サヽ怖や。しかしながら我慢して買はず過ぐる者いさゝ稀なり。

●羞ぢて出でざるもの

○新婦の粗忽したるさき　○尼の懷胎者　○富人のにはかに落魄れたる時　○いさう愼むべき時に酒に醉ひたるもの。

●かならず間違あるもの

○發狂者の刃もの三昧　○盲目者の木のぼり　○女達の夜ありき

移轉博士

白松園主人

寄るべもなみに漂ふ船の、浮き沈みは、人の習ひにこそ、と觀念の眼にも、げにや常なき世のたゝずまひ、昨日の宿にけふの部屋、價安きを貪れば、汚穢喧騷の患あり。塵ばなれて風心地よきところにと志せど、學窓遠くして時間の費え、往來の不便いふべうもあらず。市中の二階、六疊のひとま、漸うにして搜しあてたりと思へば、聲高に罵るお主婦、車馬の響、好ましからぬ友の、またかと驚かるゝなど、人の家の心に任ざるべしとは思はねど、アヽ厭なとおもふど、半日だにおぼつかなくて、讀書の興も、なかば失せぬるてゝちのみせらるれば、え堪へでかへぬ。未だ三日も立たぬに、はやかはりしかど、友に笑はるゝは常の事。小車のめぐり〳〵て、あるは二月、早きときは五日、それそきも三月、いみじう氣に入りしが十月、こは八年の間にひとたびのみ。そのあひだ、郵便の遲延は、勝手の小言、脚夫の迷惑、來訪者の困却、行く先さ、つや〳〵知れぬとて、空しく歸るは珍

らしからねば、さも思はねど、移轉博士の名、一たび廣まりては、君の宿の紹介なら、免し給へとは友人の親切、なる程思へば、餘りよき事とは思はれねど、宿をかふるたび毎に、快然として思想を新にする心地して、窓おし開き、机に對して、つら杖つきて、向ひを屹と見出したる折は、得も云はぬ快味、忘れ難く、之ばかりは、あらゆる周圍の迷惑も、顧みるに遑なきなり。

おのれは實に、此くの如き移轉好にて、その移轉するにつけては、よその内幕、殊に其の家庭の欠點の、よく知らるゝなり。但し、おのれは、彼の營業をする下宿屋は、甚だ嫌ひにて、東京に居るうち、僅の間、只三たび下宿屋に居りしのみ。常に普通の家の貸室を望みて住めるにて、自炊は最初よりの事なり。すべて人の家に居るに、金を出して飲食するときは、口舌は常に此の飲食のことより起り易し。互に利益を計るが故なり。おのれ此の事を知れるが故に、決して人に頼まず、友の訪ひ來りし時といへども、常におのれの手によりてなせれば、煩ひあるに似たれど、更に氣兼のなきは、こよなき事とおもへり。ふた月、み月とをるうちには、いと親しくなりて、隨分世話になりし事もあり。

人の家の風波は、女に關せざる事なきは、殆んど稀なるべし。といへば、女は非常に厄介者のやうに思はるれど、さにはあらず、完全なる女の少ければなるべし。ある家の嫗、いとまことある人にて、はやく夫に別れ、そのわすれがたみ三人ありけるを、女の手ひとつにて生育し、貧しきうちにも、夫のもてりし產を削らず、やう〳〵に人とならせしは、いみじきいさをなりしかども、長女に養子を取りしより、二人の弟との間、常におもし

ろからず。おのれ隣室にありて、此の口舌を聞くことたび〳〵にして、仲裁せしこともおほかりき。之此の養子の、心よからぬよりおこれりし事なるが、もと媼の淺墓なるより原因せしなり。またある家の主婦、少しの文字ありといふを頼みて、よろづわがまゝにふるまひ、夫をば心のまゝにして、絶えて愍みの心なければ、親戚離れ、故舊疎んじて、來りし人も來ずなりて、勢ひ孤立となれども、曲りし根性は少しも直らず、右の者を左にする事すら厭へば、財産消耗婢僕怨みて、殆んど敵手にする者なけれども、おのれあしとも思はず、口ばかり達者にて、大体晝寢を得意とせり。沙汰の限り、傍の見る目も堪らねど、居る事三月にして、おのれは逃げ出しぬ。またある家に、憐むべき一少女あり。父はさるべき官吏にて、いと心正しき者なりしが、病にかゝりて足の自由を失ひしより、

遂に十餘年も床に臥せり。母は淫りがはしき性ありとて、此の少女の當歳なりしをりに、追ひ出ししとぞ。祖母八十に近く、一人の叔母ありて、之のみ手足を勞して、僅に糊口を凌げり。財産既に蕩盡じて、此の少女の敎育心に任せずとて、父は病蓐に在りて、此の事のみをうち歎けり。歡樂には他人も集り、艱難には親戚も離るゝ習ひ、世にあるほどは、親しく訪ひ來りし人も、次第にうとくなりて、よその見る目も心ぐるしく、おのれ遂にふた月にして、此の家を移りぬ。之もそのもとは妻のよからざりしより、不幸うちつゞきたりけらし。またある處に、靜なる家ありしを見出でて、移りし事あり。處は家まばらに、木立ちひまなく、靜なるに相違なけれど、此の家にまだ一少女あり。前さなるとは反對にて、父なる者は早く死し、母なん祖母と共に、此の兒を育てける。婦

人の手に養はれては、自然愛に溺れて、家庭の嚴ならぬ處より、よからぬ處にのみ出入し、よからぬ人と遊び、よからぬ事をのみ見聞くにつけては、よからぬ、かたは、なみ〳〵よりいとませて、まだ十五にも足らぬ年なるに、寄席演劇をこよなき樂みとし、母の留守がちなるを得たりとして、之に足を入るゝこと絶えず。母はこのさまをいたく悲みて、我が手足を勞し心を痛むるも、皆汝のひとゝなるを樂みてなるに、かくはよからぬ道をのみ好める淺ましさよと、怒り悲めども、習ひ既に性となりては、甲斐あるべくもあらず。母のいふことすら用ゐざれば、況して祖母の言は、稻葉をわたる風の、そよとだにきゝめあるべしともおぼえず。ひまだにあれば、役者の品さだめ、聲色をのみ、高やかに罵る事の、うるさく傍痛く、暫しも得耐へで、半月にして、此の宿を移りぬ。すべて移轉の數、無慮三十か處の多きに及びけるが、その間、或は上野山の、萬綠叢中の蔭に宿り、或は龜井戸あたりに住みわびて、秋暮れ方に配所の月を眺め、あるは豊島の奥に潜みて、戸山が原の喇叭に、夢をおどろかし。あるは犬山道節、附ケたり龜篠、蝦六のあとを疑ひ、あるは太田道灌がいにしへを忍ぶなどは、さすがにおもしろきふしなきにあらねど、大概宿の住みよしと思はるゝところなく、中にはいみじう家庭のうるはしくて、ひそかに羨しくおぼえし處なきにしもあらねど、之さへ障りありて久しくあられず。あるはおのれの子の賢きに誇り、金あるを威張りて、人を侮りなどは、皆心淺き女より出でぬはなく、男子の口舌は甚だ稀なりき。世に無敎育の女子は、せん方なけれど、苟くも明治の敎育を受けたらん者の責任、之等の點にあらざらめや、と移轉博士ひそかに痛

歎に堪へず。



岸上藤　　東久世通禧

紫のくもかとみえてわかはさす
かたやま岸にかゝるふちなみ

遠時鳥　　高崎正風

いりはてし月の行衛やしたふらん
山の端とほくなくほとゝきす

杜新樹　　鍋島直大

夕月のひかりはうすきおくやまの
あを葉かなかに鳴ほとゝきす

庭卯花　　前田利嗣

つきやまをめくれる池に影みえて
卯月はなさくなつは來にけり

橋螢　　津輕承昭

ゆく水にうつるほたるの數そひて
吹く風すゝし宇治のかはゝし

山新樹　　竹屋光昭

來てみれは遲さくらさへ散り果て
あを葉凉しきやまのしたかけ

路卯花　　宮地嚴夫

立とまりみぬひとそなき道のへに
いまをさかりとさける卯の花

池杜若　　北郷久政

白さきのむれゐる池のかきつはた
いろさやかにも見えにける哉

夏露　　坂正臣

ゆふたちのはれたる庭の草葉には

虹のいろなるつゆおきにけり

夕早苗　植松有經

夕日かけさしのこりたる小山田に
をかさかたむけ早苗とるみゆ

社頭新樹　三輪義方

はふりこが白きよろひもなつめきて
わかばしげるかみのひろまへ

永村三右衞門の妻さた子

佐々豊水

をみなべしゆかしきすがた露にふして
なでしわが子のこゝろをしも

松陰餘花　蜂須賀隨子

ふきよせし松のはひねのさくら花
夏までのこるゆきかとぞみる

岸邊牡丹　近衞貞子

はちす葉も浮かひそめたる池みつに

影ふかみくさ咲き匂ひつゝ

芍藥　鍋島榮子

水枝さす青葉をくらきにはの面に
いろさやかなるさくやくの花

夕卯花　前田朗子

卯の花の垣根つゝきにさくはなは
くれてもくれぬ心ちこそすれ

蛙　柳原愛子

さくら散る田中の道のせゝらきに
花をふみてもなくかはつかな

野新樹　大谷章子

野つかさの松のみどりも色そひぬ
木々の青葉のなかにみしりて

谷竹　常盤井文子

岩はしるたきのしふきに谷かけの
たけの下葉はたえすぬれつゝ

暮山嵐　小川直子

夕日影かたふくみねにかせたちて
ねくらもとむる鳥さわくなり

河藻　中島歌子

わか門の小河にさけるひしのはな
いつ流れきてねをはとめけん

砧　服部磯子

降わめも眠はてぬかんたけの子の
わすまておかはのひ過なまし



雑報

●皇后陛下慈恵醫院行啓　いにし廿五日、午後陛下には、宮城御出門せさせられ、高倉典侍御陪乗香川皇后太夫等の供奉にて、芝愛宕町慈恵醫院に行啓わそばされ給へり。同院にては、醫學生、看護婦等、門内に正列す、また、玄關には、幹事松方伯爵夫人滿佐子、外二十五名、また、高木院長、同次長等うちつらなりて、うや／＼しく奉迎し。陛下には、院長の御先導に依り、便殿に入らせられ、幹事の貴婦人達、及び、院長、其の他に謁を賜はり、さて、式場に、臨御せさせ給ふ。高木院長慈恵醫院、第十三報告書を奉呈し、左の奏上をなせり。

維時明治三十三年五月廿五日、本院規則第二十條に據り、第十回總會を開くに當り、辱なくも、皇后陛下親臨の榮を賜ふ。恐懼の至りに堪へず。本院の業務に從事せる者は、勿論、苟くも、慈善事業を贊助する者、誰れか、皇恩の優渥なるに感泣せざる者あらんや。臣等勵精以て、叡意を奉体し、疾病傷痍に罹りたる赤貧無告の者をして、益々、皇澤に浴せしめんことを期す。誠恐誠惶謹で奏す。

東京慈惠醫院長正四位勳二等醫學博士　高木兼寛

夫れより、高木院長は引續き、左の卒業看護婦生徒に卒業證書を授與し、終て、陛下には、便殿に入御、暫時休憩中、特に供奉女官をして、入院患者を見舞はしめ、倘香川皇后宮太夫、御使として、直に各患者の病床に就き、一々恩賜金あり、中にも、小兒には貴重なる玩器を賜りたるに、患者一同、何れも、天恩の優渥なるに感泣したりと聞く。

笹倉のぶ、坂本てる、星野仁子、金森なを、中嶋見惠、岡本たま、伊澤しん、小管つる、齊藤ふく、山崎ゆき、萩野つる、吉野津賀

尚は陛下には、同三時過より、芝離宮に御立寄り相成り、左の幹事、及、職員を召させられ、有難き御諭旨ありたる後。御酒肴を賜り、同四時すぐるころ、還啓仰出されたり。

松方伯爵夫人滿佐子、田中子爵夫人伊與子、樺山伯爵夫人登茂子、青木子爵夫人エリザベット、大隈伯爵夫人綾子、野津伯爵夫人登女子、伊東子爵夫人美津子、川村伯爵夫人春子、田中子爵夫人須摩子、仁禮子爵夫人ゑ賀子、高島子爵夫人春子、毛利公爵母安子、鍋島侯爵夫人榮子、三宮男爵夫人八重野、井上男爵夫人光子、槙積夫人歌子、鮫島夫人峰子、實吉男爵夫人速子、前田侯爵夫人朗子、黒田侯爵夫人濟子、戸田伯爵夫人極子、高島婦人富子、長崎夫人多惠子、小笠原伯爵母純子、金子男爵夫人彌壽子、末松男爵夫人生子、高木兼寛、實吉安純、

●兩殿下の御西向　東宮、同妃殿下には、神宮、及び、山陵御參拜の爲め、去月廿三日午前九時三十分、青山東宮御所御出門、御同乘、黒田武官長、御陪乘、高辻同侍從長、橋本宮中顧問官、中田東宮主事、田内、清水谷、山路三侍從武官、多久、大迫兩侍從、西郷、池邊兩侍醫、吉見、生源寺、富田等各女官供奉、御同伴の有栖川威仁親王同妃兩殿下は、齊藤別當、西大尉、及、家職、侍女を從へさせられ、御同列にて、同五十分ごろ、停車場御着　皇太子同妃兩殿下には、松本作業局長官の御先導にて、プラットホームに入らせられ、奉

送の爲め、兩側に整列せる各皇族、各大臣、樞密顧問官、陸海軍各將校に謁を賜り、間もなく、御乘車、兩殿下には、御車中より奉送者に御會釋あらせられ、同十時奏樂嚠喨たる間に御氣色麗しく御發車相成りたり、尤も停車塲に奉送せしは小松宮彰仁、同妃、同依仁、同妃、山階宮菊麿王、同妃、華頂宮博恭王、同妃各殿下を始め奉り、各大臣、土方、大隈、板垣、榎本、各大臣侍遇者、各樞密顧問官、九條、二條、鷹司、德川諸公、前田、山內、松平、嵯峨の諸侯、柳原、松浦、廣橋、廣澤の諸伯、其の他在京文武百官、幷に千家東京府知事、松田東京市長等にて當日、皇太子殿下には、陸軍步兵少佐の御正裝　妃殿下には、水色の御洋裝を召されたり。

●神宮御參拜　東宮、幷に同妃兩殿下には、翌翌日午前五時御起床御沐浴御朝餐後、有栖川宮兩殿下に御對話黑田、高辻、橋本、吉見、生源寺、等に謁を賜り、九時御旅館御出門、御同乘にて、先づ外宮御參拜、祭主賀陽宮、宮司冷泉伯、其の他神宮、幷に、竹屋掌典等、束帶御祭典を奉仕し、式の如く　皇太子殿下、次に、妃殿下、御玉串を捧げ御參拜畢て、御退出引續き、內宮御參拜あり。御式御順序、大抵前と同じ。沿道拜觀者堵の如し。其の日は御滯在翌日午前九時、山田驛御發車京都へ向はせ玉へり。

●閑院宮殿下　閑院宮載仁親王殿下、巴里御滯在中、佛國大統領との御會見に關し、三月三十日のフィガロー新聞は、左の如く記せり。

諸禮局長全權公使、クロジェ氏、昨日午後四時十五分、閑院宮載仁親王を、エリーゼ、(大統領官宅に)御案內申さん爲め、大統領の馬車、三輛を以て、御旅館に奉迎せり。親王　、騎兵大

佐の御正裝にて、レジオンドノールの勳章を佩びさせられ、クロジエ、及び、在佛國全權公使、栗野氏と、第一の馬車に召させられたり。他の馬車には、親王の隨行員、爵位局幹事岩倉公爵、内山大佐、大島中佐、松井式部官、及び、カルノー、大尉等、皆正裝にて乘込みたり。行列は共和騎兵、一大隊を以て、護衞せられ、指揮官は、プーシエー氏にて、佛國陸軍大尉二名、親王御乘車の戸側に陪乘せり。エリーゼへ着御の際は、同館の軍隊軍旗を飜へし、洋々日本の國歌を吹奏して、陸軍の敬禮を表彰せり。親王は、玄關にて、大統領の大秘書官バイユー將軍及、諸務局副長モラール氏に迎へさせられ、クロジエー氏の案内にて、大統領方に臨せられたり。其の時大統領は、文武官を率ひて、客席を退出せり。御會見二十分間の後、親王とルーベ

ー氏は、相互、其の隨行員を紹介せられたり。親王のエリーゼ館を出御在らせられたる際も、着御の際と同樣の敬禮を受させ玉へり。然る後、大統領は、五時十五分を以て、バイユー將軍を率ひ、答禮の爲め、親王をホテルコンチナンタールに訪問し、クロジエ氏、及び、親王の隨行員一同は、之をルージエド、リール街の庭内に歡迎せり。而して大統領は、獨り親王と客席に入りて、五時三十分に退出し、親王は、之を階段まで見送らせ玉へり。親王は御在巴中、嘗て、研學遊ばされたる、サンシール士官學校、及び、陸軍大學校を見分遊ばされ、次に御歸朝、以來、八年間の進歩を觀察遊ばされんが爲め、フオンテーヌブロー及び、他の兵學校等を歴問遊ばるる筈なり。大統領陸海軍兩相、及び、在佛日本公使は、晩餐を以て、親王を饗應しまつる由な

り。

●菅公會　同會は、明治三十五年大宰府神社に、一千年の祭典を擧行すると共に、社殿を理修し博物館圖書館文雅會堂を建設し、及び梅園を擴張し、以て、神社の壯觀を完全するの目的を以て建てられたるものなるが、會長は、曩に、大閤廟建立の爲めに、盡瘁せられたる、黑田侯爵にして、評議員には、侯爵前田利嗣、伯爵土方久元、伯爵東久世通禧、伯爵副島種臣、伯爵壬生基修、伯爵前田利同子爵高辻修長子爵前田利鬯、子爵抑俊郎子爵久松定弘、加藤弘之、男爵渡邊清、金子堅太郎、西村茂樹、南部茂光、深野一二、小野隆助、金山尙志の諸氏なり。又、事務監督には、辻新次、會計監督には、肝付兼行の諸氏なり。太宰府神社、は、菅原道眞公、廟所なることは、天下萬衆の共に知る處にして、明治卅五年は、實に公が延喜三年の薨去を距ること、一千年に相當れり。抑公が、純忠至誠の精神は、萬世人臣の龜鑑にして、千歲の下猶、國民をして、尊崇追慕措く能はざらしむるものあり。而かも、公は、古來我が邦の文神として、三尺の兒童も尊崇する事を知れり。是に依て是を見れば、こたびの擧は實に國民敎育に向て、一体振作を與へ、國民の實踐躬行の精神にもて深烈なる刺激を與ふるものと謂ふべきなり。

●心の錦　千葉縣安房郡船形町字大塚の伊豆倉彥次郎の妻に、お增(三)と云へるものあり。勇名取濱の片邊に詫び住居、擔傾きて漏る月影を居ながらに眺め、衣は藻を引く破れ一單、見るもいぶせき暮しなるも、お增は、資性柔順にて、所夫彥次郎には齡七十に餘る姑某の數年來病の床に就けるを甲斐〲しく看護して彥次郎の漁業に出し隙とて聊か怠る色もなく、片手には、三人の子

供を育てつゝ、藥餌の世話より、姑の寢起まで、皆手一つに引受けて、尚も、暇あれば、賃仕事を營みて、家計の扶けを爲す抔、殘る隈なく、立働くこと。數年一日として、渝りあらねば、聞くもの皆お增の心掛に感ぜぬはなしと云ふ。實にこそ、衣は襤褸なれ。其の心は錦にも勝りて、最とも賴母し。

●賤女の赤誠　今回東宮殿下の御慶事に就き、茲にいとも感ずべき話こそあれ。高知縣吾川郡伊野町字加茂に御庄辰とて、製紙を業とせる賤女あり。齡は、早や古稀を越えしかど、矍鑠として衰へず。若きより　皇室を尊び敬ふの志篤く、御慶事當日の如きは、未明に兩　陛下を拜し奉り、且兩　殿下の御慶事を祝せんとて、同地の高等小學校に來り、職員に向ひて言ふ樣、妾はさきに、皇太子殿下御婚禮の御祝あるを聞き、心の嬉しさは、譬ふるにもの無く、今日の吉日を待ち詫びてこそ候ひつれ。御校には、兩　陛下の御眞影を奉藏しあるを聞きたれば、賤しき身には候へ共、只一目にても尊き御眞影を拜し奉りたく存じ、心計りは、身を潔めし心得にて、木綿着なから、常とは衣裳も、着換へて參り候程に、何卒、私の心願お聽許しあらまほしと、お許しの上は、御尊影の御前に、此の品捧げまつりたしと、軈て、懷中より「天皇樣奉祝辰の歲の女御庄」と記したる熨斗紙を取出し、恭しく職員の前に差出したるにぞ、一同は、ほと〳〵お辰の赤誠に感じて、拜賀致させ、又熨斗紙は謹んで、御眞影の御前に供へ奉り、拜賀式了りし後同校の岡本訓導は、お辰の美事を演說して普く、生徒に訓示し、尚右の熨斗紙は紀念の爲め、扁額に仕立て、永く同校に保存し置くと云ふ。

●忠僕の賞與　十八日富山縣知事より、左の通り賞與ありたり。

東礪波郡城端町大字城端町平民
堀越源右衛門

資性敦厚にして、年齒甫めて十五、出で同町布崎新右衛門に仕へ、誠忠、甚だ勉む、當時主家の不幸、交臻り、新右衛門幼主を遺して逝き、幼主、亦夭折す、即ち夙夜精勵、主家累代の生糸商を經營し、大に世の信用を博して該商の隆盛を致し、篤く前主遺孤老婦を扶助して、歴事三代以つて、當主に至る、其間殆んど五十年、自家亦宗族相和し、好んで教育慈善の事を努む、實に他の龜鑑たり、依て爲其賞木杯一組下賜候事、

●親子の襟度　三重縣多氣郡五ヶ谷村大字朝柄、高山勘藏、長男、重藏(一四)は、性質善良にて、學業も優等なる良生徒なるが、去にし日退校の途次學友を伴ひ來りて遊び居る内、如何なる機にや、友の吹ける矢は、重藏の左眼に適中したり。左れど重藏は、事荒立てゝは、友の迷惑と、左あらぬ体に家族にも秘し居りしが、眼球の次第〳〵に腫れ上りたるより、父勘藏は訝りながら、其の仔細を尋ねたるに初めて、其の實を告げたるにぞ、早速醫師の治療を受けたるも、手後れと爲りて、憐れ、重藏は、一目を失ふの不幸に立至りたり。斯くと聞きたる友の父は、痛く打驚き、人をして、只管詫したる上、相當の治療費を辨償せんと申込みたるも、素より過失に出たる事御互に何時如何なる過失のあらんも知れず、決して、氣にな懸け給ひそと、勘藏、少しも、怨る色なく、且つ、重藏も、不具に陥りしを露嘆く氣色なしと云ふ。父子の襟度最も床し。

●學生の風紀取締法　高等學校長會議に於ける、學生法風紀締法は、文部省よりも、原案を提出し、各高等學校長よりも、各意見を提出し、目下當局者に於て、其の意見を取纏めて、調査中なれば、遠からず訓令となりて、發布せらるべし

と。

●公私立高等女學校數　四月十九日調べ、全國公私立高等女學校數、公立四十二校、私立七校、通計四十九校なり。

●全國公私立中學校　四月一日の現在、左の如し。

東京	二六	愛知	五
京都	三	靜岡	四
大阪	六	山梨	一
神奈川	一	滋賀	二
兵庫	七	岐阜	四
長崎	五	長野	五
新潟	七	宮城	六
埼玉	五	福島	五
群馬	七	巖手	四
千葉	七	青森	三
茨城	六	山形	四
栃木	四	秋田	三
奈良	四	福井	三
三重	四	石川	四
福井	三	愛媛	四
富山	三	高知	五
鳥取	二	福岡	六
島根	四	大分	六
岡山	四	佐賀	四
廣島	五	熊本	三
山口	五	宮崎	三
和歌山	二	鹿兒島	五
德島	三	北海道	二
香川	四	沖繩	一

●各府縣慈善事業の一班

府縣	名稱
東京	慈惠醫院　東京市養育院　盲啞學校　免囚保護會　巣鴨家庭學校　瀧川孤女學校　濃飛育兒支部　福田會　東京感化院　婦人共立育兒會　婦女共愛會　共濟慈善會　大日本慈善協會　軍人遺族救護會　東京孤兒院
京都	感化保護院　京都孤兒院　盲啞院口實業慈善會
大坂	慈善共與會　帝國慈惠女學院　棄兒養成館　大坂慈惠院　大坂孤兒院　汎愛扶植會　大坂救兒院　大坂慈惠病院　博愛社　小林授產場　愛育社　慈善新報社　信愛女學校

神奈川　横濱孤兒院　悲田會　小兒保育院
兵庫　神戸孤兒院　愛隣館　救民院　姫路慈善院
長崎　長崎育嬰院　慈善感化院
愛知　愛知育兒院　孤兒自助會　東海育兒院
石川　大野太三郎氏の事業　金澤孤兒院
廣島　廣島育兒院　婦人慈善會
熊本　熊本貧兒寮　東肥婦人慈善會　肥後慈惠會
福岡　龍華孤兒院　久留米慈善病院
高知　高知育兒院
徳島　阿波慈惠院
香川　南海感化保護院
岡山　岡山孤兒院
島根　松江孤兒院
鳥取　鳥取育兒院
岐阜　濃飛育兒院
奈良　奈良慈善館
茨城　茨城免囚保護會
靜岡　遠江育兒院　東海訓盲院
長野　上田慈善會
富山　富山慈善會
群馬　上毛孤兒院　前橋積善館
山形　山形育兒院

北海道　北海孤兒院　北海免囚保護會　函館慈善病院　函館慈善院　小樽孤兒院
臺灣　慈惠院慈惠病院

●巴里大博覽會の光景

開會式の有様　人の噂のたかき世界大博覽會は、愈々去る四月十四日を以て、シヤンドユルスの大廣間に、其の開會式を擧げたり、世界文明の華を拔き、粋を鍾めたるものなれば、其の式の壯嚴美麗なるは、こと葉も筆も及ぶ所にあらず、定刻午後二時前大統領ルーベー氏は、眞紅の服裝をなしたる、其の夫人と共に、佛國風軍服徽章の燦然たる軍隊整列の間、縫ひ三色の國旗の、天日を覆ふて、小暗き下に、馬車を驅りて、正門に入れば、引續き、各國使臣、事務官出品人總代、及、國務卿貴族學者、及、其の夫人等綺羅星の如く、其の後に從ひ、無慮二萬餘人入場したり。

場内は、凡、我が帝國議會議事堂を六ヶ所合せたる程なるが、中間一本の柱もなく、屋根は繪玻璃を以て、張り詰め、天井には、佛國の商工農漁業の實況を油繪にて寫出し、致富の因由歷々として推想せしめ得べく、又周圍の壁畫若くは、柱の彫像等は、佛國古來の歷史上に關係ある人物、及び、顯著なる事蹟を顯したり、參列者の席定まるや、先づ、商工大臣博覽會總裁起つて、今回大博覽會の由來、經過を報告し、併せて、其の抱負と希望とを演説す。雄辯滔々殆ど三十分に渉り、時々拍手起る次に、大統領ルーベー氏起て、祝辭を朗讀す。式は、一時間餘にして、終りを告げ大統領、及び、隨從の一行は、トロカデロを一週し、ボントレナより船に乘りて、セイン河を遡り、其の官舍に入れり。當日の日本人にして、參列の招待を受けしものは、栗野公使を初め、公使館員林事務官長、及び事務官、書記、新聞記者、出品人總代等四十餘名にて、各其の資格により、待遇せられたり。尙、式場に於て、特に日本人の感觸せられしは、大統領夫人を始め、貴婦人令孃の參列者、頗る多數なることなりきといふ。

商工遞信大臣の演説中、最も緊要なる一節を左にかゝぐ。

今日、此會場に在る人は、僅かに數分間にして、世界の各國を巡覽するを得べし、セイン河の兩岸に沿ふ所の建築物は、其の構造相異りて、之を目擊せば、單に心神の愉快を感するのみならず、世界各國其の教育風俗等を異にするも、皆是れ、同胞にして、共有物たる學藝美術の進步を謀るは其の義務にして、又、幸福を得る爲に、最も必要のことたるを、自然に悟るに至らむ。

●東京盲啞學校卒業生　東京盲啞學校にて、先月廿二日卒業證書を授與せられたるは、盲生、尋

常料四名、同鍼治按摩科六名、啞生尋常科三名、圖畫科三名、裁縫科三名にして、內二科兼修の者あるを以て、合計盲生八名、啞生六名なり。又同校にては、今回新築の寄宿舍落成せしに付き、差當り、二十名の盲啞生（重に女生）を收容するよし。

●實母を尋ね來て、迷子となる　牛込區築土前三十一番地松本ナカ（三三）は明治二十一年中、夫を持ちたるも、其の後、夫は二十八年中、無斷にて、桑港へ赴きたれば、その頃より二人の中に儲けし、本年十歲になれる亮といふ子供を、川崎在砂子村田中六三郎方へ、里子に遣りありたるが、誰れ言となく、實母は、東京にをるといふを聞き、之を慕ふ心から去し十六日頃より、鄙の家路を迷出し、着京の上、幾日も掛りて、二十日の夜、前記の築土前邊までは來たれど、尋ねる家の知れざれば、其の最寄の下宿屋の軒下に悄然佇み居るを警官が保護して、牛込署へ留置き、六三郎へ打電して、昨日引渡したるが、亮が、家を出づる時一人にては、寂しと同村の古谷藤次郎の次男仁太郎を（六ツ）連れにして來り、神田邊にて、互に見失ひたるを、仁太郎の方は、神田署の手にて保護し、養育院へ入れありし事分りたれば、六三郎は、大に喜び勇みて、養育院へも行き、二人の迷子を連れて急ぎ歸宅したりとぞ。



明治卅三年度女鑑歌文月次兼題

六月廿日
- 歌　樹間月
- 文　旅行日記の一節（廿四字詰廿行以內）

右六月八日〆切

七月五日
- 歌　烈婦栗女の傳をよみて
- 文　朝顔

右六月廿三日〆切

七月廿日
- 歌　深山瀧聲
- 文　着鄕の期日をかねて知らする文（弟妹に）

右七月八日〆切

八月五日
- 歌　夕立
- 文　家庭のたのしみ

右七月廿三日〆切

八月廿日
- 歌　船納涼
- 文　歸省中同窓の友におくる文

右八月八日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題每に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　住所　姓名
……
……
……

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題　住所　姓名
……、……、……。……
……。……、……。……

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總べて沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。



教の庭

六月五日　霖雨の頃亡人を思ひて

天　　三河豊橋町　服部萬子

君まさばとひみとはれみいぶせさも
　なぐさめましをさみだれのころ

地　仝　加藤靜子

なき人をしのぶのゝぎのさみだれに
　そでのしづくもひまなかりけり

人　大隅國肝屬郡鹿屋村下谷　山田稻子

ほとゝぎすなみだなそへそなきひを
　しのぶのゝきのさみだれのころ

秀逸七首

君しのぶそでのなみだにくらぶれば
　ふるさみだれはかずならぬかな　藤井りゑ子

さみだれのふるに心も晴れやらで
　またなきひとのしのばるゝかな　有信やす子

（以下原稿到着順）

さみたれのふるにつけてもなき友さ
　ものかたりせし昔しなそおもふ　福原董子

はれまなきあめにもにたり我なみた
　なきはらからな戀ひしたひつゝ　戶倉信子

わすれては亡き友かきな思ひいでゝ
　なみたにおくるさみたれのころ　大谷津峰子

五月雨は晴るゝいさまもあるものな
　ほすよしもなきそでのうへかな　穗積稔子

たらちれのましゝ世しのぶ夕くれに
　そでぬらせさやさみだれのふる　坂本光子

なが雨にのきのいさみつくりかへし
　いさゝしのばる亡きさものかけ　生田目英翠子

我が袖のしからみさへもくちはてぬ
　なきひさしのぶさみだれのころ　關口みつ子

さつき雨いさゞなげきにしつむかな
　きみさし居てももの悪かりしな　高砂菊代子

のこしおきし君が水くきさりいでゝ
　なみだにむせぶさみだれのころ　高砂き代子

きのふ今日ふるさみたれに亡き人な
　しのふこゝろのまさりけろかな　木村春子

なにさなくあはれなさそふ五月雨に
　なき人しのふこゝろおもひに　木村好子

なき人なしのふゆふへのさみたれに
　あはれなそふる怪さゝきすかな　桂千代子

五月あめわすれかたみのこさのはな
　おもひいてゝそそでぬらしけり　宮田けい子

つく／＼ささ月のあめのさひしさた
　　川村幸子

きみまさてはや一とせをすきぬるを
きゐしはゝそこひしかりけり
片山あや子

なき人をしのふなみたにくらへ見む
またぬれそむるさみだれのそら
綾脇ます子

なき人のありしむかしをくりかへし
はるゝときなくふれるさみたれ
吾妻ちか子

まきるへきひともとひこてなき影を
なみだにかたるさみたれのころ
内田さく子

踊らしとかれてはしれと折しもあれ
いとゝしのふやさみだれのそら
大谷よし子

さみたれになき人をしもしのふくさ
なみたにぬるゝさみざれのそら
宇高松子

屋根はあれとふる五月雨になき人を
しのふにあまるわかなみたかな
田村いれ子

はれやらぬ軒のたまみづ身にしみて
しのぶなみたにそでぞぬれぬる
松尾富美子

としごとにかたみの軒のいとみづの
くゝ問かけりしともぞこひしき
松尾せい子

亡きとものありしむかしを思ひいて
はれまもみねすともなしぞもふ
尾上さい子

亡き人をしのぶなみだのはれぬまに
またふりそふるさみだれのそら
佐々木やす子

さみたれの寂しきこころはことさらに
亡き友ひとをこひしくぞおもふ
長野たつ子

ふりそゝく雨のおとこそみにしむれ
むかししのふのきみをおもへは
荻原章子

うれ〱はふる五月雨もかなしきを
なき友おもへばそでぞぬれける
吉村隆子

ふりしきるながめわびしきたそがれに
さきだつひとなしのびけるかな
石井豊子

なき人をしのぶなみだにあらそひて
ふるもさびしきのきのさみだれ
徳永萬壽子

なき人をつく〲しのぶさみだれに
おともはかなきのきのたまみづ
徳永廣子

さらでだにあはれもふかき五月雨に
よになきひとをおもひ出にける
小森田輝子

なき人をしのぶなみたをおきそへて
はるゝ日もなきさみたれのそら
佐々小琴子

はれやらぬ五月のあめのしくしくに
なきひとおもふそでのつゆけさ
佐々有鄰子

なき人をしたふこゝろはあめよりも
しめるおもひのさみだれのころ
溝口良子

降りつゝくけふこの頃はこもりゐて
ともにふみをは讀みてしものを
原婉子

打ちつゝくあめにふるやののきくちて
ありし昔のひとをしそおもふ
秋保こてふ子

なき人をわするゝひまもなか〱に
なほおもひいづる五月雨のころ
青木たま子

なき友のありしむかしをしのぶよは
ふるさみたれにそてそしめれる
大橋緑子

うつそみのよになき友をおもひやれは
しとしとふるさみたれそうき
鴨井はる子

なき友のしたはれにけりさみたれの
岡本眞乃子

ふるきむかしをしのひいてつゝ

五月雨にすきにしとものしのはれて
しめりがちなるそてのうへかな　岡本松野子

なかめしてわか心さへくもりつゝ
すきにしとものしのはるゝかな　岡本左多子

さみだれのしづくもたゐぬ夕ぐれは
よに亡きともぞこひしかりける　森このゑ子

さらぬたになきひと忍ふゆふまぐれ
つゆけきそてにさみだれぞふる　森こと子

つれ／＼とふる五月雨にいとゞなほ
なきともがきのしのばるゝかな　蕪木林子

君まさはありしむかしをかたりあひ
ふるさみだれもいふせかるまし　牧兼子

さなきたにものむもはしき五月雨の
たゐまもなしにそでしほるかな　白土咲子

さなきたにかはく間もなきわが袖に
けふも日ねもすさみだれのふる　石川樂子

さみたれのはるゝまもなく君を忍ひ
身もしつみなむたゐぬなみたに　石川南江子

雨をかこち常なきかぜをうらむかな
世になききみをしたふあまりに　石川久子

なき君をしたふなみたにわかそては
くちやはてなむさみたれのころ　石川類子

をやみなく降る五月雨のさびしさに
世になきとものしのばるゝかな　上原八重子

なかゝれといのりし人はかきくれて
日をふるあめにそてやくちなむ　中澤千野子

さみたれにのきのたま水つく／＼と
亡きひとしのふそてそつゆけき　西川順子

五月雨におのづとしめる此のごろは
すぎにしひとのいとゞこひしき　頴川ちか子

亡きひとをしのぶの草にふりくらし
かはくひまなきさみたれのそら　根田よし子

をやみなくふるさみたれにはなの頃
あらしにちりし君をしぞおもふ　太塚小松子

亡きひとを忍ふのきばにあめもりて
くちそはてなんさみだれのとこ　竹村竹里子

なきひとをおもひ出ればさみだれも
なみだとなりてぬるゝそてかな　瀬下千勢子

さみたれにわがそでのみか忘られぬ
くさはのかげのきみもぬるらむ　駒澤松子

しめやかにふる五月雨にいとゞなほ
しのばれにけりなきとものかげ　高やす子

なき人のふかきなさけはさみだれに
まさろしみづをくみてこそしれ　仁保甚子

なが雨のふりてやみなん折しあれど
たもとのなみだひる時ぞなき　木村菊子

なき人のむかしをいまにふるおとの
なほしのばるゝのきのさみだれ　友永準子

なき人をおもふものからさみだれの
そらもこゝろもはるゝ日ぞなき　那須昌子

なき人をしのぶこゝろはさみだれの
そらとひとつにかきくもりけり　中山庫子

さみだれのころはいよ／＼なき人を　村崎包子

よにたかき富士の裾野のさみだれに
　おもふこころのしきりなりけり　黒田明子

かきこらしころはすぼろ草のいほに
　なほはらからのふみをみるかな　黒田美津子

このころはたもさしめりて五月雨の
　なきひさおもふさみだれのそら　松梁清子

雨のかはさびしきものをなきひさを
　ふりにしひさをおもひこそやれ　虎口資子

さみだれのふりにし人をおもかな
　なほおもひ出るさみだれのころ　下田鶴子

さみだれのいぶせきさきはなき父さ
　わがこころもでもうちしめりつゝ　服部倫子

われのみかなれもしのぶか亡ひさを
　さもにすみにしこさをしぞ思ふ　山代由子

さみだれのふるき軒ばのしのぶにも
　このさみだれになくほさゝぎす　佐野りう子

をやみなくふりにし雨に亡きひさを
　しのばるゝかなきひさのうへ　吹田たけ子

亡き人をなほしのへさやさらぬたに
　しのふたもさもぬれまさりつゝ　田代艶子

世をさりし君ししのへはわかそての
　つゆけきそてにさみたれそふる　田代綾子

わか宿ののきにしたゝるしづくのみ
　ぬれこそまされさみたれのそら　香波愛子

さみだれに亡きひさ思ひかきくもる
　ながめてしのぶなきひさのおも　藤勝よね子
　あめにはさらでぬゝるそでかれ

はれまなき五月のあめにいさゝしく
　ふりにしひさのしのはるゝかな　松田君子

さみたれのふるやのまさに文みつゝ
　むかしのひさのしのはるゝかな　大野眞佐子

いさ水のくりかへしつゝおひ出つる
　こゝろまてこそさみだれにけれ　河野通子

さみたれの降るさひしさになき人の
　しのふこゝろそいやまさりける　田村多豆子

この日頃なかめられけりなきひさを
　思ひいてよさふるにはあられど　村上操子

なき君に手むけのみづないかにせむ
　にごりにごろさみだれのころ　三宅巾枝子

君がいにしこそにかはらぬ空なれや
　はるゝさきなくながめのみして　河合縫子

夜もすゞらなき人しのふさみたれに
　まくらやうかむさこのうらなみ　早川極子

さみだれのはれまもみねすなき君を
　おもふこゝろもくもりのみして　鍋田龍子

なき君さわかれしさきのめくり來て
　たもさかわらぬつゆのあめりな　伊東千代子

たち花のかをるゆふべのさみだれに
　なきをさな子の昔時をそおもふ　伊東いさ子

日並べてふるさみだれはたれもみな
　なききみしのふなみだなるらむ　服部正子

六月五日女鑑彙題

孝女某の事を記す

天　山口縣都濃郡末武村　村上操子

今はむかし、周防國都濃郡深浦島に、正浦まさ子といへる孝女ありけり。孝女は年二十計にて、某の家に嫁したるが、夫婦の中らひいと睦ましく、舅ははやく世を去りて、姑のありけるに、何くれと心を盡して、まめやかに仕へければ、遠きも近きも、まさ女が孝貞のあつき志をほめ稱へぬはなかりけり。抑、深浦は、陸地を隔ること三里餘の孤島にして、政子もさばかり教育ある女にもあらざれど、天性ながら心ばへ優にやさしく、其の行の中には、いと感ずべき事多かれど、ことく\く記すべきにもあらねど、其のひとつを取出むに、村吏末田彌十郎といへる人、まさ女が孝心のあつき事を、詳に郡宰に告げて、かゝる人を賞せられむには、世の風教の一助にもなりなむと願出でければ、郡宰は、猶思ふ旨やありけむ。屬吏を遣はして、密かにまさ女の行爲を探索せしめたるに、郡吏は、其の容姿を變し、夜ふけて、其の家のほとりをさまよひ、戸隙より室内のさまを窺見るに、折柄冬の夜の風いと寒く、雪さへ降しきりたるに、姑は風邪の心地にて、奥の間に打臥たるに、政女は、獨り圍爐裏の側にありて、はた火をたきて、其の胸腹もあらはにかき出で、あたゝめ居たれば、郡吏も思の外なるさまに、驚きあきれたりしが、猶窃に見てあれば、政女は姑の打臥たる病床にいりて、我が肌を以て、姑の躰をあたゝむるにぞありける。さて、火氣さむれば、又出てはた火に暖をとり、幾回となくかくする程に、曉の鷄の聲のきこゆる迄になりければ、郡吏も始て、末田某の申立のいつはりならぬをしりて、其の事のよしを殘る方なく、郡宰に報命せりとなむ。只、此一事を以ても、いかに政女が孝心のあつかりしを知に足りぬべし。かくて藩主毛利侯より、其の善行を賞せられ、米若干苞を賜はり、孝女の名にちなめる、正浦といふ苗字をさへ許されたりしが、其の後孝女は九十餘歳の長壽を保ち、今より五十年前に、此の世を去しは、全く孝德の報應なりと、人皆感じあへりとぞ。維新後もさきには、地方有志者の發企にて、詩歌を四方にあつめて、其の善行を世に彰はし、今は、又碑石を建て、其の美德を不朽に傳へんとの計畫ありときく。實に孝は百行の本、其の人死

すとも、其の名のいかて朽めやは。

地　長野縣北佐久郡布施村　中澤千野子

花かたみ、香川縣、漕ぐ舟の那珂郡、本島村にうのとなん呼べる孝女ありけり。父は權四郎とて、釣糸のいと心細う世を渡る者なりけり。うの生れながらにして、世の常ならす、もとより貧しき身の學藝とては修めねど、孝貞の道正しく、能く禮節を守り、父母の奉養並々ならす、寶に銀にも金にもまさりたる少女なりけり。うの八歳の頃、母のせんは、世に厭はしき病にかゝりて、立居さへまゝならすなりぬ。うのは、まだ、春淺き若草の野邊の遊にも、立ち交らず、柳の糸の永き日も、鐵とろけん夏の日も、うまずたゆまず、身をくだき木枯ふきすさぶ夜寒の風に、目さめては、母やいかにと心をつくし、ひたすらに母の病のいゑん事のみ祈りしかひもなく、あはれ、次の年母また眼病を煩ひて、兩眼共に盲ひぬ。うのゝ悲しみいかなりけん。さなきだに、一方ならぬ心づくしの、之れよりは、其の介抱の因難いはん方なく、況して、父の權四郎、よる年浪の、此の頃は、はか〴〵しう業とることもかなはすなりぬ。重ね〲のいきことも、いかて孝女の心をたゆますべき。健けなるうのは、いよ〳〵心をふるひ、身をはけまし、家にありては、看護のかたはら、他の賃仕事、はた家のことも、何くれと立ち働き、出でゝは、父をいたはり助けて、うきめかり、鹽やき衣からき世を、二拾余年の孝女の赤心、感せぬ人はなかりきとかや。されは、夫を迎へよとすゝむる人も、しば〳〵なれど、孝養の欠けなん事を思ひて、したがはず、あたら盛りの過ぎゆくを惜ます、たゞ雨につけ、風につけ、たらちねの親の上のみ、かなしみしは、げに有難き孝女なりけり。此の事時の村長より縣知事へ申出でしに、かゝる希代の孝女は、知事のみ計らひにはなりかたしと、其の旨上申せられしより、特例にて賞勳局より賞狀賞金を給はりしと云ふ。まことや、孝は百行の基なりとか。目に一丁字なき賤か女ながら、心は貴きあや錦まとへる人とて及はしな、あはれ、こと國ふりのみうらやみて、かにのよこ文字の心まて、すぐならぬかたにはしりゆく、今世の、はやり少女のいましめぐさにとてかくなん。

人　下谷區御徒町三丁目廿四番地　岡田柳子

朝に夕べに、則の道にいそしみながら、忠孝の心ともしき人の多かる中に、東なる玉敷の都に、い

ともえがたき孝女こそありけれ。わらはこゝに、拙き筆して書つくる身も、この孝女をかへり見ては、いとゞ心やさしうなん。されどかゝる人の名の、年月ふりて、くちなむを惜しみ、かくはつゞりぬ。孝女、名は龜とて、麻布の片ほとりに、わびしく住ゐしけるが、早くも生みの母にわかれぬ。幼きより孝心そなはる少女、いかばかりか、涙に袖をしぼりたりけむ。やがて、程なく、後の母は來りぬ。龜女は、これに仕ふること極めてまめやかに、生みの母の如く、聊も、其の意にたがふ事なかりしを、繼母は、只うるさしとのみ、何事にもつれなく、いひのゝしるに、あたりの人々、いとあはれに思ひて、爲に同情を表せぬはなかりき。さるを、己がいたらぬよりと、何身をくだきて事へたりしこそ、こがねにもかへがたき心なりけれ。かくて、いそ路に至るまで、菅の根の長き年月、ひとへに、孝養怠りなく、只母が黑髮の、雪とかはるを悲しみけるが、今より二三年前、母は病の床にふしぬ。さらぬだに、孝心深き龜女は、心も心ならず、三年の間、起居不自由なる母を勞はり、晝はひねもす、夜はよもすがら、枕邊につきそひて、己はみどりの髮の、亂れかゝるを、かきなでむ暇を惜みつゝ、たゆまず倦まず、みとりに手をつくしゝが、甲斐なくて、行水のかへすよしなく、なりはてぬ。同女がなげきはたとふるに物なく、慈母を失ひし如く悲しむに、見る人、床しき心根に感じて、涙を流しきとなん。あゝ龜女の如きは、求むるともありやなしや。げに龜のよわひの萬代までも、其の名は世々に殘るらむかし。

（以下原稿到着順）

瀬下千勢子

熊野は、遠江池田の生れにして、容貌うるはしく、優しきよそほひあり。幼きより、父母に仕へて、孝心いさ深かりき。熊野十五才の秋、父にはなれ、なげき悲しみ、寢食を忘るゝに至る。又、朝夕に母をなぐさめ怠らざりしさなん。時しも平家盛りの頃、入道次男宗盛卿、ふかく愛せられ、めしかゝへられしによりて、京都に至り、花の朝、月の夕も、事へまつりて怠らざりしき、されさ、常に、家に殘せし老母の事を思ひ出し、東のそらを眺めては、袖をうるほせしこともしば〳〵なりき。一日宗盛卿、東山に花見し時、熊野も供にまゐりたり。今を盛りさ咲きてのこらぬなりなれば、皆々樂しく酒汲かはし、日の暮るゝをも知らで、浮れたりしも、熊野は始終物思はしげに、うつ〳〵さして樂ます、宗盛卿あやしみて尋ぬれば、涙おしぬぐひて、

いかにせん都の春もをしけれさ馴れし東の花や散るらん

さ詠ぜしかば、宗盛卿、いたく、其の至孝に感じ、厚く餞別なさ給ひ、やがていさまをつかはしきさぞ。

岡田はる子

あはれ孝女、名は何といふらん。家はいづこなるらん。人のゆききもまれなる片山里に、すみぬとはきけど、其のいさをその行ひは、中々につゝめる梅が香の、いみじくて、風のたよりに通ひ行きしこそ。げに賤が身にはありがたき事なりけれ。家いと貧しきに、父には別れ、養ふべき母さへ、輕からぬ病の床につきぬ。まだ若草のうらわかき身は、いかに心をなやましたりけむ。よのつれのをみならんには、あやにしききぬきはんことなのみねがひ、ぬば玉の黑髮くしけづるを事とする齡なるを、すぐれたる人の、いかでさることかあらむ。ひとへに母の病をのみうれひ悲しみ、朝に夕に、心をつくして、いたはりつかへ、貧しき中にも、好むものとしいへば、求めて參らせ、扨は人に雇はれてわづかの價を得るなど、母の身はいかにたのもしく思ふらん。いかにいとほしとや思ふらむ。あはれ頑きいたづきも、此の少女がまごゝろには、何とて敵しぬらるべきかは。やがては、打まけておこたりなん。あなたのもしの少女子よ。若竹のすぐ〳〵と生ひたちて、いかで床しき家庭を作れよかし。

佐々有鄰子

孝女あり、名を済子といふ。熊本菊池郡城北村の、父を村上忠三郎、母を志濃子といふ者のゝひとり娘なり。男子なければ、行末は婿子となすべき女なりとぞ。済子が家は、世人のいふところの、水のみ百姓にて、朝夕のけふりさへ心にまかせぬくらしなりしに、母の志濃子は、娘が十四歲の時の秋、俄かりに田の面に出ゆきしが、はからずも、石につまつきて、腰骨をしたたかくじきて、足なへとなりぬ。歩行かなはずて、病床に打ふしぬ。済子は、かれんの少女なるに、貧困の父のくらしを助け、母の看病をば、身ひとつにひきうけて 父の農業に、さしつかへなきやうに、よくはたらき、夜になれば、終日ありし事どもをば、母にかたり出で、病苦をなぐさめ、看護おこたりなきこと、二十五年のひとしき、一日のごとくなりしも、七十八歲にて、身まかりぬ。父の忠三郎も、八十五歲の天命を保て、本年四月廿九日病死せり。父母ともに、済子の篤實の孝養によりぬとて、村長より褒賞のことを上申せしといふ。

人はみな小みちによらでひとすぢの
大道にこそよるべかりけれ

宇高松子

よき行といふ行のなかにても、孝ばかり大なるよき行はあらじかし。世に忠臣節婦とたゝへられ、仁人君子と尊まれて、千歲の後の世に、尙、其の名のかゞやく人を見るに、大かた孝子の門よりいでざるはなし。實に、古人の、孝は百行の本なりとのたまひけんもうべなりかし。物事の進み行につれて、人情のうすくなり行く今、の世にはもとより、古にも類少なき孝女こそあらはれたれ。其の名は、萬代も久しかるべき絁女とて、舊幕臣、長岡己之吉といへる者の娘にして、今年五十一歲に至るまで、始めおもひ極めし心にたがはず、賤しき家業を營むには似もやらで、浮たるうはさなど、聊もたてられし事なく、女の操をいとかたく守りし、世にも稀なるおうななるが、幼なくして、慈愛ふかき、母を亡ひ、其の後引つゞき、父は維新の變革に杖とも柱とも賴みし、秩祿にさへはなれたれは、俄に糊口のたつきを失ひ、よるべ汀の捨小舟、かなたこなたにさまよひをりしか、遂に詮方つきて、昔は樂しみに習ひ覺えし長歌の、いと堪能なりしを幸、そが師匠となりて、心細くも、かめ女をはぐゝみけるこそ哀れなれ。さる程に、すゝむる人あるまゝに、おべんと云へる後妻を迎へけるに、かめ女は素より、いと優しき生れなれは、世になき母のよみがへりし樣に

よろびかしづき、眞心もて事へたれど、こゝろひがめる母は、そを婿しとも、いとほしとも思ひたらず、いとつれなくもてなしゝが、間もなくおよしとなんいへる娘をまうけゝる。大方のものならましかば、わが思ひ子におもひくらべて、少しは哀の露もかくべきを、然はなくて、たゞ己の生みたる兒をのみいとほしがり、翁女をあらずもがなと思ひけるに、却ておよしは、命短かく、世を早くせしかば、かたましき心は、いよ／＼かたましくなり、まさりて、少の事にも、打腹立ち、言葉あらく怒りのゝしり、はては罪もなき翁女を打たゝきなどする事も、月毎なれど、露そを恨む心はなく、何事も己の至らぬ故と、身をせめて、一向心にさからはじとぞつとめける。かくて、追々年頃にもなりもて行けば、嫁にあるは婿をと進むる人と數多ありたれど、翁女は、親事へのおこたらん事を恐れ、かたく辭して、妾はいつまでもかく獨身にて、父母に事へんこそ、此上なき樂しみなれとて、うけがはざりけりとなん。たれかこを聞きて、袖をぬらさゞるものあらんや。かゝる程に、明治二十二年中、其の父、老の病にかゝりければ、さらぬだに孝心深き翁女は、日夜枕邊さらず、醫藥はさらなり、みとりに心をつくせしかど、限りある玉の緒は、孝女が手にもつなぎ止むるすべなくて、終にはかなくなりければ、翁女の悲しみは、たとふるにものなく、おなじ道にと歎きしが、かくては、母の力をおとしやせんと、やう／＼雄心ふりおこして、父の遺業をつぎ、弟子を愍に、みちびきつゝ、いよ／＼ます／＼母に孝養をつくしけるが、明治三十年中、母も又足腰かなはぬ身となりて、病の床に打ち臥しければ、翁女のおごろき一方ならず、日夜心をくだきて、三年のながき月日を、一日のごとく倦まず、たゆまず、ひたすら全快をいのりしかひもなく、かへらぬ旅におもむきければ、同女は生の世に別れしにもまして、身も世もあらずなげきかなしみしが、かくてあるべきにあられねば、涙ながらに、野邊の送りをいとなみて、後のとひとぶらひいと懇に、在すがごとくつかへつゝあるを、いつしか、公にきこえて、先つ頃、東京府知事より、褒賞を給ひ、此度また麻布教育會頭、伯爵東久世通禧の君、彰善會長高崎正風の君達より、いと尊き頌德狀を贈り給ひけりとぞ。實に有難き事ならずや。こは都のある新聞紙にものせられたるをいみじう哀れに、尊くも嘉はしき人の行やと、おもふまゝを記し置て、朝夕己が心の鑑となし、かつは愚なる身にもせめては、其のかたはしをだにまねばんものをとて、かくなん。

高砂き代子

去にし嘉永の頃かよ。まつりごとまだ、かしこきの御手に復らで、國主治め給ふ時、松平丹波守の領内にて、里は何れか覺束なきは、示しあげれど、伊藤某とて、昔は巨萬の富なりしも、いま／＼しき事の打續きて、遂に、家さへ保ちかぬべくほろびたれば、片山里にわたらひしけるに、其の名を國とて、一人の愛女ありけり。あだし人にも打勝れて、天性さかしく、生れ賤しからぬが、かへる貧しさに、教の庭にも入れあへず、十七歳ばかりの幼きより、父に從ひ、朝には夙に起き出て　、柴を分け、夕は遲く月をふみつゝ、薪木こる父がたづきの助をばしゐるに、あなうたてやな。國女、甫めて十歲の秋となりたる時、父かりそめのいたつきとて、病の床につきけるが、それより日に／＼重り行きて、みとりにおろかはなかりしも、三月あまりの長いたつきに、萎れて行く秋の木葉と共に、哀れや此の世を去りにけり。國女はなげきにたへず、明けくれ涙に沈まれて、折々は思ひたへては墓に詣でし事、日に幾度か、戀ひ慕ひつゝ忍はれしが、月日過ぐる程に、やうやう歎きも忘られ、今ば殘りし母をこよなき頼めとかしづきつゝ、猶も家業を怠らず。山に行きては、柴を掻き、畑に出でゝは草を

取りつゝ、貧しき中にも、細き烟を立て居りしに、いかに憂たてき浮世とは云へ、明くる年の夏なかば、一人の母君、風邪のきみとて、またも病につかれけるを、いかにせん十歳あまらぬ、少女子が、いかでたづきとなるべきぞと、母は歎き沈けるを、國女は母のいたつきますに、いかで心を苦しめじと、朝とく起きては、人の使し、晝は人に雇はれ行き、夕べは山に薪木をこり、とり得たる賃金にて、母が藥を買ひ求め、あまりをもては、米を買ひ、苦しき中にも、其の日の烟を立てつるが、夜には母のみとりに更かして、一日も早くいえ給へやと、晝夜の別なくつかふまつるに、いかにせん、いゆるにひきかへ、いよ〳〵重り行を、國女いたく心を痛め、いかにもしてと、百方心を碎だかれつゝ、我衣さへ藥にかへ、冬に至るも褞袍をまとはず、夏來るとも蚊帳も張らず、母の蚊にせめられんを恐れては、團扇の風に蚊を遣りつゝ、いと更けやすき夜も、夢まどろまで、枕の元にみとりしつ、かゝる事、三年あまりに渡られしも、猶一日の如くつかふまつるに、世に聞きあへる人々は、孝なる心に感じつゝ、噂高かりしが、傳はり〳〵て、やがて國主に聞こえまつるに、其の孝なる心ばせをいみじう譽し給ひ、黄金米など賜へしに、猶も感のあまりにとて、一生のふちさへ賜はりぬ。あなゆかしき少女にこそ。されど、こは古への事共にて、事たる今の大御代に、學深く、德高く、敎へ直しき、閨たちには、かゝる苦しき事こそあられ、唯身に以てるまごゝろを、君と親とにつかふまつりて、朝な夕なのかしつきにも、たらちねの親のおふせに、そむき玉はねこそ、これ孝なりかし。

河原芳子

孝女、名を花といひ、某の村はづれにいとあはれなる住居をなして、年久しういたづきにふしなやめる母をみとりし、そのかたはら、心細くも日々の烟をたてうべくたつきにつとめ、ひたすらに心つくせど、そのかひなく、母のいたづきの、日々にたゞたさしうなりゆくものから、花は心も心ならず、いみじう悲しみ歎き、いかにもしてと思ひ煩らへど、藥師招かんもまゝならず、いざとて、常に信しまつる、八幡の神に詣でゝ、御恩賴をかゝふりまつる外なけんと思ひきはめ、あした人の起きぬ先にいたり、夜は更たけてより詣で、ひたすらにこひのみまをすことを、神もあはれときこしめしけむ、三七日の立願をへたる頃より、やう〳〵に輕びゆきて、あるはこゝろよき笑顏さへ見するやうなりたるに、花の喜びは何にたとへん。いよゝいそしみて、母につかへ、たつきをはげみ、日毎かゝさず、神のみ惠を忝げなみて、詣づるほど、人皆のかゝみと仰かれ、口きたなき噂人さへも、色も香もある花の赤心こそ、たふとけれと、今なほたゝへあへるぞめでたかる。

福原菫子

一日、いとつれ〴〵なるまゝ、諸々の草紙などくりひろげ讀みもて行きし其中に、いとも哀に尊とく感ぜしは、孝女の傳なりき。其の名は、いまとて、大和國竹内村の人、不幸にして、早くより夫にわかれ、操正しく一生をやもめにておくりけるとか。舅ありけるが、よろずまめ〳〵しく、つゆさからふ事なく、よくつかへまつる程に、舅疾に臥しければ、いま女の驚き一方ならず、日ねもす夜もすがら、癈盞にのみひたぶる心を盡しけれど、其の驗更になく、食事せられざる事十日あまりにもなりければ、女が心配たとふるに物もなく、進めまゐらす好きものもがなと、案し煩ひける程に、一日舅の鯉をと望みければ、女喜び勇みて、直ちに供しまゐらせんとせしかども、片山里のかなしさ、いかで容易に求め得らるべき。とかく思案にかきくれ、夜となりけるが、厨の方にはかに物音しければ、あやしみて至り見れば、俎の其中に躍れ

ろなり、いたく喜びて、早速煮て母に進め、やがて の[illegible]も癒しさか。あゝ孝なるかな。さればにや鬼神も至孝の德をあはれみ、其の眞心をこめたる行ひに感じ、靈現を下し給ひしならんと、さふさくかしこくて、感涙に袖を絞る外なかりき。

熊本縣菊池郡木野尋常小學校にて教員生徒一同に五月十日の 午前皇太子殿下 の御慶事奉祝式につらなりて

佐々小琴子

妹脊山天地のむたうごきなく
ときはかきはにさかにますらん

佐々有鄰子

松の千代竹のよろづ代相生の
みどりふかめてさかにますらん

左々富枝子

八千手を打かはしてぞ祝つる
日つぎの太子の千代のさかにを

中澤千野子

御慶事奉祝の詞

かけまくもあやにかしこき、すめらきの、日つきのみ子にそふ節の、たけのその生のいやしけく、さかへましつゝ高みくら、いよいよかたき大み代の、千ひろのかけをおほきつゝ、祝ひまつろひもろともに、うたひてあれはうちなひく、たけのはやしに千代千代と、さへつるとりのこゑそにきほふ。

いかにして祝ひまつらんさゝれ石の
うたへさつきぬ今日のよき日を

若たけのふしたちのほろみその生に
八千代をよはふつるのもろこゑ

かたなの妻

山代由子

ますらをも及ばざりけりうちかへて
かたなのかぜに木葉ちりゆく

細川忠興の妻

うるはしき香はのこりけりふく風に
なびくともせでちるをみなへし

枕

高砂き代子

よひよひにさりあつめたる思ひをば
まくらやしらんこころはづかし

山家首苗

山賤のまめまく時となりぬらし
にひ畑見ねてをはさなくなり

田家郭公

さ苗とる時はきぬらしにひはりの
山田のすゑにほゝきすなく

朝鮮國船路の日記

長野孝子

庚子年四月十五日、いよく朝鮮國へ旅たつべき日となり待なりしに、朝よりいたく雨のふりければ、

ふる里につきぬなごりのわかれ路を
そらにもしるか今朝のはるさめ

なにくれと旅のよそひもとゝのひて、午後四時よりすみなれし門の戸を立いでゝ、朋友におくられ、植木停車場にくれすぎにつきぬ。あるはたごやにおくりの人々と月をながめて、夜のふくろまで、物語してふしどにいりぬれは。

たびごろもかたしく袖のまくらには
かりねのゆめをむすびかねけり

さかくするまに、東方しらみそめぬ。十六日の一番滊車にのりて、大牟田、久留米などなどもうちすぎて、はる田といふ停車場のありければ、

　さきに匂ふ菜の花さかりのごかなる
　　はる由のささそすぎうかりける

筥崎の松原をながめて、

　きてみればめづる言葉もつきにけり
　　きゝしにまさる千代のまつはら

午後四時ころには、門司港につきぬ。朝鮮國へゆく滊船尾張丸にのりうつりて、口すさみぬ。

　今日こゝに海路をわたるうひたゐに
　　いろはの文字をならひそめけり

やがて船は、進行をはじめ侍りしに、空くもりて、玄海にさしかかる。こゝは、よいよい浪風高くなり、枕もさられざれども、

　いさましくさかまく灘のおぼなみを
　　くだきてはしる火のくるまのふれ

　わけなづむうきよの浪にくらべては
　　うみのうへこそしづかなりけれ

終夜まくらに浪の音を聞て、越方行末のこゝさまざまおもひつゝくるうちに、いつしか曉ちかくなりぬ。十七日、午前七時ころに釜山港につき侍りしに、むかひの人々にうちかこまれて、親族の永瀬家につき。旅のつかれをやすめて、明治廿三年四月十八日、夕日影てりかはす、西窓のもさにしるしぬ。

長野孝子

朝鮮國に渡海すさて師の大人にまゐらす歌

から國のさらふすやまにわけいらば
　たれにさはましまきしまのみ

今様

くらき此の身をしきしまの。道にみちびきたまひつる。深きめぐみはわするべき。時こそなけれさとしへに。



史談（補遺）

精華

學園

漫録

臨時 發刊

國光

初版の二萬冊は旬日を出でずして販布し再版の五千冊またたちまちにして盡く更に三版を增刷して江湖の希望に副はむとす

今や人心の頹廢風俗の淫靡は底止する所なく邦家の將來洵に痛憂に堪へざるものあり國光臨時發刊は即ち以つて惰眠社會の警鐘たらむことを期する者なり（本號に限一冊郵稅共金三十錢）

臨時 發刊

女鑑

再版成りぬ

女鑑第二百號發刊日ならずして既刊の部數を販布したり久しく愛讀者諸孃の望に應ずる能はざることを憾とせしが今再版成りぬ即ち之を愛讀者諸孃に告ぐ（本號に限り一册郵稅共金二十錢）

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社

此廣告に由て御注文の方は女鑑廣告に由ると御附記を乞ふ

女學 姫百合 雜誌

毎月一回發行

定價郵税共一冊金拾錢

今の教育は智育德育に重きをおきて美育を省みず。今の女子は自信なく自ら以て劣等の性となす。今の思想は國家の差別を忘れて世界の平等を夢む　今の女學校は國家教育に務めずして宗教々育につとむるもの多し。また今の紛々たる婦人雜誌は意氣なく、大主張なく、唯これ營利に狂奔せるものなり。此の逆路にある日本婦人の爲に盡さんとして現はれたる一大女學雜誌は實に我が姫百合なり。本誌一面に於ては完全なる家庭教育のためにつくして、一面に於ては日本婦人の保護者となり、大に婦人の爲に言論し、尙他の一面に於ては日本婦人の良友となり樂を相分たんとす。本誌生れて僅に五閲月しかも大に好評を博したるものは故なきにあらず。けだし姫百合をおきては他に完全なる婦人雜誌あらざるなり。

六冊五十五錢十二冊壹圓

郵劵代用一割増

明治卅三年　第二卷第一號要目　五月廿日發行

發行所　東京四谷區右京町廿八番地　姫百合社

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

國光社雜誌部

社告　女鑑每月五日、廿日、發行

定價		
一冊	拾錢	全國無遞送料
六冊（三ヶ月分）	五拾五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込のこと拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京[illegible]郵便受取所、受取人は東京築地貮丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割增

領收　別に領收證を出さず金員領收は上直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」へ會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納郵稅の來書は一切受取らず

廣告料	
一行（五號活字廿三字詰）	金二拾五錢
半頁（一行三十詰）	金六圓
一頁（二段六十行）	金拾圓

料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年六月四日印刷
明治三十三年六月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木頁雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

寶石入指環



(一)　(二)(三)(四)　(五)　(六)(七)(八)

ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價八拾五圓●乙價
七拾五圓●全眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙
價參拾圓
ダイヤモンド入甲價參拾圓●乙價貳百八拾圓
ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓
ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓
ダイヤモンド及エメナルド入甲價百五拾圓●乙價
百貳拾圓
ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓●乙價百
七拾圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙
價百五拾圓
ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●全
ルビー及サッノアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓
ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓
眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外郵送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレハ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレハ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戾シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ



妙技一等牌賞

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

天賞堂

東京神田小川町（電話本局二一六〇）
天賞堂小川町出張所

横濱尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂横濱出張所

大阪心齋橋北詰（電話東七三三）
天賞堂大阪出張所

名古屋市玉屋町二丁目
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市上鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市今鍛冶屋町四十番地
天賞堂長崎出張所

福岡市橋口町榮屋方臨時
天賞堂福岡出張所

北海道小樽色內町越中屋方臨時
天賞堂小樽出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）